始

324
364

大僧正本多日生師講

國民思想講演集

324-364

帝國圖書館藏

本書は大正二年夏約二ヶ月に亘り第拾五第七第八師團各隊及び地方公私の諸團體の爲に大凡百二十回聽衆無慮七万五千に對する本多大僧正の講演を輯錄したるものなり

天晴會豐橋支部

大正
2.11.17
内交

國民思想講演集

國民思想講演集

目次

現代思潮に就て……一
序　言……一
不健全なる方面……八
第一、科學萬能の弊……八
第二、懐疑思想の弊……一三
第三、個人主義の誤解……二〇
第四、博愛主義の弊……二五
第五、固陋なる國家主義の弊……三二
第六、現實主義の誤解……四〇
健全なる方面……四五
第一、統一的文明の建設……四五
第二、理想的國家の發展……四九
第三、國民性の發揮……五五
第四、調節的道德の唱道……五九
第五、我國思想史の統一觀……六六
一、惟神道の性質及學派　二、儒教の性質學派
及其日本化　三、佛教の性質及其日本化
結　論……八七
國民思想の統一觀……九七
序　言……九七
一、惟神道の起源性質……一〇五
惟神道の起源　惟神道の性質
二、儒教の性質及其日本化……一一一
儒教の性質　儒教の日本化
三、佛教の性質及其日本化……一一六
佛教の性質　佛教の日本化
結　論……一二〇

露光量違いの為重複撮影

現代思潮に就て

目次

國家歡念に就て……一二三
序言……一二三
諸種の國家觀念……一二三
御國體に關する諸種の見解……一二八
予の御國體觀……一三一
御國體の附屬的特色……一三九
結論……一〇
教育と宗教……一五
日蓮主義の梗概……一七七
日蓮主義の輪廓……一七七
一、日蓮主義に對する世人の考察……一七八
二、日蓮主義とは統一主義なり……一八二
三、統一主義の出所……一八五
日蓮主義の內容……一八七
一、生活問題の統一……一八七
二、道德問題の統一……一九一
三、智識と信仰の統一……一九六
四、日蓮主義の宗教的地位……二〇〇
雜之部……二〇七
崇高なる德義心と營內生活……二〇七
士規七則……二一七
誠心……二二六
誠心の力……二三五
感孚……二四一
兵營生活に就て……二四八
何を以てか之に報ゐん……二五七
附錄……二六五

露光量違いの為重複撮影

現代思潮に就て

國家歡念に就て……一二三
序言……一二三
諸種の國家觀念……一二三
御國體に關する諸種の見解……一二八
予の御國體觀……一三一
御國體の附屬的特色……一三九
結論……一〇
教育と宗教……一五
日蓮主義の梗概……一七七
日蓮主義の輪廓……一七七
一、日蓮主義に對する世人の考察……一七八
二、日蓮主義とは統一主義なり……一八二
三、統一主義の出所……一八五
日蓮主義の內容……一八七
一、生活問題の統一……一八七
二、道德問題の統一……一九一
三、智識と信仰の統一……一九六
四、日蓮主義の宗教的地位……二〇〇
雜之部……二〇七
崇高なる德義心と營內生活……二〇七
士規七則……二一七
誠心……二二六
誠心の力……二三五
感孚……二四一
兵營生活に就て……二四八
何を以てか之に報ゐん……二五七
附錄……二六五

現代思潮に就て

（旭川衛戍將校の爲に）

序言

今回は地方人に國民思想を鼓吹し、軍隊に精神講話を致すために出張したのであります。軍隊の精神教育は將校が擔任せらるゝ事と相成つて居りますので、無論充分の事と存じます。然し兵營内に生活せる下士卒も新聞雜誌等を通して現代社會の惡思潮の影響を免れないので、萬一一人なりとも不健全なる思想に侵さるゝ者があつては遺憾の事でありますが、現に姫路の懲治隊には不健全なる思想に侵された者も收容せられて居ります。自分は懲治卒の爲に講話を致しました時同隊長から種々聞き及びまして、思想問題は軍隊に於ても次第に大切の度を增す事と感じました。思想の問題は複雜でありまして、多忙なる職務を有せらるゝ諸君が充分に御研究相成る事は餘程難い事と想像せられます。夫れで自分等の如く思想問題に從事して居る者が時々參りまして講演致しますのは、何等かの御參考になる事と存じます。

さて今回は現代思潮に就て健全なる方面と、不健全なる方面との大要を申述べやうと思ふのであります。

軍人の精神教育は將校が擔任せらるゝは無論であり、軍隊内務書を拜見すると『將校は一國元氣の樞軸なり』とありますれば、單に戰場に於ける勇氣のみでなく、平素國民思想の樞軸とならるゝのが將校の本分である。之に就ても將校諸君の責任は非常に重大な事であります。單に軍隊の兵卒に對してのみならず、其の軍人が在鄕歸休の兵となり、又彼等が接觸する社會、廣く云へば國民全体の精神に就て、將校諸君がその中樞となつて一國の元氣を支持せらるゝので、かゝる意義より考へますれば思想の事は直接諸君に御關係のある事と信じます。無論かゝる覺悟は常に行き渡つて居るのでありませう。自分が御交際して居る將校中には、軍人精神の鍛錬は遺憾なく行き渡つて居るとの事を、極めて強い言葉で證言せらるゝ方があります。丁度宗教の信者が自分は充分なる信念を有すとの事を確言すると同じで、信念としては極めて結構な事であります。然し宗教に置きましては如何に信念が決定して居つても、更に々々教義を聞いて之を陶冶し銑錬するを怠らぬ事になつて居る。やはり軍人に於ても精神鍛錬は普及して居つても、益々陶冶銑錬を加へ十二分の發揚を要する事と存じます。今上陛下登極の初め軍人に賜りし御詔勅に、思索の撰を愼むべしと御示し遊されしは、現代の社會が思想上に動搖を來して居らなければ、斯くは仰せ遊されぬ事と恐察し奉るのであります。然らば社會の思潮に對して此の御聖旨を奉戴して、嚴密なる講究を遂げ、徹底せる見識を格守せらるべきである。

又　先帝陛下の御震翰を拜見致しますれば、

朕道ヲ學ブ豈一二年ニシテ止マンヤ將ニ畢生ノ力ヲ竭サントス、

と御示し遊されて居る。佛教の譬諭には、舟を川へ泝すには充分なる努力を間斷なく加へねば決して進まない、油斷すれば直ぐ下流へ押し流さるゝのである如く、如何に精神を鍛錬して居ても之で宜しいと油斷すれば、恰も舟を河流に放ち置くと同樣で直ぐ退歩するのである。故に常に注意を加へて所謂畢生の力を竭さねばならぬのであります。

且つ又思想問題の恐るべき所以は、權力を以て壓迫すれば形の上に於ては服從せるかの如く見ゆるも、精神に心服しなければ却て反抗力を高むるのである。恰も空氣球を水中に壓へ込むと、手を放つ時又鶩の如く水面に浮き上る如く、人の精神に蓄積した不良な瓦斯を其の内面から拔き去る事をせずして、唯外部から權力を以て壓迫すれば、注意を怠る時舊の如くに不良の心が現れて來る。古聖賢の語に

三軍の帥は奪ふべくも匹夫の志は奪ふべからず

と云つてあるが、一匹夫の志と雖も決して蔑視することは出來ない。玆に思想問題の恐るべき所以が存して居るのである。

彼のローマ帝國は何によりて滅亡したか。ローマは早く開けた國で政治文藝等の進歩が著しく、形体上から云へば現今の進歩せる國家と比肩し得るのである。然し唯形体の上にのみ注意して人間精神の事は之を自由に放擲し、遂に國民思想の分裂と腐敗を來し、之に乘じてキリスト教が侵入してローマ帝國を覆沒し、千有餘年の長きキリスト教の教會政治と相成つたのであるが、之に依つて考へても國家の健全なる發達を念とする者は、形体上の事とともに精神の方面を重視せねばならぬのであります。明治維新に就て考へましても、德川氏は種々の方法を講じて封建政治の一日も長からんことを努めたのであるが、其の努力は形体の上に注がれたので、思想の方面から學者の間に勤王の大義を唱ふるものが出で、水戸光圀卿とか山鹿素行先生等の門弟によりて、遂に封建政治を倒して維新の大業を成就するに至りました。

現今我國に於て軟弱なる思想、危險なる主義、薄志弱行の徒が、恰も水がチョロ〳〵流れて居る如くに彼方此方に生じて來たが、何時之が合して奔流とならぬとも限らぬ。群衆の心理は善き事は傳播力鈍きも、惡き事は極めて迅速に甲から乙へ、乙から丙へと傳はるものである。

先年東京に起りし日比谷の燒打事件の如きも、彼が如き騷ぎに立ち至つたは極めて少數の者の思想からであります。初め河野廣中氏等が國民大會を開きましたのは決して彼が如き考は有して居ない、國民精神の昂進せる機會に乘じて危險主義者が之を利用したのであります。此の事は餘程後に發見されたので、國民がポーツマスの條約に激昂してをるのを利用して、平素勞働問題の爲に警察に對して抱いて居る怨を報せんとして、交番を燒き警視廳を敵としたのである。之によりても群衆心理の恐るべき所以が知らるゝのであります。又所々の鑛山に於てストライキが起つたり、東京にも年末に際して電車の同盟罷工が起つた。かゝる事柄は所謂霜を履んで堅冰至るでありまして、其所に思想界の警誡を要すべき所以は充分に認めらるゝのである。

軍隊にしても兵士の内に一人二人惡思潮に侵されたものがあつたならば、積極的行動としては恐るゝに足らないが、艦ならば滿鐵に故障を起さすとか、陸軍ならば糧秣廠に火を放つことによつて、引いて軍全体の行動に大影響を與へ得るのである。故に一人々々の思想を精査し鍛錬する必要が充分に存して居るのであります。

加之彼等危險主義者の恐るゝは單り軍隊のみである。何等かの手段により之を侵さんと專心謀策して居るので、彼等は國家の法律をも警察力をも決して毫末も恐れない。彼等は軍人生活の艱苦欠乏に

堪ふるに就て、普通人より激しき訓練を加へらるゝを奇貨とし、兵役は野蠻時代の血稅なりと嘲りて兵士の心を惑はさんと試むるのである。彼等は少しにても機會あらば之に乘じて或は煽動し或は誘惑せんとするので、秘密出版物等によりて巧に監視を冒して軍隊に侵入せんとして居るのは、他國には實例が少なからぬのであり、つまらない一枚の印刷物でも之を讀むものが教育なき時は惡思潮に侵さるゝことなるのである。自分は之等の出版物を實見致しましたが、彼等の說く所は實に巧妙なる詭辨で其の誤謬を發見し難きやうに出來て居る。非常なる熱心と努力を以て多くの材料を集めて下層民の心理を研究して、挑發的煽動的の語句を列ねて居るのである。少し高い理想と充分の精神教育があればよいが、無教育の者は欺かれ易く出來て居る。現代は種々の惡思潮が續出して居りますが、中にも尤も警誡すべきは無政府共產主義即ち社會主義と呼ばれて居るものである。社會主義を辯護せんとする者は穩和なるものと猛烈なるものとの二派ありと云ひますが、然しそは單に手段の異るのみであつて、其の目的に於て國家を破壞せんとするは全然同一である。爆彈によるか文書言論によるかの相違あるのみであります。彼等の說く細民救濟の如きは國家的社會政策によりて成し遂ぐべき事で、國家は無論貧民を放棄して顧みないものでない。細民救濟は現在の國家の組織に於てなし得らるゝ事で、寧ろ國家の隆盛と相伴つて益々其の救濟の實を見るべきである、然るに之を國家を破壞せざれば成し遂げられぬ如く稱道する所に、甚しき詭辨が包まれて居るのであります。要之社會主義なるものは之に穩和と猛烈とを區分するの必要はない、其の國家を否定する点に於ては全然同一なればである。そして彼等は何れの國に於ても唯一の目的として軍隊を犯さんと企てゝ居るのであります。

更に注意すべき事は彼等は文藝の衣に隱れて其の惡思潮を傳播せんとする事で、表面より其の主義を說くに非ずして小說詩劇等の衣に隱れて、不知不識の間にその主義を吹き込まんとして居るのである。或る聯隊に於て發賣禁止を命ぜられし如き危險なる雜誌を發見した事もある故、充分嚴重に監視せられ居るにしても、巧妙に文學などの衣を着て居るのでありますから、かゝる上にも注意あらんことを望むのである。兵士には不健全なる文書は一切讀ませないがよろしい。少しは嚴重に失しても宜しいと信じます。不健全な雜誌によりて教へられねばならぬ事は少しもありません。寧ろ吾人は讀まねばならぬ有益な書物を山の如くに有するのである。

思想の問題は互に連絡を取つて起つて來るもので、單獨に社會主義のみ起るものでない、之を助くる者が多々あるので、丁度軍隊に步兵騎兵砲兵工兵等あり、互に連絡を取つて敵に當る如く、思想界にも色々のものがあつて、危險思想を中央隊とし、其の左翼となり、右翼となり、斥候となるものが多々あります。故にこれよりその思想の不健全の方面に就て申述べやうと思ふ。

不健全なる方面

第一、科學萬能の弊

今日の文明は科學の力に依つて進歩發達したのは事實であるが、又科學に依つて弊害を産みし点が少なからんのである。所謂活人劍は又殺人劍でありまして、文明を稗益した科學は他面に文明を毒しつゝあるのであります。科學は總て人生の問題を器械的に解釋し、人間の精神的靈力を認めない。誠心の力と云ひ、靈の力と云ひ、犧牲の精神と云ふが如き崇高なる方面を否定するのである。隨つて御國体に就て申しますれば、國を肇むること宏遠に德を樹つること深厚と仰せられた、仰げば彌々高く鑽れば彌々堅き、深遠崇高なる御國体の尊嚴が解せられなくなる。生命を捧げて之を擁護せねばならぬと云ふ崇高なる道義心を顧みない。一通りは國家の大切な事を説くとしても、彈丸雨飛の中に立つて大君を思ふ忠誠の精神、笑つて死につく樣な熱情を養成することが出來ません。御皇室に備つて居る一種云ふ可らざる御稜威の御力も解らなくなる。御稜威の御力は科學已上に存する一種の靈力であります。この靈力が國民に感孚して億兆一心の忠愛の觀念となり、軍人の精神に感孚して武士道となり、大和魂となり、各國に比類なき忠誠となつて發現するのであります。この靈力の感孚する所は私

人としては刑罰に觸れし罪人でも、國民としては監獄にありて國家の萬歳を祈る赤誠を發揮するのであります。他國では決して見る事の出來ない光景である。人殺しをする樣な極惡の罪人でも、御皇室の事に對しては心の底から御隆昌を御祈りするのであります。科學ではかゝる國民性を單に祖先の遺傳であると云ひ、御皇室に存する御稜威の靈動を解し得ないのである。

又單に科學に依つて一切の人事を解せんとする時、其の弊の走する所祖先崇拜の精神をも破壞せんとするに至るのである。御皇室に就て申しますれば、皇祖皇宗の神靈が天津日繼の御皇統に傳はり、今上陛下の御上に御降り遊ばすのであるが、國民の家庭に就て云へば、祖先の神靈が嚴然として其家に傳はつて居るのである。今日の人は此の祖先の生命の存續と云ふ觀念を失つて來まして、祖先の墳墓に詣づる事をも忘れ、祖先の靈が其の家を護つて居ちるゝ事は一切打忘れて居る。青山の墓地へ參りましても立派な墓は澤山列んで居りますが、自ら墓地に行つて誠心を捧げて祖先の靈を御祀りする精神は非常に薄らいで居る。近來益々其の傾向があると思ふ。これ皆科學萬能の影響であります。『遠きを追ひ、終を愼めば、民德厚きに歸す』とは聖賢の敎であるが。この美風を全く破壞するは慨はしき次第であります。親は勝手に子供を生み、又勝手に愛したものである。然るに子供に向つて孝養を要求するのは不當である、と云ふやうな事を云ふものが出來て親の恩を認めない。かくして孝養の美

風忠君の精神が共に次第に薄くなるのであります。

彼の幸德秋水は大逆事件を起すに當り左の如きことを云つて居る。『日本人は一種の迷信を有す。即ち皇室に對する迷信を打破して、之に向つて科學的研究を進めよ』と。此の言葉は彼等が常に唱へて居つたのである。御皇室の尊嚴なる所以、御國体の崇高なる所以は幽玄微妙であるから、幸德等はこれを覆さんが爲め國家的結合の中堅を破らんとするので、之に由つて科學的研究を鼓吹したのであります。然るに御國体を擁護し、國民道德の發達に努むべき教育に於て、深遠なる道德を忘却し、科學的萬能の弊に流るゝは、間接に幸德秋水が御國体を破壞せんとした考を助くるにも當るのである。

多年我國に居住せる一外人は左の苦言を呈して居る。

現今の日本人は日本主義國家主義と云ふ事を盛んに唱へて居るが、然し科學萬能の思想に基いて居るから、却て國家の根本を基礎より覆さんとするものである。何となれば科學のみに依れば日本の國体の淵源する所も、祖先に對する觀念も、犧牲の精神も、武士道の精華も次第に消へ失せるからである。然るにかゝる恐るべき毒思潮が盛んに國民の思想を侵しつゝある。而もその事に氣がつかぬ程日本人が馬鹿であるならば、如何に學校等で國民道德の涵養に努めて居ても、漸々人々に國家觀念が薄らいで行くであらう。之を十年の後に徵せよ。

彼は此の事を今より十數年己前に申しましたが、今日になつて考へると、學校等で盛んに國民道德を說いて居るのに、何だか一般に忠愛の精神が薄らいで來たかに思はれる。是れ亦科學過信の弊であると思ふ。

昔の忠臣義士にしても、又今の忠勇義烈の人々にしても、眞の日本武士は決して科學万能主義と相容れない点がある。例へば諸君の模範人物である楠公にしても、楠公の忠義の心は思想の上から云へば神明佛陀を信じ、自分の靈は不滅であることを信じて居ります。最後に戰利あらずして自刄するに際しても、七度生れて國賊を滅ぼさんと云ひ、『雄志七生深』と云はれて居るのであります。

然るに今の科學にては靈の不滅を否定する。曾て中江兆民が『一年有半』と云ふ書を著して東都の紙價をして高からしめた事がある。彼は續いて『無神無靈魂論』を書いた。其の中に菅原道眞公は今日では北野天滿宮と稱して多くの人に尊敬されて居るが、然し道眞公の靈は已に亡びて無い。天滿宮に行く道に落ちて居る路傍の馬糞は物質であつて千万年經つても亡びるものでない、此の方が遙かに尊いと書いた。其處に非常な危險思想が潛んで居るので、霜を踏んで堅冰至ると云ふが、幸德秋水は實に中江兆民の門弟で、その衣鉢を襲いだのであります。

彼等惡運の徒が絞首臺上の露と消ゆし時、自分は宗教上の觀念から其の怨念を救ひ、又遺族等の捨

邪歸正に資せんが爲に、弔ふ者なきものは宗内の寺院に遺骨を埋葬する樣に彼等に云つた。御皇室に怨みを懷くやうな事があつてもいけないし、佛敎にでは死する上は怨親平等と云ふこともあるから、一片同情の心を有つて其の後を弔つてやる爲め黨員の一人を訪問して、彼等同志中遺骸の引取人なき者は、丁度雜司ヶ谷に宗内の寺院があるから、そこに葬る事にしてはと話しました。所が彼は非常に立腹して

我々は無神無靈魂主義であり、我々の信仰個條は燒いて粉にして吹き飛ばせと云ふのであるから葬るに及ばぬ

と申しました。科學過信の弊は此の如き『燒いて粉にして吹き飛ばせ』と云ふに至るのである。自分は容を改めて云つた。

絞首臺上の露と消ゆし同志の骨を拾ふ事もしないとは人間の心を失へるものでないか。同志の骨を拾はないで燒いて粉にして吹き飛ばせとは冷酷である。禽獸にだも若かざる者でないか。猫すら子の死するに際しては憂の色あり、鴛鴦は配遇の死に遇へば自身も遂に殉死するに至る、鼠すら皮あり人にして禮なからんや

と告げてやりましたが、これ皆無神無靈魂の思想から來る科學の中毒であります。

又乃木將軍は、先帝陛下の崩御に際し壯烈なる殉死を遂げられました。色々と批評がありましたが、自分の見る所では辞世の歌に將軍の誠心は現れて居ると信じます。

現し世を神去りましゝ大君の御あとしたふて我はゆくなり

この歌は決して文學者の筆さきで美文を連ねた如きものでない。將軍は、先帝陛下御在世の時から忠義一徹の人で、陛下は現し世を神去りませしと雖も、大君の不滅の靈は天に在すべし。現し神樣か御用がすんでもとの天に歸られたのである。自分は今迄地上に於て御奉侍せしも、崩御に際しては其の御懷しさに堪へず、御跡を慕ふてどこまでも御側に仕へたいとの意義であると思ふ。科學者は冷やかな頭で殉死を批評しますが、その崇高なる信念と忠誠の觀念は唯々感佩するの外なく、かゝる崇高なる信念は到底科學の問題ではありませぬ。

第二、懷疑的思想の弊

懷疑は其の範圍が非常に廣いので、大別すれば舊き懷疑と新しき懷疑があります。

懷疑とは物事に判斷を下さない主義である。進化論の影響により物事は進化する者であると考へ、

そこで過程の内に眞理を發見せんとするのであります。今日の道德は明日の道德でなく、過去の道德は今日の道德でない。又今日の眞理は明日の眞理でなく、過去の眞理は今日の眞理でないと主張する。爲に確乎たる信念の基礎を失ふのであります。こゝに道德の標準を失ひ、人生問題に就ては不可解の穴に陷り、薄志弱行の徒となるのであります。先年藤村某が人生の不可解を叫んで華嚴の瀑布に投じた事がある。當時の遺書を見てそこに深い哲學思想の含める樣に考へた人もあつたが、あんな事は決して哲學ではない、科學過信の弊の走する所懷疑的獨斷に陷つたのであります。

現代の弊は一方には薄志弱行の徒を生み、他方には僞善の輩を造るのである。自己の主張に確信を有せず、どちらにも理窟があると考へ、いゝ加減の事にしておく、その日々々の出來心に任せて行動する面從向背の人、不眞面目の人が多くなりつゝあるのである。舊き懷疑主義では唯習慣に任せて行動するので、理想なく、信念なく、從來行り來つた事であるから行ると云ふ風に、人たるの信念、國民たるの信念、軍人たるの信念に於ても確立する所がない。宗敎にしても自分は禪宗であるとする、然し決して禪宗の敎義を信ずるのでない、唯先祖以來の宗旨であるからその仕來りを行つて居ると云ふ丈である。親の命日に僧侶が來て讀經する、後ろに坐つて居るが讀經が有難いからでない、尊敬するのでもなければ尊敬しないのでもないと云ふ樣な有樣が多い。之は一例でありますが凡てに就てかゝる有樣が多いのである。聖賢の道に對してもやはり信ずるに非ず信せざるに非ざる態度である。此の如く一切習慣に任せて行動する外、理想なく、目的なく、極めて薄弱な不眞面目の人となるのである。

次に新しき懷疑主義は積極的であり、其の弊害も激甚である。舊來の道德宗敎風俗習慣等に服從する必要なしとし、三千年も前に印度で釋迦の說いた敎、二千年も前に孔子が支那で唱導した事、その他キリストの敎等は今日に於ては何の役にも立つものでない。日本にも古來色々尊い先人の遺蹟があり、その根底には優れた敎の存するのに、昔の事なんかつまらない、今日とは時代が違ふと云ひ、『歷史の成蹟は明らかなる星の如し』と仰せられた詔書の聖旨をも忘却し、歷史的に發達せし道德宗敎等の凡てを否定し、而も之に代るべき何等確信がなく、唯反抗的破壞的言動のみを恣まにするのである。そしてその極刹那主義となり、刹那の衝動によりて行動すべしと主張する。連續した我、不滅の我を解せず、卑近な感情とか衝動とか本能の刺戟する儘に行動する、飲食の慾、睡眠の慾、異性の慾を恣まにせんとするのであり、而して之に理窟を付して僞らざる自然の感情と稱し、歷史的發達の道德行爲を僞善と嘲るに至るのであります。

かくして彼等は滿足をも得ない、却て他面に不平の徒を生ずるのである。事業に熱中せず、放縱な

る生活をやれば、生存競爭の落伍者となり、次で他人を嫉み、理由なき怨恨の心を生じ、遂には破壞主義となる。舊來の制度道德宗教等の存するが爲め自分の行爲は批難せられ、國民の本分に背くと云はれ、人の道に違ふと云はれ、宗教からも攻擊せられる。そこで一切の歷史的の風俗制度道德宗教等を破壞して、混沌たる火事場の如き社會を造らんとし、現在の秩序ある社會を呪ふのである。懷疑心の進む所は茲まで走るので、進化論に醉つて居る內にかゝる恐ろしき思想は次第に勢力を增しつゝあるのであります。

進化論に醉へる者は變遷推移の一面を見て不朽一貫の方面を逸するの弊がある。例へば冬の春に春の夏に移るを進化と稱し、夏の秋に秋の冬に移るを退化と見るが、春夏秋冬と移り行くのは一面の觀察に過ぎぬ。この天運循環の中に一貫の理が存して居る。卽ち年々歲々之を繰り返すは其處に萬世不易の眞理の存せるが爲である。道德習慣等の形式の末は世の變遷につれて移り行くとも、道德習慣の內面を貫ける或者の存在せるを逸してはならぬ。然るに進化論に醉ふて不朽一貫の道を領解せず、叩もに歷史的の道德を破壞せんとし、國家の健全な發達を忘れて個人解放論を主張し、放縱生活を煽動するに至るは、皆懷疑の思想を基として起るので、後に反抗の惡風を伴ふのである。

又自然主義も根本は懷疑より起つたのである。自然主義は眞正なる意義に於ては幾分の取るべき点なきに非ざるも、自然の半面を見てその善良なる方面を逸する。例へば人の性質に就ても美醜兩面の存するにその美の方面を見ない。丁度他家を訪問してそこには立派な座敷美しい庭園の存するに關らず、唯裏面の方の雪隱や掃き溜を見て『大きな邸宅だと自慢しても雪隱や掃き溜である』と云ふが如き見方である。

懷疑の精神は科學万能の思想より來る。卽ち事實の經驗を唯一の確實性と認め、推理を忘れ、直覺の力を知らざる結果である。人の本性にもせよ、宇宙の大精神にもせよ、神明の存在にもせよ、これ等の事は科學の智識のみによりて解決せらるべきでない。然るに智識を科學に限るの結果は之を疑ふに至るのであります。又哲學の方にも不可解とか不可知を骨張し、人智に局限あるを考へず、單に智力のみによりて宇宙の全体眞相を說明せんとして、無暗に不可知をふりまわすに至るが、これ亦懷疑心を助長する一原因となつたのである。

元來不可知と云ふことに二種あるを知らねばならぬ。例へば門は閉ぢられ、石塀は高く聳ゆ、門內に何物の存するか知り難き場合の不可知と、門を開いてあつても庭園幽邃其の奧を見盡くすことが出來ないと云ふ不可知との二種である。不可知と云ふ言葉は同一であつても、その意義は天地の相違がある。一は渴仰の精神を存する不可知、他は漫罵の心懷疑の心に走る不可知である。我國の御國体に

就て云へば、建國の事實理想の宏遠深厚であつて、哲學宗教等の深遠なる學問信仰を以てしても、益々其の靈妙なる意義に敬讃するものと、單に太古未開の事蹟にして解し難き神話に過ぎずとするとの別である。科學過信と懐疑思想の害毒の及ぶ所知るべきであります。

我が建國の意義に關しては山鹿素行先生の所論がよき參考であると存じます。乃木將軍が殉死の時に東宮殿下に奉られた中朝事實の中に、日本の神代には思兼の神樣があり、何か大事があれば天照太神が御呼び寄せになり、御諮りになつて居る。今日で申すと丁度參謀長と云ふやうな神樣であります。思兼とは思は深遠、兼は包容の意である。日本の理想には建國の時より深遠なる理想と包容の襟度とを有し、そこで思兼神は大事に參與せられて居る。中朝事實には

我國の事に於ては近本あり遠徴あり

と云つてある。近く我國の事實に本づく所あり、遠く之を他に徴する所があるのである。建國の理想に基き、包容性を以て之を發揚し來つたので、即ち支那の文明印度の文明を包容し消化し、更に西洋の文明を包容し消化せんとしつゝあるのである。五ヶ條の御誓文に

智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

と仰せられしも、智識を世界に求めとは遠徴であり、而して之を天地に質し、之を鬼神に諮り、所謂天地の公道に基く精神を以て貫くのである。かゝる確乎たる意義を以て我國は建てられて居るのである。然るに懐疑の徒は單に神話として蔑視するのであるが、我が御國体は益々研究すれば益々微妙であり、眞に敬讃に堪へないのである。『國を肇むること宏遠に、德を建つること深厚なり』との仰せが深く感せらるゝのである。仰げば愈々高く、鑽れば愈々堅く、眞に世界に冠絶せる御國体なることが信念に上るのであります。

此の如く懐疑の思想は幾多の弊害を有するのである。故に人の確信を言ひ現す時には決して之を冷笑してはならぬ。折角信念の芽がふき出したのを之を萠芽に摘み去る事は恐るべき事である。道義心は萠芽の時が大切である。善きも惡きも萠芽を慎まねばならぬ。石川五右衛門の傳を見ると、子供の時雪駄を片足盗んで歸つた。所が母親が少しも小言を云はず、却てモウ片足もつて歸れば役に立つと云つた。之が後にかの大盗賊を作ることゝなつたと傳へてある。もし其の時母親が充分叱りつけたら日本の歴史に石川五右衛門の名は無かつたであらう。萠芽の大切なことは惡い事にも善い事にも通ずるので、兒童の心理でも蟬を捕へたり蛙をつかまへて慘酷な殺し方をする、それが變て不良少年となり、人殺をやる樣な殘忍なるものを生ずるので、兒童心理を研究した結果動物保護會は起つのである。不良なる思想が兵士を襲ふのも初めは些少の事からである。佛陀の語に遮戒と云ふことがある。其の

事夫れ自身では惡いことでなくとも、其處で遮り止めねばならぬ事がある。例へば賭博の如き、飲酒の如きそれである。賭博の結果憤悻心を起し、自暴自棄となり、後には盜賊をするやうな事となる。又飲酒も氣が暴くなつて喧嘩をしたり、或は懶惰になる。その事それ自身では惡い事でなくとも、そこで遮り止めて置く必要がある。思想の問題もやはり同樣であつて、崇高なる道義心には人の信念を冷笑することが破壞性の卵である。故に信念を冷笑することを先づ以て遮り止めねばならぬ。師嚴ならざれば道尊からずと申して、風敎には敬虔の念を本とする。池田光政侯は閑谷黌に於て門弟と同一の禮を取つて修養談を開かれた。敬虔を以て進まねば道は行はるゝものでない。故に懷疑的冷笑は尤も誡むべき事であります。

第三、個人主義の誤解

個人主義も一概に惡い意味計りではないが、そこに誤解が起り易いのであります。個人主義には個人の見方が大切である。個人を小さな我、現實の我と見る場合と、大なる我、崇高なる理想の我と見る場合とによつて大變に異つて來るのであります。小さな我は人の私欲劣情を基として一切の行動を定めんとする。而して個人を本位とし、一番大切とするのである。然るに人性を仔細に研究すると劣等なる私欲の我でない、崇高なる我の立派な光を認むるのであつて、儒敎では之を明德と云ひ、皇道では和魂（にぎたま）と稱し、佛敎では佛性と呼んで居ります。日蓮上人の語に『千尋（ちひろ）の底の石にも火あり』と仰せられて、數千年千尋の海底に沈んで居た石のやうな罪人でも、之を陸上に取り出して導くに道を以てし、之を啓發すれば、その明德和魂佛性の火が現れて來る。又敎育に於てはどんな劣等なる人間でも畜生と異つて居る。敎育の可能と云ふことを信じて敎育をするので、故に不具者の爲にも盲啞學校があり、低能兒學校があり、あくまで人間は畜生と異ると信じて居る。やはり個人を認むる上に立派な大我明德和魂のあることを信ずるのであります。

大我とか和魂等と云ふのは哲學上餘程進んだ思想でありますが、そこまで至らなくとも人には社會性なるものゝあることは容易に知り得らるゝのである。例へば夫婦の情にしても眞に夫婦相愛する場合には、妻は己れの好む壽司よりは夫の好むヤッコ豆腐を調理して、夫がうまそうにそれを食つて居るのを、自分が壽司を食ふよりも遙に愉快に感ずるのである。自分の舌の上に御馳走をのせて初めて甘味を感ずる如きは極めて劣等なる婦人と云ふべく、かゝる事はどんな婦人にでも現れて來るのであります。かく人間には自他共通して他人の愉快を以て己れの愉快とする面白い性質がありますが、之が端緒となつて崇高なる道德心が發揮され、夫に貞節を盡し、親を思ひ大君を思ふ忠孝の精神となり、

大君の御心を安んじ奉り、國運の發展を計るのが、個人の快樂よりは遙に愉快と感ずるに至り、そこに崇高なる犧牲の精神が生じて來るのであります。

西洋に於ても今日では眞の個人の性質を研究すれば、社會性が中樞をなせることを說くに至つて居る。又孔孟の敎では

仁義禮智根ニ於心ニ

と說いて、仁と云ひ義と云ふも其根本は心に存すと云つて居る。人間個人をつまらぬものに見ねばならぬとの思想は西洋にも東洋にもない。元來つまらぬ半人前の考しかないものが個人を小さな我なりと誤解するのであります。又佛敎でもこの事を明白に說いて居る。かの大涅槃經には悉有佛性と云ふことがある。どんな惡人愚者にでも、例へば親殺しをするやうな五逆十惡の徒、佛に反抗するやうな闡提(せんだい)にでも尙は佛性がある。そこでかの提婆達多にも佛性を認めて未來に天王如來となることを許すので、提婆にも阿闍世王にも白癡の須利槃特にも成佛を許し、恰も一の雨に一切の草木が洽ふが如く、凡てに發育性向上性を確乎(しつか)り信ずるのが大乘の敎となつて居るのであります。陸軍の理想もたしかに同樣であると信ずる。調練を行(や)るのは如何なる不良の兵卒でも、やはり導くに道を以てすれば立派な軍人となることが出來る、調練の可能を信じて居らるゝことと考へます。　先帝陛下の御製に務と云ふ御題で

己が身を顧みずして人のため
盡すや人のつとめなるらん

自分の事のためにせず、他人の爲め、所謂社會性を中樞に於て盡すのが眞の人なりと、人間の定義を御下しになつたものと拜察します。而してこの定義は西洋の社會性、儒敎の明德、佛敎の佛性、陸軍の調練の可能等、古今東西の文明が一貫して作り上げた人間の定義であります。然るに半人前の個人の私欲の爲に盡さうとするのが今日の人の誤解である。これはどうしても改めさせねばなりません。

殊に個人主義で注意すべき事は、西洋の社會は凡て個人を中心として進步發達したのであるが、我國では之を中心とはしない。我國の御國体は個人が如何に立派な社會性明德があつても、個人を以て國家より大切なりとは認めない。理想の國家は個人を顧みないのではないが、國家の力の內に個人を保護するので、而して時としては個人を國家の犧牲とすることを認むるのである。犧牲は我國古來の國風であります。個人主義では自己の責任を自覺し、價値を認め、他人に對しては他人の人格を蹂躙せよとは云はない、する、そこに社會はだん〳〵進步すると云ふが、日本でも決して個人の人格を蹂躙せよとは云はない、國家の力の下に個人の人格を尊重するは無論のことである。然し個人の社會性は如何に立派であつて

も大した仕事の出來るものでない、この社會性を集め之を結合した頂点に國家を認めるのである。立派な個人の有せる社會性を纒め上げてその摸範としての結合体であります。そこで國家に忠愛の心を發揮せよとは、換言すれば汝の有せる崇高なる我を發揮せよと奬むることである。

元來西洋は民約説を基礎として居る。國家は人民が約束を結び、法律を制定し、之を實行する爲に要するのであると考へて居るが、之は淺薄なる國家觀である。眞の國家は人民の約束によつて成立せる如きものでない。人民を指導すべく先だつて存して居るのである。我國の主權は人皇にあらず天皇と稱せらるゝので、常に國民の師表として之を導かせらるゝのであります。國民の集合して約束したこと、時々變化する法律によつて成立せる如きものでない。所謂天業を恢弘し、天下を光宅し、世界最後の文明を光顯せんがため、あらゆる尊き理想を集めて實現せられて居るのである。

法律は大抵西洋から輸入したもので個人を本位として居る。之も時世の然らしむる所で法律の勢力を容認せねばならぬが、然し人間の精神を凡て法律によつて指導出來ると考へては大なる誤解である。法律は動物に近き人に對して初めてその必要があるので、法律が尤も大切であるとの考は誤謬である。法律万能の思想は科學万能の思想と相對せる現代惡思潮の両大關である。

第四、博愛主義の弊

博愛主義は廣く人類全体を同一に愛する主義で、國家の境を超越せるものである。人類を本位に置く精神で、國家の道德を以て低しとし、或は武士道を低級道德なりとし、或は國家の爲に殉死したり、討死するのを冷笑して居る。西洋の學者が我國の武士道を盛に批評して居る態度は、殆んど吾人日本人には意外に感せらるゝ有樣であります。

博愛主義は宗教家の主張する所であつて、キリスト教にも佛教にも多くあるのである。キリスト教では神は凡ての人を平等に作り給へりとの思想から、人道博愛の精神を以て神の聖旨に適へりと考へ、又佛教では佛陀の慈悲は平等に衆生を濟度し給ふとの思想から起り來るのであります。一方より云へば大なる慈悲である、我が御皇室におかせられても、やはり萬つ民救はんとの仁愛の大御心は在らせらるゝのである。然し宗教家の博愛主義は羅が弛んで居る。博愛人道を行ふにはそこに義の觀念を閑却してはならない。キリスト教徒の説く博愛主義は義の觀念が欠けて居るのであります。我國で云ふ義とは義は宜なり宜しきに適する意味である。廣く人類全体を愛することを否定しません、進んで世界の文明を建設し幸福を增進せんとするのでありますが、然しそれには順序がある、秩序階級がある、

日本の國威國光を輝かし、御皇室の御稜威の普く八紘を照す時、如何なる國の人民をも之を愛撫し給ふのである。臺灣を領有し朝鮮を併呑したのは夫れであります。故に決して自國民と他國民を安りに區別するのではない。然し國家の結合をうちすて、軍備も政治も忘れて博愛々々と云つて居れば、一方には國家を組織して武力を有せるものがあるから打ち亡されてしまうのである。然るにキリスト教徒及び佛教徒中にはこの事の分らぬ者が多いのであり、遂に社會主義者をも生ずるに至るのであります。

キリスト教徒中から幸德の大逆事件に連累者を出して居る。又今尙ほ紀州の新宮には大きな邸宅を構へて、而も危險思想を懷抱せる者がある。資產は六十万圓あるとの事である。其の邸宅のすぐ前に會堂があつて、そこの牧師と氣脉を通じて居るとの事でありました。キリスト教を學びそこなうと羅の弛んだ博愛主義となり、國家を以て狹しとし、武士道を低級道德なりと考へ、其の極社會主義に走るに至るのであります。又佛教中にもやはり惡平等に流れて害をなすものがあるので、平等は一面には眞理でありますが、そこに現在の社會を破壞し、秩序を否定せんとの危險分子を含んで居るのである。現に禪僧內山愚童は大逆事件に關係して而も尤も猛烈なる主義者の一人であり、又眞宗僧佐々木某を熊本から出し、その兄德母と云ふも同主義者である。而して彼等は自己の信仰と結び付けて居るのであります。

要之博愛主義を誤解して國家を以て狹しとするは非常なる間違ひと云ふべく、そこに儒教の道德の立派なことが解るのである。聖賢の道の尊きは仁と同時に義を說くことである。仁は博く愛する意義を含んで居るが、この仁を行ふには義を以てせよと訓ふるのである。義とは宜しきに適すとの意義で、博ひ仁の精神が實際に行はれて人類を愛して行く場合には、君臣父子の關係を以て尤も尊しとし、その宜しきに適する樣に行へと云ふことになるのである。仁愛は遍頗がないのがよいと云つて、秩序を失へる仁愛は惡平等の博愛となるので、孟子は『君をなみし父をなみす禽獸に非ずして何ぞ』と之を嚴誡して居ります。丁度孟子の時に墨子が博愛主義を以て兼愛の說を稱へた。非常に勢力があつたので、當時の諸侯は墨子、又は今日の自然主義肉慾主義に類似した楊子の說に傾いて居たのである。墨子の說は等差無しの平等で、博愛の爲にはどんなことでもすると云ふ考であり、今のトルストイ及び德富蘆花の思想と同一であります。孟子はこの思想に痛擊を加へました。遂に墨子は孟子に亡ぼされて、今日では其の名を知る者も殆んどないのであります。墨子にせよ、又トルストイ蘆花等は凡て立派な學者であります。然し其の着想が誤つて居るのである。例へば日本人ならば國家に對する觀念を誤らずして、同時にその人格の完成が大切であります。篤學の博士が御國体に就て順逆の理を誤つ

て、社會から攻擊をうけたことは近時の出來事である。物には其の中心が肝要である。博愛主義に就ても之を行ふに義を以てすることを忘れてはならんのであります。佛敎徒が稱へやうが、キリスト敎の敎義に含んで居らうが、文學の理想であらうが問ふ所ではない、日本の御國体と相容れない、我國では許し難きやうな思想は、例へ宗敎哲學法律文藝等何等の衣を裝ふて來ても決して許すべきでない。中庸の中にもこの事に就て中々やかましく論じて居る。

親レ親之殺。尊レ賢之等。禮所レ生也。

之は義の解釋であります。殺は降殺と熟字するのでそぎへらす意味である。親しむべき所は澤山ある、妻をも親しみ、親をも子をも親しむべきであるが、然し親しむには例へば親に盡した精神を紙十枚とすれば、兄に盡すときは紙七枚とし、その隣りの人には三枚とし、又その隣りの人には二枚とする風に段々秩序に從つて愛を減らして行くべきである。又賢を尊ぶに就てもそこに等差を說くので、その秩序等差の間に眞正の禮は行はれる。禮は儒敎では非常に重い事になつて居る。禮は體なりと云つて人の人たる所を云ふ意である。この大切な禮が秩序等差から生じて來るのであります。故に孝經には

不レ愛二其親一而愛二他人一者。謂二之悖德一。不レ敬二其親一而敬二他人一者。謂二之悖禮一。

親と他人とを區別して、親を愛せずして他人を愛し、親を尊敬せずして他人を尊敬するを悖德悖禮と

云つて居ります。

西洋の道德習慣にはこの敎訓がありません。例へば彼の篤學なる米人ギリックに歸一協會の會合の時、或る人が問題を提供しました。『今こゝに一隻の船に自分と親と妻と三人乘つて居る。何等かの原因で船が沈沒し、自分は親か妻か何れか一人しか救ひ得ないとせば、何れを捨てゝ何れを救ふか』との質問に、彼は眞面目なる態度を以て、哲學宗敎倫理のあらゆる學說を引て、親を捨てゝ妻を救ふとの事を熱心に答へたのである。世界の思想を論究する堂々たる會合に於て篤學なるギリック先生はかく答へたのであります。之れ國風の異る所であり、義と云ふことを知らず、親よりも妻を重しとして居る。『神は人を男女に造り給へり』との聖書の思想から、夫婦を以て根本とする西洋思想の然らしむる所であります。然るに日本では義の觀念が非常に進步し、武士道の觀念となり、忠誠の精神となつて現れて居るので、古今東西に亘りて異彩を放てる我國の精華であります。

佛敎では平等の一面を說くはそれは習ひそこねたるものであつて、眞の佛敎はそうでない、因緣と云ふことを說きます。因緣とは慈悲の精神を以て平等に他人を愛する際に、そこに緣の厚薄を立つるので、袖の振り合せも多生の緣と云ふ言葉の如く、袖のふれたのとふれぬとの間にも緣の厚薄を論ずるのである。この因緣の思想を擴大して遂に父母國王衆生三寶の四恩を說き、そこに秩序を立つるの

であります。然るに習いそこないの佛教徒はかゝる教訓を忘れて惡平等に走せるので之は大に注意せねばなりません。又佛教では高遠なる信仰の一面に偏せずして大に世間の道德を尊重して居る。釋迦は五戒を立てゝ居りますが、五戒とは印度の國民道德であり、支那の五倫と等しく色々と深い意味があります。この五戒を尊重して如何に宗教の深い信仰、高い理想に這入つて行つてもこの五戒は破つてならない、之を根本戒と稱して尊重したのであります。佛陀が蓮を愛して居るのもやはり同じ理想から來て居る。蓮は高山には生じません。卑濕の泥中に生じて而も清淨なる華を開く。道も高い所に求むべきでない、之を人生混濁の中より發して、そこに崇高なる佛性明德の光を放つのが尊いのであると佛陀は常に云つて居ります。

我は世の爲に汚されず、世と爭はざること蓮の如し

世の中を救ふ爲に人生混濁の中に下り、而も人生を尊重し之を啓發せんとしたのである。かゝる理想でありますから中々世の中を破壞する所でない、盛んに四恩を說いて世間人生を尊重したのであります。

先帝陛下の御製に

白雲のよそに求むな世の人の

誠の道ぞ敷島の道

と仰せられて居る。宗教があまり高遠なる理想に走せて雲の上へぬけ出てしまうことがある。雲に乘つて羽化すと云ふやうなことは確かに面白いことでありますが、そこでどうかすると世の中に不平を有する者が人生はつまらんと云ふ風に考へて、無暗に高遠なる理想に憧れ之を追ふことがある。そこに禪宗の如き思想を生ずるのである。善につけ惡につけ人生を厭ひ之を捨てんとするは宜しくない。高い理想を望むと云ふことは俗世間を超越する思想故面白いに違いないが、秩序を破壞せんとするに至り易い。人は一方に秩序を尊重する精神があるが、又一方には放膽を摸せんとする傾がある。爲に思想が非常に自由になつて善も惡もない、賢も愚も眼中になく、之を眼下に見下し、高い理想を以て社會の秩序を破壞せんとすることがある。吾々でも酒でも飲めば時にそんな心持を生じないと限らん。諸君でもそうであらうと思ふ。キリスト教にも佛教にも儒教にも文藝にもかゝる傾向は有して居る。然し『白雲のよそに求むな』と仰せられた御聖旨に背けるものであります。

そこで吾人は國家を低しとし、箍の弛んだ博愛主義になつてはならない、理想の國家主義をとるべきである。即ち理想的國家を擴大しつゝ博愛主義を包容する精神を持たねばならん。之は實に進歩した思想であつて、博愛主義を敵とせず、國家の中に博愛主義を包容して進んで行くのであります。

第五、固陋なる國家主義の弊

眞正なる國家主義が絶對の意義を有するは無論でありますが、國家主義と雖も固陋狹隘淺薄なる思想が附着すれば、却て幾多反對の口實を與へ引いて國家を災するのであります。

固陋なる國家主義とは國家を絶對に見るは可なれども、其の國家に就て理想を明かにしないので、國家の權威を無意義に振り廻はすのである。國家の有する理想目的を考へず、國家の發展には其の中に幾多の尊き事柄が併せて保障せられ、支持せらるゝ所以を明にしない。廣い意味で申しますれば國家の力に依つて文明が完成されるのである。然るに文明を敵として單に國家ありと考へるのである。文明の內容には樣々の意味あるも一方から云へば個人の幸福をすゝめ、又人格を完成せしめ、他方には人類のために正義人道を發揮する事である。而してこれ等の事柄が凡て國家の力によりて達せらるゝのであります。國家の力によりて個人の幸福安寧を保障し、個人の品位を導き、更に同時に世界人類の爲に博愛人道を發揮するのである。國家が一切を導いて行くのである。然るに國家は單に個人を犧牲とするものと考へてはならぬ。個人を保障する爲に時々犧牲を要求するのである。又世界の文明を度外視して國家を發展せんとするのでない。時としては表面より見て人類を敵としても國家の發展

を企てんとする事があるが、元來國家は平和を理想し、世界の文明を完成する爲に存立して居るのである。この理想の實現を妨ぐるものあらば之を紛碎して進むは止むなき所であるが、決して私利私慾のために戰ふのでない。恰も迷信の徒が譯もなく稻荷大明神をかつぐが如くに、一概に國家大明神と云ふのであつてはならぬ。無闇に國家を振廻はすのを國家至上主義と稱するのであります。國家至上主義は國家の理想目的を明かにせず、一概に國家の前には個人の幸福も品性も認めず、犧牲の意義をも明かさず、何故の犧牲か解らないのである。これ即ち固陋なる國家の一種であります。例へば德川時代には權力者が人民を見る事土芥の如く、切捨て御免と稱して叩りに人命を斷ち、甚しきは新刀を作つた試し斬りをすると云ふが如き、或藩にては人民を機械と同一視して重稅を課したので、其の一例は佐倉宗吾の如きものを生んだのである。當時の義民は歎願したのである。然るに少しも憐みを加へず、本人を極刑に處するのみならず、妻も子も併せて之を刑戮したのである。西洋にても中世紀の狀態を見ると貴族が跋扈して澤山の土地を領し、又一方には僧侶が勢力と土地とを有して居る。爲に人民は憐れなる狀態に沈み、その反抗として近世文明が起り、個人主義が發達したのであります。

近世文明は表面は宗教改革の形をとりて現れたが、其の裏面には個人の人格を認めんとする思想がこれに合して起つたのである。國家至上主義には權力者の私利私慾を行ひ易き弊がある。社會政策の

如き人民を憐む精神が欠けて來る。加ふるに如何に立派な道德でも聖賢の道でも權力者の私慾の爲に破壞して顧みない。文明の內容を破壞し去るのである。爲に國家は非常に貧弱な意義となり、諸種の反抗が起つて來る。いつも宗敎家が個人を思ふ精神と、人道を思ふ精神からかゝる國家至上主義と戰ふのである。西洋の基督敎と國家との關係は即ちそれである。其の異りたる歷史を鵜呑みにして日本へ來ても、固陋なる國家主義と幼稚なる基督敎徒とが爭ふのである。そこに以前申述べた羅の緩んだ博愛主義と固陋なる國家との爭が起るのであります。現に先日札幌に於ても基督敎の海老名氏の講演中に其の適例が現れて居る。氏は文部大臣が『敎育は國家を基とし、宗敎は人類を基とす。宗敎は信仰を基とし、敎育は信仰を基とせず』との訓示を引いて、元來人類本位の宗敎が尤も高い宗敎である、佛敎と基督敎とが夫れであつたが、後に佛敎は墮落して國家と調和する樣になつたが、獨り基督敎は飽く迄人類本位を維持して今日に至つた。基督敎が人類本位なるが爲に從來日本の敎育家等より蒙つた迫害は如何計りであつたか知れない。然るに今文部大臣の訓示によつて人類本位の宗敎を是認せられたのは、要するに基督敎に勝利の榮冠が下つたものであると講演して居ります。文部大臣の訓示も少しく言葉が足らん所があると思ひまするが、而し大臣の意は決して海老名氏の云ふが如き基督敎が人類本位の宗敎であるから、勝利の榮冠を與へたと云ふ意味ではないと信ずる。宗敎の多くは人類本位であり、國家主義と融合する迄調節されて居らぬから、俄に國家本位の敎育と調和せしめ難いとの意であると解釋してよからうと思ふ。然るに海老名氏は一片の訓示を以て人類本位の宗敎が勝利に歸したと云はるゝが、餘り利用が過ぎて却て識者の與みせざる所と思ふ。同氏は基督敎の大家である、又日本化を理想せる先輩を以て目せられて居る人である。自分等は敬意を拂つて居る。同氏は曾て日本化を首唱せし爲に基督敎徒中に於て異端視せられて、排斥せられたと聞いて居る。その日本化の先輩たる海老名氏にして尙ほ且つ此の如しとせば、氏を排斥する一般基督敎徒の思想は推察するに餘りある事と思ふ。

固陋なる國家主義は其の反抗としてかくの如く羅の弛んだ博愛主義に口實を與ふるものである。由來我國の建國の思想は如何。少しく靜思せよ。斷じて淺薄固陋なる國家主義ではない。實に絕大なる理想と、絕大なる仁愛と、威力と實現力とを保全し來つて居るのであり、　先帝陛下の御思召に在りては極めて明白に御示し遊されて居る。然るにかゝる意味合を理解せず、固陋なる國家主義に陷り。人道を省みず、國民を愛撫せざる如きは、　陛下の思召を知らざるの致す所である。我が御國体の眞相を理解せば社會主義の發生すべき理由はない。幸德の起る迄は日本人の多くは我國に社會主義の發生するとは考へなかつたのである。彼等の計畫は餘りの事であるからその眞相を新聞にも掲載せず、

又判決文は公判廷にては朗讀せしも新聞に載せなかつたが、彼等の計畫は恐懼に堪へぬ事であります。色々の符号を作り、爆彈を製造し、最早準備全く成れりと云ふ有樣、同志は地方に散じて機の至るを待つて居つたのである。大逆に關する準備は全く出來上つて居つたので、之を俄に決行しなかつたのは、一方に幸德は都市破壞の考を有し、其の方の準備が未だ不充分であつた爲である。又そのことの發見されたのは天祐が下つて居ると信ぜざるを得ないような事柄であります。詳しきことは申述べられませぬが、日本人の中から二十六人もかゝる反逆人を出したと云ふに至つては、愼摯に考慮を要することゝ考へます。こゝに眞正なる國家主義を發揮して、かゝる誤解の起らぬやうに民心を訓育すべきであると信じます。御參考の爲にこの場合に於て危險思想のよつて起る動機及び原因に就て聊か申述べやうと思ふ。

* * * * * * *

○危險思想の發生原因。　自分の調査しました所では、危險思想の由つて起る原因は、

(イ)政治思想。政治の方からは自由民約の思想が極端に走する所に生ずるのであります。民約說はもと佛蘭西に起つた思想でありますが、今日では西洋の各國は凡てこの思想によつて居るのである。民約說では國家は個人を本位として見るべきものである。個人の爲めの國家であつて、國家の爲の人民でないと云ふことが原則となつて居るのであります。國家は人民が集りて相互の安寧幸福の爲に契約を結び、法律を設け、其の法律を實行する機關として主權を定め、而して若し約束目的に背けば主權を解除しても宜しいと云ふことを主張するのがルソーの說であります。この思想を日本に傳へたので自由黨の思想がそれであつた。此の点から考へると日本の政治發達史は餘り感心出來ぬのであります。又一旦國家の主權を定めて之に權利を與へた以上は、何等の事情があつても解除することが出來ないと主張するのがホッブスの說であります。然し又一方に民約說が極端になつて、約束は違へないでも人民が委托して居るのであるから、人民の方の考へ次第でいつでも廢して宜しい、いつでも主權は人民の都合で自由に動かせると云ふやうな、極端な思想を有する者を生ずるに至りました。そしてこの主權を輕んずる傾向は益々激しくなつて、遂には國家の組織は害があつて益がないとの考を以て國家の存在を否定するに至り、人民の約束は人民相互の制裁によつて維持すればよろしい、國家と云ふやうな面倒なことはなるべく無くしてしまはうと主張する者を生んだのである。

近來簡易生活田園生活と云ふことを唱ふるやうであるが、あの中には注意しないと妙な毒を含んで居る。德富蘆花が田園生活を皷吹するのはトルストイの主義をうけて居るので、トルストイは非戰爭論を以て有名な男である。田園生活と非戰爭論、恰もアイヌ人の如き生活を行つて居れば戰爭はなく

なると云ふ樣な思想である。民約思想を撤底せしむればこゝまで至るので、遂には法律を否定し、國家を否定し、無政府主義を叫ぶに至るのである。中江兆民はルソーの民約說に影響せられ、幸德秋水は中江兆民の門弟である。ルソー、兆民、秋水の經路に就て注意を要するのであります。

正直に云へば自由黨の政論には、我國民に自由民權の思想を吹き込んだ當時の演說等を回顧しますれば、其の中に餘程危險な思想が這入つて居るのであります。

(ロ)學術方面。學術の方面からは科學万能の思想の極端に進む所、人々が冷刻になつて親も君も思はなくなり、遂には國家の組織を認めざるに至るのであります。

哲學思想。哲學では絕對我を主張し、個人を非常に豪いものと考へ、人が人を支配する理由は決してないと云ふことを金科玉條とするのから來る。そこでこの絕對我の上に法律の權威を否認し、之がやはり危險思想を助成する原因となるのであります。佛敎にてもこの絕對我を說きますから、注意を要する次第である。

(ハ)宗敎方面。宗敎の側から云へば平等の思想であります。平等思想の極端に走する所は上下の階級を破壞し、貧富の別を背理なりと主張するに至る。あまり平等々々と云つて居つて之を極端に及ぼすと、人生社會の組織秩序を破壞し、遂には國家を呪ふに至るのである。

(ニ)經濟方面。更に經濟の方から宗敎の平等の思想を手傳うやうになると、共產主義を主張することになる。即ち一切の個人の所有權を認めず、歷史的に發達せる國家の秩序を否定し、歷史的に發達せる財貨の分配を否定するのであります。

かゝる諸種の原因が相依り相助けて、國家を破壞せんと企つるに至り、その破壞の方法を盛んに研究するに至ります。(イ)其の穩和なる者は議會政策と稱するので、普通撰擧を主張するのはそれであります。土方とか人足とか下級の勞働者を巧妙なる詭辨誘惑其の他あらふる方法を以て味方につけ、多數の無敎育なる勞働者の手によりて代表者を出し、議會に於て絕對多數を制し、議會の力を以て國家の解散を議決せんとするので、歐米に於ける勞働黨は即ちこの理想を以て起つたものであります。所が最初はかゝる思想を以て撰擧せられた黨員が、代議士となり、或は國務大臣の地位を占むるに至ると皆軟化してしまうのであります。(ロ)其の猛烈なる者は議會政策を以て迂遠なり、空想なりとして、直接行動を主張するのであります。自ら爆彈を以て現在の社會を破壞せんとするので、露國の虛無黨員は即ちそれであります。各國の社會主義者中露國のが一番質が惡いのでありますが、幸德秋水は實にこの一番猛烈なる虛無黨の系統を引いて居るのであります。虛無とは建設を理想せざる故に虛無と稱するのであつて、彼等は破壞と混沌との中に生活せよと主張するのであります。而して一切を破壞

し去つて混沌の中に生活して居れば、その内に新しき人生が發展し來るであらう、兎も角も破壞せよと主張するのである。露國のクロパトキンがその首領であります。彼は學者であつて今日迄の社會主義の學說を完成した。その理論の方面に於ては之に哲學的基礎を與へ、又實行の手段に就ては嚴密なる調査を遂げ、黨員中部門を分ちて研究を進め、世界的の行動をとつて居るのであります。彼等の主義は空想にもせよ熱心を有して居る。クロパトキンは

例へば池中に小さい石を投ずればその波紋は初めは小さいが、然し十人二十人と多數引續いて前の波紋の消ぬ内に次の石を投ずれば、遂には大波瀾を起すことが出來る。

と云つて居るのであります。そして極めて實行的であつて、万卷の書を讀まんよりは一人の直ちに實行する方が遙に尊いと云つて居る。我國にもかゝる煽動的のものがあるのであります。

かゝる危險分子が發生して居るのでありますから、思想の問題は注意に注意を加へて、國家主義に就ても之を理想的國家說を徹底せる見解を以て見て置かねばなりません。

第六、現實主義の誤解

現實の世間を大切にし、現實の世の事に力を盡すのは無論善き事であり、白雲のよそに求むなの御製の如く、道は人生と沒交渉では取るに足らぬ。然し完全に世間の事を行ふには、又高遠なる理想を必要とするのであります。

然るに薄ッぺらな現實主義は深く高い理想を忘れて唯眼前の事のみに流れ、それで實利主義となり、自己の利益になることでなければ動かないやうになり、金錢万能の思想を生ずるのである。而して此の思想が學者に影響しては、確乎たる主張を鮮明にして自己の所信を告白する能はざるやうになり、又政治家に影響しては黨派の利害と私慾の爲に行動することゝなり、諸種の方面から國家に大なる惡影響を生ずるに至るのであります。無論經濟は大切なことであるが、然し人は金錢を本位とすれば弱くなるものである。故に御勅諭にも

軍人ハ質素ヲ旨トスヘシ。凡ソ質素ヲ旨トセザレハ文弱ニ流レ、輕薄ニ趨リ、驕奢華靡ノ風ヲ好ミ、遂ニハ貪汚ニ陷リテ志モ無下ニ賤クナリ

と誡められて居るのである。質素を旨とせず、金錢を愛好する結果は高潔なる勇氣、剛壯なる精神は亡ぶるに至るので、志も無下に卑くなるとは實に格言であります。軍人諸君に於ても、思想界に立つ者でも、其の他意氣精神を以て立つべき者は、貨殖の事に走ると弱くなるものであります。そして現實主義に偏傾する結果かゝる弊害を生ずるのである。又金錢に伴ふ弊害は肉慾であり、そして節制を

欠くに至るのであります。

國家は經濟の發展を計らねばなりませんが、然し餘りに、殖産興業を偏重すれば、高潔なる志操を薄弱にする恐れがある。御製に

開けゆく時にいよ〳〵仰がれぬ　ひぢりの御代の高き教は

世が科學經濟の方面に開け行く際に、益々聖賢の教の高遠なる理想を尊重せねばならぬとの聖旨であります。又思想の事は

大そらに聳えて見ふる高嶺にも　のぼればのぼる道はありけり

如何に雲の上に聳えて居るやうな高山でも、屈せず撓まず登つて行けば遂に登り得る。どうしても理想は高遠なる所、崇高なる道義心に向つて登つて行かねばなりません。そこで一方には現實を尊重する思想、一方には天地の公道を尊ぶ精神を必要とするのであります。御製に

目に見えぬ神の心に通ふこそ　ひとの心の誠なりけれ

目に見えぬ神に向ひて恥ぢざるは　ひとの心のまことなりけり

曇りなき人の心を千早振る　神はさやかに照し見るらん

朝みどりすみ渡りたる大空の　ひろきを己が心ともがな

と仰せられし如く、吾人は常に高遠なる精神を持つべきであります。そこで宗教で宇宙の絶對を說くのを迂遠なことゝのみ見るべきでない。高遠な理想と現實との調和を忘とせねばならぬ。

二宮尊德翁が、水車を見ると半は水中に半は水上に在る。全く水中に沒すれば車は流れてしまう。全部空中に在れば車はまはらない、と云つて居るが、人間も現實に沒頭してもいけない。現實を離れて白雲の上にぬけ出してもいけない。然るに今日の現實主義は水の中へ全部沒して居るやうな主義であります。日蓮上人の語に

天晴レバ地明カナリ識ニ法華ヲ者可キ得ニ世法ヲ歟

と云つてありますが、地上の事をやるにもやはり天の事を考へねばならん。天が晴れ渡つて光を放つ

故に地上の万般の仕事が明るくなる。天上とは高い理想であり、高い理想が確立すれば、日々の仕事、現實の生活が成就せらるゝのである。而して高遠なる理想を識るは法華により、之によりて現實の世法が成し得らるゝのであります。即ち天晴地明とは世間と佛敎、現實と理想を調和した警句であります。若し理想に走せて白雲の上にぬけ出れば、丁度紙鳶の糸の切れた如きであり、日々の仕事に沒頭せる者は水中に沒入した水車の如きである。今の習ひそこないの宗敎家と、又實業に從事するものはこの何れかの誤謬に陷つて居るのであります。

も一つ序に日蓮上人の語を紹介しますれば、どうかすると宗敎家は現在の世を捨てゝ未來に捉はるゝ傾向があるに對して、日蓮上人は

極樂百年の修業は穢土一日の功に及ばず

と仰せられて居る。極樂や天國の事を無暗にすゝめる結果、現實の世に力を盡し奮鬪する力がぬけるやうになる。そこで極樂に行つて百年修行するよりは、現實の世に止りて奮鬪生活を續ける、その一日の奮鬪の方が功德が多い。例へば戰爭に就て云へば、敵の居らぬ所でいくら長く居つても功はない。一日でも敵と奮鬪する所に尊い勳功があるのであります。此の如く整頓した宗敎は高遠なる理想と併せて、現實の世間に於て奮鬪生活を敎ふるのであります。

健全なる方面の建設

第一、統一的文明の建設

現代に於ける健全なる文明の理想は、社會の体制組織に統一あらしめんとする傾向を取つて來た事である。人文の歴史を大觀致しますれば、大別して三階段を成して發達し來つて居ります。

(イ)混一の時代。政治宗敎道德軍事其の他凡ての社會要素が、その分域を明白に區劃し難き時代であります。各國とも永い間此の狀態を續けて居る。

(ロ)分化の時代。漸々社會の進むに從つて、分化の時代に移るのである。この時代になれば政治宗敎道德等あらゆる社會を組織する要素が、その職分を明かにし、分域を定めて發達するのである。即ち宗敎は宗敎、政治は政治としての領分が限定されて來るのである。これが最近までの文明の特色であります。

然るに餘り分化が極端に走つた結果、そこに大なる弊害を生ずるに至りました。即ち法律家は法律の事のみを研究して居るが、他の事は少しも知らない。社會の實情にも暗く、宗敎の本旨をも知らず、常識にも欠けて來る。又敎育家は敎育學と敎授法とに專注するも、學校の窓から社會を窺いて居るの

で、校外の實社會の事と疎隔して來るのである。爲に彼等が焦陶した學生を社會に送り出すと、實際活動の上には幾多の缺陷があるのである。又職工などに就て一例を擧ぐれば、鍛冶工にしても、以前は一人で鍬でも、鎌でも、金槌でも造つて居たのが、分業が盛になつた結果として、釘工は釘ばかり造つて居る。その釘を造るにも、釘の金を切るもの、尖端を尖らすもの、頭を造る者が分れて、一生涯或者は釘切り、或者は釘尖造り、或者は釘の頭造りと云ふ風に極端に分れて來る。或はマッチを造るのでも同樣で、箱を造るもの、紙を切るもの、之を張るもの、各々一生涯その事にのみ沒頭して他には何事も知らない。無論分業は或る程度迄大切なことでありますが、思想界のことがやはり之と同じやうに極端の分化に走れば、社會の全体としては不健全なものとなるのである。軍人は軍事上のことは知つて居るが、道德のことも、宗教のことも一向考へなくなり、宗教家も宗教の信仰の尊ぶべきことや、或は博愛人道は說くが、國家の理想を敬重するを知らず、國家の發展に努力すべきを忘るゝに至る。かくて各方面に偏傾狹隘の弊が百出して、社會全体の体制組織としては不健全なものとなるのであります。

（ハ）統一の時代。そこで凡て國家を組織せる大切なものを集めて、各々その職分を守ると同時に、各方面の事情を研究し、互に理解を交換することを必要とするのである。即ち政治家は政治法律のこと

を知る以上に、宗教道德等のことをも理解し、又宗教家教育家等は各々その職分以外の國家人生の實際的のことにも、適當な理解を有つべきである。かくして統一ある文明を建設せんとするは、最も新らしくして、極めて進步せる人々の間に、漸次主唱せらるゝに至つたのであります。誠に人文の爲に慶賀すべき次第である。

然し我國の現狀を見れば、今尙ほ分化の時代を理想し、それ已上に統一ある文明の建設に努力すべき所以を理解し得ない人々が少なくない。政治家でも、宗教家でも、其の大多數は依然として分化時代の舊套を脫し得ないのであります。殊にキリスト教徒中には神に仕ふることを知つて、國家的結合の大切なこと、殊に我國は理想的國家なることを知らない者が多いやうである。然し近來思想家大會なる者が計畫され、本年は七月九日を以て大會を開く豫定であつた。陸軍では本鄕次官、一日中將等が其の代表者となり、海軍では財部次官八代中將等が卒先せられ、其の他佛教徒の代表者、キリスト教徒の代表者、又學者教育家の代表者が集まり、凡そ六七百人の者が東京に會合しまして、思想の統一、各自の理解を交換しやうとしたのであります。不幸にして有栖川宮殿下御危篤の爲に本年秋頃まで延期されたのであるが、我國に於ても進步せる側にはかゝる傾向を示すに至つて居る。これ尤も留意すべき点であつて、即ち統一的文明の建設に一步を進めたものと見るべきであります。而してこの

傾向は殊に昨年來著しくなつたのである。又日本のみならず世界各國とも同一の機運に向つて居りますが、其の根本の原因は學問上の結論から起つて居るのである。今日の學問は一元哲學を主張する事になつて居る。科學の智識のみで宇宙を說明せんとするは不可能である。又宇宙を唯理的の哲學によつて說明するとも滿足が出來ない。人間の心理に就て見るも、智情意の共同的作用即ち全意識の熱誠を以て宇宙の實相を諦觀せんとするに至つた。例へば軍人が軍事に關する智識と、忠君の熱誠と、堅忍不撓の意志とを要する如く、宇宙の實相を見んとするにも同樣に智情意の共同的大精神を要する。之は世界的最進步の思潮であつて、最近の文明が認むる人類發達の文明の結論であります。科學的の智識は局限されて居る。科學は冷靜な智的有限の一面である。到底靈妙なる宇宙の實相を諦觀することは出來ない。

元來統一と云ふは各自分域ある要素に就て其の特色を發揮しつゝ、各方面の統合歸一を見んとすることである。國民道德としては政治家でも宗敎家でも軍人でも、其の他の國民すべて日本人たる已上は、皇運を扶翼することに於て思想の統一せられて居るが如くに、宇宙觀と人生觀とに於て一元を主張し、其の諦觀の統一を促すのである。科學が分化的になつて細分專攻して行く時、其處に最後の統一の爲めなることを忘れてはならぬ。例へば軍隊に於て步兵は步兵、工兵は工兵、騎兵は騎兵として

其の特色を發揮するも、其は國家を擁護する目的の爲に外ならずして、一の國家觀念に統一されて居るのである如く、斯かる意義に於て統一的文明の建設を理想とすれば、宗敎家も軍人も政治家も實業家も皆仲がよくなつて、各自の分域を守ると同時に統一的の大理想に歸一せらるゝのであります。

軍隊內務書を見ると服從と獨斷專決との關係が示されて居るが、丁度これが大なる文明の建設に於ても同樣であると思ふ。服從は軍人の最も大切なる道德でありますが、命令以外時としては獨斷專決を必要とすることがある。此の獨斷專決と服從とは衝突の性質であるが、其の運用は人に存するのである。然るに多くの政治家宗敎家敎育家等が國家を本位とすると、人類を本位とすると、を以て衝突する如く考へて居るが、之は皮想的の見解であると思ふ。其處に誠心即ち活きた軍人の如き精神を以て當れば、適當に調和することが出來るのであつて、國家と人類との二者を調節する所に妙旨が存するのである。この意義に於て統一的文明の建設が最近の思想であり、吾人の努力すべき最善の理想なりと信ずる、これ即ち健全なる國民思想であります。

第二、理想的國家の發展

固陋なる國家主義の價値なきは今更論ずる迄もないが、理想的國家は極めて宏遠深厚なる意義を存

して居る。理想の國家は道德を中心とし、武力と經濟とを兩翼として、堂々として健全なる文明の進歩に貢獻する所のものである。故に崇高なる道德も博愛人道も國家の力によりて實現せんとするのである。他面には個人主義が尊重する個人の安寧幸福も國家の力によりて保障し、更に各人をして品位あり道德あるの人たらしむる根本の力である。理想の國家は國家の力によりて、一方には個人の品格を啓發し幸福を保護し、一方には世界の文明を啓發し維持するのである。教育勅語は國家が個人の品性を陶冶する所以を御示しになつて居る。元來個人が何事を行はんとしても、個人の力のみでは完全な事業は出來るものでない。又個人が道德を行はんとしても、一個人の力では大道德は實現し得られない。國家の力によりて人生の秩序を維持して居らねば、各個人は道德を行ふ上にも、幸福を進むる上にも大障害が起つて、到底大なることは實現し得らるゝものでない。又世界の文明を完成する上にも理想的國家の威力によらねば達成し得らるゝものでない。そこで個人の人格完成も、又博愛人道の精神も、皆悉く國家を中心として顯現せらるゝのであります。

此の理想を明かにしたのは西洋ではプラトーであります。彼は眞の國家は個人が全体の爲に結合して盡すと云ふことでなければならぬ。個人々々が互に分立した思想を抱いて、其の自己の都合を中心として働くと云ふ樣なことがあつたならば、迚も完全の國家は成立しない。そうして國家はどこまでも其の國家の目的を道德に置かなければならぬ。啻に國家が道德を理想とするばかりでなく、其の國民の個々の夫れ〳〵を總て道德的の人民に仕上げると云ふことを、國家の目的の唯一の職務とせなければならぬ。即ち國家の行動が道德を理想とする計りでなく、國家の仕事は先づ以て國民を道德的に仕上げることに力を注がなければならぬ。さうして斯かる理想の國家が働く時に於て、始めて個人と云ふものが道德的の人となることが出來るのであつて、唯各個人が道德を理想としても、國家が道德を理想としないならば、到底個人の道德的生活は完成せらるゝものでない。個人々々の道德も國家の力に依つて始めて出來上るのである。而して國家の道德的理想は丁度個人が道德的に教育せらるゝ要素と同じ有樣のものである。例へば個人の教育に於て智情意の三方面が完成されなければならぬと云ふことであれば、國家の道德も矢張り此の智情意の三方面が完成されなければならぬ。個人の道德を完成するのと國家の道德を完成するのとは同じやうの意味合を有つものである。

と云ふことを論じて居ります。又〳〵ゲールも左の如く云つて居ます。

人間が個人として道德を行はんとしても、たゞ個人と個人とだけであつたならば人間の道德は完成することが出來ない。即ち一方に道德を守らない者も出て來る。社會の秩序が維持せられざる

塲合には、一方に德を行はんとしても德を行ふことが出來ないことゝなる。國家の組織形體が人類の中にあつてこそ、始めて人間の道德が行はれるのみならず、人間の理想と云ふものは社會的に大きく進んで行くものである。其の大きな道德、人間の立派な道德を發揮するのは結合の力に依る、其の結合の力を實現して居るものは國家である、國家の組織を認めないで、又國家の力を藉りないで事が出來ると思ふのは、其の人間が本統の理想を有たないで狹隘淺近な心を有つて居るからで、眞の理想があり道德の實現を眞面目に考へたならば、直ちに人民の結合を要し、其の結合の力は國家的組織に依らなければならぬことが解る。故に個人の道德精神が眞實であつたら、そこに國家と云ふ形体組織がなければならぬことを深く感ずるのである。

斯くの如くプラトーンもヘーゲルも、眞の大なる理想道德は國家の結合の力に依らなければ實現することが出來ないと主張するのでありまして、參考とするに足る議論であります。

此の理想的國家は西洋の學者の言葉を藉らずとも、我國建國の事實理想を考ふればそこに包含されて居るのである。日本の古代に於ては人民を神の賚（たまもの）と稱せられて、個人を愛撫し給ふ大御心が歷代の御皇室に明かに現れて居る。或は又人民を民草と呼ばれて居る。仁德天皇の事蹟もやはり此の精神から來て居るのであります。又他面に世界的文明の爲にする事柄はやはり建國の理想の中に示されてある。神武天皇の大詔に

天業ヲ恢弘シ天下ヲ光宅スルニ足ル蓋シ六合ノ中心カ

と仰せになつて居る。又日本を中津國と稱するは理想として世界大の事を忘れぬ結果である。又日本と云ふ名も日は東より出でて遂に世界中を照す如く、國威國光を世界の果てまでも及ぼし、而して世界の人類を普く救はんとの精神である。明治天皇の御製に

我が心及ばぬ國の果てまでも
夜晝神はまもりますらん

自分は世界人類の事を考へねばならんが、中には我が心の及ばぬ世界の果てまでも、我が皇祖皇宗の神明は晝夜照覽し守護ましますべしとの聖旨と拜察するのである。御皇室にをかせられては常に世界の人類を愛撫し給ふのである。而し一度に世界人類の全体を救ふことは出來ない。

よろづ民救はん道も近きより
遠きにゆくよしもがな

と仰せになつてをる。世界中の萬民を救はんがために、先づ以て日本國民の結合を御圖り遊ばすのであります。又

よもの國皆はらからと云ふなるに
　　などなみ風の立ちさわぐなん

之は日露戰爭の時御詠みになつた御製であります。彼は世界同胞主義の基督敎を奉して居り乍ら、なぜ干戈を交へねばならぬ樣な非理非道を敢てするかと仰せになつたのである。どうも西洋人の云ふ事は當にならんと思ふ、日本人は正直過ぎるかも知れん。西洋人は權謀を以て外交と考へて居るが日本はそうでない。少しはだまされるかも知れんが、然し正義を以て押し通して行けば宜しい。だまされた方が本當に激昂すると戰になつての時は強いのである。そしてあせる事はないと思ふ、千代八千代に彌や榮ゑます御皇統と共に、遂には國威國光が世界の果て迄も輝くのであるから、日本の政治家は堂々として進んで行けばよいと思ふ。而してかゝる國家を中心として之を擴大する所に、其の內に凡ての文明が進歩するのである。國家の力を以て道德を保護し、宗敎を保護し、學術を保護するので、あらゆる立派な文明をすゝめる中心に國家は立つて居るのである。然し國家を擁護するために時として個人を犧牲とし、時として世界の文明と衝突することが起るかも知れんが、究局に於ては國家を擁護することによつて眞の文明をすゝめることになるのであります。

更に理想的國家の國民は所謂王者の民であつて、心持がゆつたりとして寬い心を持つて居らねばならない。孟子の中に『王者之民皡皡如』と云つて居るが大切なことであります。之れに反し『霸者之民驩虞如』と云つて、一時面白いと云ふてわい〳〵騷ぐが、直ぐへこ垂れるような精神ではいけない。日本國民の品性も堂々として樂み、堂々として憂ふるもので、正大悠遠の氣を受けて居らねばならない。先帝陛下の御製に

あさみどりすみわたりたる大空の
　　ひろさをおのが心ともがな

と仰せられて居るのはかゝる聖旨であると思ふ。

日本の御國体は今更申すまでもなく實に模範的なる理想的國家であると信じます。故にこの理想的國家の發展に向つて努力するが、現代に於て健全なる國民思想と謂ふべきであります。

第三、國民性の發揮

近來佛蘭西に於ても盛に國民性を說くやうになつて居る。佛蘭西は一時民約的自由の思想に依つて全く國家を顧みない者が生じましたが、今日ではやりそこなつたと云ふことに氣が付いて、今更のやうに佛蘭西の國民性を造り出さんと努力して居る。其の他獨逸は獨逸の國民性の發揮に努め、英吉利

は英吉利の國民性の發揮に努めるやうになつて、各國ともに各々特色ある國民性を維持し擴大せんとして居る。日本に於ては無論建國已來の思想、民族の大精神たる國民性の發揮に努力せねばなりません。

國民性の研究を完成するには無論歴史の研究に基くべきで、日本として第一に考察すべきは建國の事實理想であります。而して建國の事實理想の中心には御皇室の嚴存せることで、之に由つて國民性の第一義は忠義の精神の存續發揮である。之は益々培養すべきは申す迄もなく、宗教家でも哲學者でも文學者でも凡て日本人たる以上は、日本の國民性の第一義である忠義の觀念をいやが上にも發揮すべきであります。

又日本人は實行的國民性を有して居る。區々口舌をこと丶せず、實踐躬行を貴ぶのであります。迂遠なる哲學宗教の煩鎖なる議論を取らず、宗教に於ては日蓮主義のそれの如く實行的の宗教が國民性に適合すると思ふ。

又發展性の國民である。鬱屈したことが嫌いで快活なる精神を有つて居る。之は我國民の一大美点であつて、軟弱なる小説なんかに耽るのは國民性の廢頽である。文學に於ても涙のこぼれるやうな輭文學よりは強固なる意志を奬勵すべきである。宗教も亦同樣で消極的のものを排斥して積極活動の主義を教へねばならぬ。或者は宗教を對症的、若くは牽制的に見て、一方に教育が國民道德を鼓吹すれば他面から世界的人道的の水をさし、人々が現實主義實利主義に傾けば宗教は他面から超世間の水をさす。されば牽制的の作用として宗教の消極的感化も、文學の輭弱悲哀なるものも排濟せられてよいと云ふのであるが、之は大なる謬見である。億兆心を一にして世々その美をなすと仰せられし如く、職業は異つて居つても國家の大なる理想に向つて發展の道を取る時には、すべて皆同一の歩調を取るべきであるが如く、國家主義を取る者は人道博愛の理想を閑却し、博愛主義に依る者は國家の擁護發展を忘れて居るならば、一般の國民は其の歸趨する所に迷ふであらう。奥田文相が宗教は人類を基とし教育は國家を基とすと訓示されたが如きは、丁度此の謬見に陷つて居らるゝのではあるまいか。國家主義を取るならば理想的國家主義に基くべきであつて、宗教も道德も文藝も其の他一切の文明が國家に包含されて居る意義であらねばならぬ。國家に調節されたる宗教、國家に調節されたる道德、國家に調節されたる文藝等であらねばなるまい。

又日本人には立派な包容的の精神がある。廣く文明を公平に取り入れる性質を持つて居る。外國人は大体狹量である。例へば佛教に對しても其の内容を研究せずに、一概に毛嫌いするのであります。然るに日本人は支那の文明が渡來すればこれに大なる尊敬を拂ひ、又印度の文明西洋の文明に對して

も非常な敬意を拂つて居る。又同時にこれ等外來の文明に向つて同化性統一性を以て適當に日本的に調和する力を現して來た。已に過去の日本は支那の文明印度の文明に對しては充分適當にこれを日本化せしめました。現在の日本は西洋の文明に對して今や同化せしめんとしつゝあるのである。餘り急激に西洋の各思想が入り來りし爲め混亂を起して居るやうではあるが、それは一遍に澤山の御馳走をつめ込んだから、健康な胃でもいくらか食傷の氣味があつて、何だか發酵しかけて居るやうでありまするが、其の中立派に消化して滋養分を吸收し終るのであると思ふ。

日本人の同化性に就ては面白い譬喩があります。佛教の譬喩でありますが牛の鼻木法門と云ふことがある。非常に大きな力の強い氣の荒い牛であつても一度鼻木をはめて引き廻すと、小さな小供の力に依つても自由になりますが、丁度そんな風に日本人には立派な國民性の忠誠と云ふ鼻木がある。此の鼻木を以て引き廻せば大きな牛の樣な哲學でも宗教でも文學でも、自由自在に引き廻すことが出來るのであります。

然し又國民性に短所があります。短所は漸次改善せねばならない。其の二三を數ふれば、

(イ)思慮の淺薄。實行性に富む反面には思想の問題に就ては考が淺薄であり、深遠なる宗教の信仰とか道德の根底等に就てはぼんやりして居る風がある。

(ロ)短氣。堅忍持久の精神が缺けて居る。日本軍が常に連戰連捷であるから宜しいが、若し負けたら如何になるかと云ふ疑問は重大な問題であると考へます。又長い滯陣の場合には如何であるか。悲境に陷つても之を盛り反す力が少くはなからうか。外國人はかゝる点に於て餘程異つて居るやうでありまして、子々孫々に傳へて事業を成し遂げやうと云ふ樣な氣長い考を有つて居るのである。

(ハ)虛榮心。殊に婦人に多い樣である。併し其の影響が子供に及び、又男子に煩を及ぼす事が尠なくなからうと考へます。加ふるに日本婦人の虛榮心はまだ其の端緒とも云ふべき狀態であつて、若し此の勢にして將來停止する所が無ければ其の爲に國力の發展も妨げ、引いては國家の健全なる發達を害するに至りはせぬか。婦人の襟卷や香水の爲に理想の國家は誤らるゝ如きに至りはせぬかと思ふ。心すべき事である。こゝに於て國民性の發揮を理想し、大和民族の長所を擴大し、祖先の美風を顯彰するが、現時に於ける健全なる思想と思ふのであります。

第四、調節的道德の唱道

今日で述べ來りました凡ての道德の必要なる方面を調節せんとすることが、現今健全なる思想界の傾向であります。即ち個人の人格完成とか、社會の公德心とか、國家的道德とか、人道的道德とか、

宗教の高い信仰とかの凡てに就てその何れをも敬重し、其の一を取つて他を排斥するは如何なる立場から見ても、不健全なりとするのであります。釋迦の教にしても宇宙的の方面のみを説いて、社會的國家的の一面を忘るれば何等の價値がない。孔孟の教にしても深遠なる哲學的基礎を忘るればやはり同樣である。國家的道德にしても其處に人道博愛の精神を缺くならばやはり大なる批難をまぬかれない。之を要するに個人的の道德、社會的の道德、國家的の道德、宇宙的の道德等の全部を網羅し、其の長所を集め、これを適當に調節すべきであります。併しこれ等の一切の道德の中心としては教育勅語に『一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし』と仰せられし義勇奉公の精神を一切の道德の中心に置くべきであります。此の点に於ても奥田文相の訓示は意を盡さぬ点のある事が明である。基督教の大家すら文相の言によりて、宗教は人類を基とするものが最も高く貴きものであると公言して居る。此の如きは全く謂ふ所の道德の調節を忘れたるものであります。國民間に或は個人的立場に立ち、或は社會的の、國家的の、宇宙的の立場に分れて協同一致の精神を欠くならば、國家の禍之に過ぎたるはなしと思ふ。思想史を大觀すると健全なる思想は調節的に進んで來て居る。儒教に於ても其の意義が明白であります。大學の始めに誠意正心修身齊家治國平天下と云ふ事があります、誠意と平天下とを貫いて居り、個人の修養から世界的道德迄貫いて居るので、即ち一切の道德を調節せるものであります。又中庸に

小德川流大德敦化ス

と云ふ事があるがやはり此の意味であつて、小德は川の流れて悖らざる如きもので、此の小德は幾多に分れても並び行はれて相悖らず、而して大德ありて之を包容し調節し行くのであります。

日本の建國を考ふるに又同樣に調節が理想せられてある。既に述べし如く國家を愛し國家を經營する國民道德から、進んで六合を照臨し、及び天地神明を尊敬すると云ふ風に、世界的の道德、宇宙的の道德迄も貫いて居る。大和魂の中には之等のものが悉く包含されて居ります。昔の武士は皆調節的の道德を解して居たが、今日の軍人の精神修養も進んで此の調節の域に到られん事を切に希望するのであります。

又佛教を見ましても同樣であります。佛教では四恩を説く。四恩とは一人の人あれば家に屬す、家には父母あり、父母の恩がある。又同時に社會に屬し、其處に社會の恩がある。又國家に屬し國王の恩あり。宇宙に屬し天地の恩がある。如何なる場合にも此の四恩を有して居るのであります。而して其の中に於て緩急ある事を教へて居る、即ち四恩中皇恩最も重しと説くのであつて、國家を中心として四恩を調節して居るのであります。

更に他の方面から考察しますれば人間道德の出發点は至誠であつて、之が一切の德行の本源となつて居るのであります。至誠より發して父母の恩に感孚する時孝養の德となつて顯れ、人類相互の慈愛に感孚する時同情心博愛心となり、國家の恩を感ずる時忠誠となり、天地の恩に感ずる時崇高なる信仰の德となつて顯はるゝのである。德は色々に分れて居りまするが、道義心の發源点に沂れば一つの至誠より發し來るのであります。故に儒敎では『入りては孝悌慈出でては忠順惠』と云ふことを申します。家にありて親に事ふるに孝、兄に對するに悌、從僕に向つて慈愛の心を有する者は、社會に出でては親に對せし孝養の心が君國に對する忠誠の心となつて現れ、又兄に對し從僕に對せし悌と慈とは長上に對する服從の美德と、部下を憐む惠となりて現るゝのである。而して此の六德に對し共に之を貫ける者は一の至誠であります。

至誠 ─ 入 ─ (親)孝 ─ (兄)悌 ─ (僕婢)慈
　　 ─ 出 ─ (君)忠 ─ (長上)順 ─ (部下)惠

此のことは但六つの場合に就て云つて居りますが、其の意義は總ての場合に通ずるのであつて、例へば軍人に賜はりし御勅諭に就て申しますれば、五ヶ條の德を御擧げになつて、而して誠心は五ヶ條の精神なりと仰せになつたのは、やはり此の理想を御示しになつて居るのであります。

斯の如く儒敎の精神は我が皇道に合するのであつて、諦觀すれば道德は一元であります。即ち宇宙的の信仰も、又世界的の人道も、國家的道德も、家庭的道德も、一元より發し來るのである。又究極の目的より考へてもやはり一元に歸着して居ります。究極の目的は一切の人類を救ひ終る所まで進むのである。儒敎では之を仁と呼んで居る。仁は天下を救ふの精神であつて、國家が國民を愛撫する精神も往いては世界の人類を悉く救はんとするのである。然し物には順序があつて今日の時代は人類を中心とせず、國家を中心とし、國家の結合力を以て漸次叙上の最終の目的に向つて進取するにあることが、色々の學問から立證されて居るのであります。

此の意味に就ては穗積博士が愛國心と題する書に於て詳しく論じて居られます。

此の人類の過去の歷史を考へて現在の有樣を調べて見ると云ふと、世界の文明は國家的の組織構成を以て進んで行くことが生存競爭の原則に適合して居る所の大切の箇條であつて、人類が結合する所の中心點は國と云ふものに歸一するのである。要するに今の世界は國家時代の世界である。國家の組織に依らずして今の世界に對抗して行き、今の世界に獨立して行くと云ふことは出來ない。然らば國家とはどう云ふ意味のものかと云へば、土地と人民と主權との三つの要素から成立つて居るものであつて、一定の土地を自己の領域領分として居ること、人民は其の中に共同の團

體を組立てゝ居ること、さうしてそれが唯一の主權に統治せられて居る所の社會の形態を國家と謂ふのである。古今東西の歴史を大觀して見ると云ふと、時には國家と云ふ組織を小さいものと考へて世界的に宗教を中心に置いて、さうして世界の人類を統一しやうと考へた者がある。それは理想と云ふか、道德と云ふか、宗教と云ふか、兎に角形の方からでなくて、精神界に於て世界の人類を統一しやうと計つた者がある。それは基督もさうであるし、一方から云へば釋迦牟尼もさう云ふ理想であると云ふことが云へる。けれどもさう云ふ理想は今迄の歴史に於ては實現せられて居らない。又一方には英雄が起つて國家組織を小なりとし、世界を武力の上に於て統一しやうと考へ、大戰爭を起して有らふる人類を自己の主權の下に降服せしめやうと計つた英雄もあるけれども、それも遂に其の目的を達することが出來ずして終つて居ると云ふものは、今の文明に於てはまだ世界を統一して事を行ふ所迄達して居らぬ。現今の人類進化の程度に於ては、國家の體制組織が生存競爭の要件に適つて居るものだと云ふことが明かになつて居るからして、簡單に云へば今の世界は國家時代の世界である、國家の組織を超ねて、さうして精神の上から世界を統一するとか、若しくは單に武力を以て世界を統一すると云ふことは、今の世界に於ては空想である。故に自分は人類の一人である、世界の一員であると云ふやうなことを云つて、愛國の精神を

狹いものだと嘲けるやうの者があるけれども、さう云ふ人は現代文明の程度を知らぬ人である。若しも今の文明に於て唯々さう云ふ懸け離れた事ばかりを考へて居つたならば、其の國は遂に滅びざるを得ぬ。隨つて其の人民の福利と云ふものも失つて仕舞ふことになるから、今の文明に於ては人民の幸福を考へる上からも、國家の組織體制と云ふものを鞏固にして、さうしてそれを通して進んで行くと云ふことより外、現代に於ては空想たるを免れぬ。

斯の如く究極の目的が世界的人道的にあることは、宗教の本旨にも現想的國家の目的にも異なる所はない。奥田文相の如く宗教は人類を基とし教育は國家を基とすと、明かに區別を立てる云ひ明かしは言葉の足りぬ所があると信じます。果して教育が國民道德を教ふるのみであつて、毫も人道博愛の精神を省みないならば、其は大なる謬見に陷れる教育方針である。建國の大理想民族の大精神に背いて居るのみならず、文明の敵である。宗教も世界的博愛の理想にのみ走せて、全然國家を忘るゝならば、大に誤れるものである。然るに彼が如くはつきりと人類と國家とを二分するは、確かに理想の調節を欠いて居ると信じます。今日の健全なる思想としては一切の道德の調節を理想するにあるので、若しも人道なり、國民道德なり、個人主義なり、宗教なりの一面をのみ力説して、相互間の調節を顧みないものは、凡て之を一括して不健全な思想と貶して可なりと信ずる。

第五、我國思想史の統一觀

我國の思想史を大觀すると最初に日本の道が嚴存して居る、即ち惟神の道であります。色々名があります、して、或は敷島の道と云ひ、或は皇道と云ひ、教育勅語には『斯道は皇祖皇宗の遺訓にして』とあつて、斯道と稱されてあります。斯道とは又神道とも云ふ。然し神道の語には誤解が起り易い、神道には俗神道が混入して居る、宗教的組織をなして何々教と稱して居るは俗神道である。純粹の神道は日本建國の理想に基ける大和の道であります。此の純神道と俗神道とを明白に區別して置く事が必要である。そこで此の純神道の本質を明白にし、之に附隨して起つた學派を列擧し、如何なる學派が我國神道の穢れなき神髄を傳ふるやを明かにする事は、日本國民として最も大切なることであります。

次に我國の文明の要素としては應神天皇の時渡來した儒教であります、その性質學派及び其の日本化せる意味合を概説し、最後に欽明天皇の時に百濟の國より傳來せし佛教の性質と、其の日本化せる健全なる意義、一宗一派の教義によらず、堂々たる態度を以て、最も廣く且つ深き佛教の意義を把住し、更に此の三教の統一点を明かにし、國民の健全思想を涵養するには、此の三教の統一觀を以て中堅とし、更に廣く世界に智識を求むべきであると思ふ。

一、惟神道の性質及び學派

惟神道の本義に就ては種々の議論があるが自分の信ずる所を申述べ樣と思ふ。惟神道の神髄は何處にあるかと云ふと、理想の國家を經營し此の理想の國家を發展する事が第一義であると信ずる。堂々たる理想を以て眞の國家を建設し擴大せんとするのであります。神樣が日本を建設せられたのは、一切の學問宗教を保護し、一切の文明を保護する理想の國家を建設せられたのである。發しては惟神道となり其處に色々尊き教を含んでは居るが、一言に之を約すれば理想的國家の建設發展であります。

この理想的國家の中心は第一が皇室の尊嚴、第二は之に伴ふ敷島の道即ち包容的の靈教、第三は敬神の本義である。御皇室の尊嚴と其の御教と皇祖皇宗であらせらるゝ神樣とが連結して之が中心となり、それから堂々とおしすゝんで行く實行的の道であります。

(イ)御皇室の尊嚴。第一御皇室には天地宇宙の靈德が合してある事。或は天德とも云ひ、峻德とも云ひ、或は天祐を保全しとも仰せられて居る。天祐を保全しとは宇宙的靈力が御皇室に合一せることである。或は國を肇むること宏遠にと仰せられてあるのも同じ意義である。要するに言葉を以ては到底說く事の出來ない尊い力の事であります。そして此の靈力が御皇室を通して發現するを御稜威の力と稱するのである。御稜威の力は一方には絶大の威力である、即ち仇なすものを碎破する武力である。

又他方には絶大の仁愛の大御心である。換言すれば恩威並び行はるゝ靈德であり、而して根本は天德とも峻德とも靈德とも云ふ可き宇宙大の靈力であります。萬世一系綿々相繼ぎ、億兆一心世々その美をなすは、其の根本に天德峻德が合し、之が原動力となるからであります。

此の如く天德が御皇室に合し、夫れが御稜威の靈動となりて現れて行くのであるが、此の靈力が國民の上に加はると其處に億兆一心の忠愛の精神と成り、御皇室を奉戴する事となるのである。換言すれば御皇統の靈動によつて日本國民は常に道德的に感化されて居るものである。其の億兆一心の國民性は御稜威の靈動によつて導かれて居るのである。日本國民自身が大和民族の精神を以て下の方から發現して行くのではなく、御稜威の德が民心に感孚し來つて、忠愛の美風が養はれて居るのであります。恰もクリスト敎に說く聖靈の感化、神人合一の關係の如く、佛敎に云ふ自力他力の關係の如くである。國民天賦の良心が御稜威の力によつて導かれるのであり、そこに日本人の特色が發揮され、上下相合して天壤無窮六合照臨の御威光となつて、千代八千代に彌や榮ゆまするのであります。

又御稜威の力は單に武力の方面に現るゝのみでない、思想の方面にも及んで、御皇室の尊嚴を侵さんとする思想は、丁度武力を以て我國に仇なす敵が直ちに粉碎さるゝ如く、哲學や道德の方面からでも、又宗敎や文學の方面からでも仇なすものは直ちに粉碎されるのであります。西洋風の思想の自由に就て誤解せるものがある、思想の自由は尊重すべき事ではあるが、然し御國体の根本生命であらせられる御皇室の尊嚴を侵さんとするに際して、夫れが宗敎哲學道德文藝等の衣に隱れて居れば、默過し不問に附して許して置くと云ふ理由は毫もないのである。武力を以て仇なすものあらば億兆一心の誠心から死を以て御國体を擁護し奉るが如く、思想を以て仇なす者に對しても同樣に警誡せねばならぬ。之を放擲して顧みないと云ふは我國民の不透明な頭腦の謬見であるが、御稜威の發動は必ず思索の撰を慎むことに相成ると信じます。

(ロ)包容の靈敎。惟神の靈敎の意義はあらゆる思想なり文明を包容して行くので、決して他より來るものを排斥するものでない。儒敎が來れば之を包容し、佛敎に對し歐米の思潮に對しても之を包容して、適當に取捨銑錬して進んで行くのである。若し他より傳來せし思想の中に不健全なる分子があり、惟神の大道を犯さんとするならば之を銑錬するのみであります。決して性の惡い姑が嫁をいじめる如き態度、狹隘固陋なる守屋の如き態度を以て、儒敎とか佛敎とか或は歐米の思想を排斥せんとするものあらば其は惟神の道に背く大なる誤りであります。明治維新の五ヶ條の御誓文に

智識ヲ世界ニ求メテ大ニ皇基ヲ振起スベシ。

と仰せられて居るのはやはり此の聖旨である。

此の事は建國當初の理想の中に定まつて居るのである。三種の神器の中に鏡がありますが、鏡は何物をもうつし、而して何事も小言を云ひません。然し鏡を見れば自分の顏のよごれて居ること、頭の髮のこわれて居ることを自覺し、鏡は顏を拭へ髮を直せと云ひませんが、自らはぢらつて以て改むる事となるのである。公平無私であり、鷹揚迫らざる所が惟神の道の精神である。如何なるものをも包容し如何なるものをも反省せしむるのであります。此のことは決して理屈ではない。此の如く日本の文明は今迄やり來つたのであつて、儒敎に對しても佛敎に對しても、之を包容し之を反省せしめ、今又西洋の文明に對しても同じ事を試みつゝあるのであります。近來少しく思想界が混亂の狀を呈して居る樣でありますが、それは餘り一度に西洋の思想を併呑した爲に、少しく混亂して居るに過ぎない、決して悲觀することはない、近き將來に惟神の靈敎によつて、立派に之を消化し調節する事と信じます。

(八)敬神の本義。日本人は祖先崇拜の精神を以て、我國建國の皇祖皇宗を尊敬するのである、遠きを追ひ本に報ひ始に反らんとするは日本人の特色であります。此の精神は日本文學の中にも充分現れて居り、又孝養の倫理に於ても親の精神を現さんとする思想となつて現れて居る。封建時代の仇討の如きも基く所は同じ思想であります。彼の赤穗義士の事蹟は決して純粹の仇討ではない、淺野內匠頭は

時の法律によつて切腹を命ぜられたので吉良上野守が殺したのとは違ふ。然るに四十七士が上野守を討つたのは、つまり內匠頭の志を行はんとしたのである。內匠頭が抱いて居つた鬱憤を繼いで其の精神を行はんとしたものであります。之が即ち日本人の魂である。先人の志を尊重し之を顯彰せんとするので、勅語に斯の道は皇祖皇宗の遺訓とも、祖先の遺風を顯彰しとも仰せられたのは、やはり皇祖皇宗の御精神を尊重せらるゝ聖旨であります。そこに敬神の觀念が含まれて來るのであつて、國を肇められし神樣に對して敬意を拂ふのである。他の神樣は別として、伊勢の大廟に奉安せられて居る天照大神に對しては、日本人悉く敬意を捧ぐべきであります。

此の敬神の觀念は表面は道德的であるが、然し其の裏面には宗敎の性質を含んで居るのである。元來宗敎と道德とを根本的に區分するのは不當である。武士道は道德であるが、其の奧にある純忠至誠は宗敎的である。物事はその妙致に至れば微妙なる有樣で調節せられた色彩を尊ぶので、晝夜の關係の如きも漸々暗くなつて行くのである。明白に之から先は道德、之から此方は宗敎と區分するのは誤れるものであります。然るに文部省が敬神の訓示を發したのに對して、基督敎徒が抗議を申し込んだ。日本の敬神の觀念は道德か宗敎かと質問したのであるが、かゝることを質問するのは彼れ基督敎徒が我國民道德の意義を理解せざるより來る。又文部省の官吏が其の質問に苦心して、我國の敬神は宗敎

でない國民道德であると答ふるに至つては、餘りに自信力のなきに驚かざるを得ない。伊勢大廟の前に參拜して國民が頭を下げるのは、只形式的に敬意を拂つて居るのであるか。『たゞ有難さに涙こぼる』の古歌の如く宗教的至誠を捧げて居るのである。我國運の隆昌を祈り、又時に皇軍の勝利を祈るは確かに宗教的意義を併有して居るのであります。

斯の如く皇室の尊嚴、包容の靈教、敬神の本義のこの三つの事柄が惟神の道の要義であると思ふ。而してこの三者相俟つて理想的國家は擴大さるゝのである。その中心生命は御皇室の尊嚴であつて、御稜威の力の感孚する所に、日本軍隊の武勇となり、如何なる强敵に對しても之を打破ぶる力となり、又仁愛の大御心となつて現れる所に、道德宗教等は保護せられ、社會救濟の事業をも進め行き、人生の生活をば豐富にし、往いては世界の文明を完成する事に至るのである。國民はかゝる意義、即ち文武兩道を以て皇室の尊嚴を翼賛し奉るのであります。而してかゝる理想の國家の建設を明かに說明せるものが即ち純神道であります。

次に惟神の道の學派に就て簡單に申述べますれば、

(イ)純神道。儒教佛教の渡らざりし以前日本開闢當時より傳つて來た教である。而して只今申述べた三つの性質が要義となつて居る所のものであります。

(ロ)一實神道。之は傳教大師が唱へられたもので、佛教と神道との融合を示めしたものである。

(ハ)兩部神道。弘法大師が唱道せられたもので傳教大師と思想の傾向は同じものであります。一實神道も兩部神道も惟神の道を傳ふる上に、調つて居ない点はあるが思想は決して惡くない。一概に神佛融合の思想に反對して兩大師の事を惡く云ふ學者は我國の思想史を誤るものである。丁度明治七八年頃の軍人を評して其の形式の末に於て批難すると俱に、その勤王の誠忠をも認めざると同樣であります。

(ニ)三教融合神道。純神道の系統を引いて居るものであつて、聖德太子、道眞卿、日蓮上人、北畠親房卿、一條兼良卿、水戸光圀卿等、思想界に於ける卓出せる人々が之に屬して居ります。神道と、儒教と佛教との三教の何れをも包容して、其の健全なる方面を調和して發揮するのである。

(ホ)唯一神道。これは佛教の勢力を嫉み、兩部神道に對抗して起つたものである。足利時代に一時勢力を得て朝廷に用ゐられんとし、兩部神道は驅逐せられんとする勢となつた。其の時南光坊天海が參內して唯一神道の誤れることを奏上した。其の說く所理義頗る明晰であつたから、叡感斜なちず、直ちに唯一神道は斥けらるゝに至つたのである。天海は又江戸に下つて德川氏を說き、唯一神道を斥け、神佛融合の思想を確立し、遂に東叡山を建立することになつたのである。

（ヘ）社家神道。伊勢外宮の神官であつた度會延桂と云ふ人が稱道したもので、これも佛敎の勢力を嫉み、卑劣な感情より起つたのである。彼は倭姫の託宣に『佛敎の呼氣を止めよ』と御告げがあつたと稱して、伊勢大廟に僧侶の參拜を禁じたのである。學說としては何等の價値はない。又此の託宣も無論揑造せしものである。日本の神樣がかゝることを仰せらるゝ筈は斷じてない、かゝる嫉妬の神樣では決してないのである。神道學者中尤も造詣の深かつた一條兼良卿が、纂疏の中に我國神道の精神が極めて廣く包容性に富んだことを說いて居る。『吾邦開闢の事幽明の跡古より神聖相授け、或は人に托して宣言す、而してその所說自から三敎の理に符合せざるはなし』と述べて居る。今日でも御皇室の思召を見ると實に包容的に在らせらるゝので、その御皇室の淵源であらせらるゝ神樣に於て、社家神道に云ふ如き嫉妬の託宣のある筈はないのである。

（ト）垂加神道。土佐派の朱子學をやつた山崎闇齋先生が、度會延桂から前述の如き系統に屬する神道の相傳を受けて、儒敎の木火土金水の五行に當嵌めて神々を說明したのであります。闇齋先生は會津藩に抱へられたが、其の緣故を以て會津に於ては排佛說が大に勢力を得、佛敎を壓迫したのであります。

（チ）復古神道。京都稻荷山の神宮荷田東麿が、最初儒敎及び佛敎に於て、御國體の尊嚴を忘るゝを慨嘆して唱へ出したので、其の後加茂眞淵、本居宣長、平田篤胤等（之を四傑と稱す）が呼應して起つた。其の趣意とする所は日本古代の歷史を研究して、神道の復古を計り御國體を明かにせんとするのである。至極結構な趣意であるが、惜い哉宗敎觀の方面に於て狹隘固陋であつて佛敎を罵り聖賢を嘲つたのであります。元來復古と云ふことは一方には本に復ること、一方には新しく智識を求めて啓發する所があらねばならぬ。例へば王政復古に於て明治の新氣運が起つた如きである。然るに復古神道派の復古思想は新啓發の精神を全然欠失して居るものであり、豐富に發達し來れる日本の文明を排斥して故らに貧弱ならしめ、素朴未開の古代文明に復歸せしめんとしたので、その謬見憐むべき點がある。それから水戸にも復古神道の思想がある。光圀卿が大日本史を作り日本建國の事を明かにせられたが、全くこの擧が眞正な意義に於て復古神道の源をなして居るので、寧ろ健全なる意義の復古神道は光圀卿によつて發揮せられたと云ふべきであります。

（リ）敎會神道。維新後續出した丸山敎とか黑住敎とか蓮門敎と云ふやうな、敎會を立てゝ宗敎化して居るものを云ふのである。宗敎として見る時はかゝる敎會的神道は佛敎やキリスト敎に對比して遠く及ばざる點が多々存して居るのであります。

（ヌ）新研究の神道。近來學者の間に研究せらるゝ所の學術的の神道であつて、筧博士、木村鷹太郎氏

等が其の重なる人である。尙ほ研究を續けつゝあるもの、而して其の傾向は純神道の精神を發揮しつゝ、三敎融合の方面に進まんとし居るのが尤も有望であると思ふ。

二、儒敎の性質學派及其日本化

儒敎は餘程早くから日本に傳はつて居つたのであるが、その表向き渡來したのは應神天皇の十六年に、王仁と云ふ人が日本に來たが、皇子稚郎子が彼に就て御學びになつた。王仁が持來つた書物は論語十卷千字文一卷であります。その前にも朝鮮と交通したから民間には多少傳はつて居たのであるが、其の發達は遲々たるものであつた。所が聖德太子が出られて佛敎が發展するに當り、この時僧侶の手によつて儒敎も紹介せらるるやうになつたのである。奈良朝時代には佛敎には高僧碩德を續出して居るが、儒者の方には有力者は全くない。平安朝になつても佛敎の方では傳敎大師弘法大師其他の高僧が續々輩出して居ますが、儒敎には別段さゝい者がない。寧ろ傳敎大師、弘法大師等によりて、僧徒の養成には儒佛二敎を敎へたもので、斯くて全く佛敎徒の手によりて儒敎は紹介せられ傳播したものである。鎌倉時代にも佛敎徒からは中々英僧が出て居り、淨土宗、眞宗、日蓮宗、禪宗等は皆此の時代に興起したのであるが、儒者中には矢張傑出した人は一人もない。足利時代になつても戰爭の爲に

文學は衰頽し、五山の僧が詩文的學問をやつて居た以外、儒學の精神を學ぶ者はなかつたのである。

德川時代になつて佛敎徒の中に氣慨あるものが出てゝ佛敎の弊害に憤り、蹶然として起つ者が出て來たのであります。當時の僧侶が殆んど厭世主義、獨善主義、惡平等の思想に捉はれて、現實の人生を輕んじ、君臣父子の倫理綱常を無視するを見て、禪宗の僧徒藤原惺窩が還俗して儒敎の獨立を唱へ、之に次で幾多の碩儒が輩出しまして、儒敎の大發展を見るに至つたのである。されば儒敎は德川時代に及んで初めてその學說の見るべきものあるに至つたのであります。

今その性質の梗概を申述べようと思ふ。儒敎の本旨は哲學にあらず、宗敎にあらずして、確かに人倫道德の敎であります。道德的政治を行ひ、倫理的國家を建てんとするが本領であると思ふ。個人の修養を說くことあるも本旨は天下に王道を布かんとするのであります。學派によりて區分すれば朱子學派は學究的哲學的傾向があり、徂徠學派は倫理的政治を本旨とし、孔子の主唱を從順に奉戴する者である。故に此の点より云へば寧ろ徂徠學派の主張が儒敎の本領を得たものと見るべきであります。

次に儒敎の我國に與へた効果に就て一言せば、第一には文字の普及であります。儒敎によりて文字が民間にまで傳はり、種々の事柄を記す記號を得た次第であります。文字記號がなければ文明は決して進歩するものでない。文字がなければ歷史を經て積み重ねた多數人の經驗を、一人の智識に取り容

れることが出來ない。どんな豪い人でも生れてから死ぬる迄の自己一人のみの經驗に依る智識に限ちば僅かなものである。長き歴史的發達の多數人の經驗を、文字を通して一人の心に集むることにより て文明は發達するのである。我國の文明の發達を助けた文字記號の大功は儒教の賜であることを忘れてはならぬ。

又概念を與へし功績である。吾人は概念によりて智識を把住し得るのであり、又傳達し得るのである。概念によりて色々の理想や意義を簡單な言葉に纒めて相互の功用をなすのである。例へば忠と云ふ一字に武士道大和魂の崇高にして且つ多方面の意義精神等が皆概括せられて通用するのである。而してその概念を與へしは儒教の大功である。儒教の性質に就てその主要なる点を數ふれば左の如くであると思ふ。

(イ)忠信。孔子は『主(トス)忠信(チ)』と云つて居ます。忠は我心の有りの儘であつて眞心である。忠信の一字を眞心と見ることは古來學者の一致せる所であつて、論語には『我道一以貫(テク)之(ヲ)……夫子之道忠恕而已矣』と云つて居る。忠信と云ひ忠恕と云ふが同し意味であります。又中庸にも孟子にも之を至誠と云ふ言葉で云ひ現して居ります。

『至誠而不(ニシテルゼハ)動者未(ダ)之(ヲ)有(ラ)レ之也』

至誠は實に天地を感格せしむる者である。中庸には『至誠如(シ)神(ノ)』と云ひ、『誠者天之道(ナリ)也。誠(コスヽメチ)之者人之道也』と云つて居るのである。而して至誠は人々固有の明德により發現するのである。人々が先天的に具有せる明德を明にするが至誠である。この明德が天道に接觸して發現するのである。誠は天に存して居るが、此の天に在る誠に感觸して、我にある誠が發現して來ると云ふので、此の思想は儒教に於て尤も大切な本旨であります。天も神も顧みずして單に自分が正直であつて宜いと云ふのみでは、眞正の力が發現して來ないのである。天道明德の教は儒教の根本義であつて、又是れ實に千古不磨の眞理であります。

(ロ)仁義。この天道明德が合して至誠が發現して來ると、それより仁となつて行はれ、又仁と同時に義となつて行はるべきであると教ふるのであります。而して義を明にする中に先づ以て君に對しては忠、親に對しては孝と云ふ忠孝の節義が尤も大倫なりと定めたのである。仁の精神を行ふに當り義を以て宜しきに適するやうに節して行くのである。

(ハ)弘毅。尙ほこの仁義を行ふ爲に弘毅と云ふことを教ふるのであります。弘毅は至剛至大の精神であつて、論語に『士以不(ニテ)可(カラ)不(ンバレ)弘毅(ナラ)。任重道遠(シ)。仁以爲(テス)レ任(ト)不(ズヤ)亦重(カラ)乎。死而後已(シテ)不(ズヤ)亦遠(カラ)乎』と云つて居る。仁義を以て人の本領となし、その本領を成し遂ぐる爲に生涯を捧げて健鬪すべきことを說

くのであつて、儒教に於ける此の至誠仁義弘毅の精神が調節せられ、これが我國固有の武士道と合致して發達したのであります。

次に儒教の學派に就て少しく申述べようと思ふ。

(イ)朱子學派。藤原惺窩、林羅山がこの學派に屬して居ます。林羅山は德川の初めに聖堂を支配して居ましたから、朱子學は非常に勢力を得て一時は朱子學派以外は各藩に於て學ぶことを禁じたこともあつたのであります。

(ロ)徂徠學派。朱子學派に對抗して起つたのは徂徠先生であつて、或はこれは古文辭學派とも稱するのであります。

徂徠先生の學統を繼いだ學者に太宰春臺と云ふ人があり、朱子學派が德川氏の權力の後援あるに對し、學問の上から堂々對抗して之を壓するに至つた。

(ハ)古學派。二派あつて、一は山鹿素行先生の武教派である。聖賢の道に武經の精神を加へて軍旅の事を稱道し、文武兩道を併せ學んだのであるが、素行先生の思想が津輕耕道と云ふ人に傳はり、それから吉田松陰先生に傳はり、維新の大業に大關係を及ぼしたのである。乃木將軍の如きも其の系統に屬する一人であります。

二は堀河學派であつて、伊藤仁齋と云ふ哲學者が出で、其の子の東涯先生も克く父の學統を繼いだのであつて、一派の學風を成したのであります。伊藤仁齋先生は書物を購ずるに先だち、『赫々在上。明々在下。心苟私曲(ナレバ)天其厭(レテンヲ)我』と云ふ事を誓ひ、而して後講義をした人であります。行ひ正しく品格の高い人であつた。貧窮の生活はしても大納言の風格があると云はれた位である。或る時賊に出逢つたが、仁齋先生は金錢は一文もない。着物を脱いで裸になつて平然として歩いて往つた。其の態度が餘り泰然として立派であつたので、賊が感心して、彼は何を商買とする人か聞いて見ようと云ふので、追ひかけて來て呼び止めた。『一体御前は何の商買か』『俺は儒者だ』『儒者とは何だ』『人たるの道を說くものだ』と云ふので仁義の道を熱心に說いて聞かされたが、その熱心至誠の說明に、賊がすつかり感心して『どうぞ子分にして呉れ』と云ふので一同先生の門弟となつたと云ふ事である。

(ニ)陽明學派。近江の中江藤樹先生より起つたのであつて、此の學派には池田侯に仕へた熊澤蕃山先生、京都の三輪執齋先生、夫れから大塩平八郎中齊先生があり、又西鄕隆盛横井小楠等の活動的人物が此の學派から出て居るのであります。

(ホ)拆衷學派。徂徠學朱子學古學の間に爭が烈しくなつて來たので、そこに拆衷學派が起り、榊原篁洲井上金峨龜田鵬齋等の人々が現れたのである。龜田鵬齋先生は四十七義士の碑文を書いた人である。

奇行の多い人で或る時德川聖堂の儒者にしようと云ふので伊豆守が呼び出した、所が貧乏であつて着る着物がない、柳原に往つて古着屋で買ひ求めて來た。裃の上に付けた紋と下着の紋と違つて居つたから、どちらが本當かと尋ねられた。どちらも本當でないと答へた。伊豆守は悅ばなかつた。其の時先生は人を呼び付けて置いて紋の事位を氣にするは語るに足らぬと云ふので、サッサと歸つて來たと云ふ事であります。

(ヘ)獨立學派。此の派の有名な人は賴山陽貝原益軒二宮尊德の諸儒かあります。益軒先生は平民の爲に通俗な文章で聖賢の敎の普及を計り、婦女童幼町人百姓に對して道德的感化に勉めた人である。

(ト)註疏學派。聖賢の遺書の註釋につとめた學派であります。

(チ)考證學派。現今の歷史的研究と云ふ樣なやり方であつて、太田錦城先生等であります。

已上の學派に就て各派の特色は何れにありやと云ふに、朱子學派は理氣の說を取り、宇宙開闢の說に力を入れて居るのであつて今日の哲學であります。更に天地の公道とか鬼神の事を盛に論じ又性善論に力を盡くして居る。此の學派は佛敎を嫌いますが、其の學說は佛敎の影響を受けて居るのであります。又今一つは道德の標準は何處に置くべきかの問題を捉へて說明して居るのである。古文字學派は徂徠先生の議鋒は銳利當るべからざるものがありましたが、其の學說は極めて穩健である。此の學派は孔子の言行を正直に學ばんとするのであつて、孟子已下は取りません。又書物では論語に從順に依るのであつて、其の註釋書を取らないのである。而して朱子學派が宇宙開闢等の哲學說に力を入れて居るのを攻擊して、倫理的政治の普及を理想したのであります。武敎派は文弱に流れるのを憤慨して軍旅の事を盛に唱道したのである。堀河學派は理氣の說に反對し、宇宙は一元氣あるのみ、理と云ふ抽象的のものを認めない、陰陽の外に理を別出するを許さない、陰陽即ち理と云ふのは假にそう云ふ語を用ゐるのであつて、空論に過ぎないと主張したのであります。陽明學派は知行合一を尊び、書物に重きを置かず『六經皆我註脚。非我註六經。六經來註我。此心一明。一了百當』と云ひ、六經は自分を說明せるものであり、自分の心を明かにするために經書があるのであると云つて、盛に實行的精神を主張したのであります。其の他の學派については之を略します。

是等の全體を通じて考ふるに何れも意義ある主張と信じます。朱子學派が宇宙論に力を入れたのは儒敎の本領としては軌道を逸して居ると思はれますが、然し人生問題としては必須欠くべからざる肝要な議論であります。又徂徠學派の倫理的國家の主張其の他の學派の主張も捨つべからざる主張がある。只之等の學派相互の間の各々の長所を綜合して之を調節するのを忘れて居るのが大なる欠点であると信じます。

今儒教の日本化を云はば仁義の義が中心となり、進んで君臣の關係に於ける忠に專注する事となり、之に弘毅の精神が加はり、陽明學派の實行的活動的精神及び武教派の軍旅の思想が加はつて武士道の發達となり、幾多の道德を忠義の一に包容する事となつたのであります。

三、佛教の性質及其の日本化

(イ)哲學的方面。佛教は哲學性質に富んで居る、東洋文明を代表する哲學の方面では佛教を推さねばならぬ。哲學的に宇宙の本源を說き、人格實在を說いて居る。朱子學及び惟神の道に於て哲學の方面あるも、然し其の說に於ては佛教に及ばざる遠しと云はねばなりません。

(ロ)宗教的方面。崇高なる信仰を教ゐ、本佛を明かにして居る。此の思想は實に尊いのであり、世界中にかゝる宗教の意義はありません。『一月萬影普現色身』と說くので、天上の一月が萬水に影を現するが如く、一切の尊き神佛等を一の本佛の本元に統一し來るのである。この統一的の意義が基督教にもない。又阿彌陀とか大日とかを立てゝ佛陀の分裂を說くは、佛教の本領ではありませぬ。世界の宗教は最後は此の一神の長所と多神の長所とを取り、而して統一を理想とする本佛の思想に統一さるゝ事と確信するのであります。

(ハ)倫理的方面。佛教には菩薩行を奬勵す。佛教の信仰には諸種の說あるも、一言に云へば人々を菩薩になさんとするのである。菩薩とは大精神に生きて、上には無限の向上を辿りて崇高なる道德生活に入り、下には大慈悲を有して普く一切衆生を救濟せんとする者である。儒教の君子、日本の丈夫は菩薩と同じやうの意義であり、又各々特色があります。一言菩薩と云つても大感化がある。腰拔け菩薩、ヘコタレ菩薩、性惡菩薩と云ふやうなものはありません。菩薩の一言丈でも完全なる倫理思想を含んで居ることが分るのであります。傳教大師が桓武天皇の時に、日本の佛教は菩薩の教を立つるのである。政治家でも軍人でも在家菩薩の修養を積むことにすべしと云ひ、職業が忙しいと云ふので修養を怠つてはならないと云ふので、陛下に奏上し、勅許を得て大梵鐘を鑄、その事を鐘に鑄つけました。

『佛道稱二菩薩一。俗道號二君子一。其戒廣大眞俗一貫。故法華經列二二種菩薩一。一出家菩薩。二在家菩薩』日本人は皆菩薩であることを大梵鐘の腹に鑄つけて、忘れないやうにしたのであるが、今日では殆んど忘れてしまつたのであります。要するに菩薩行は崇高にして且つ調節的の倫理を教ふるものであります。而してその中心を立つるのである、文殊菩薩や觀世音菩薩は日本的の大菩薩でない。文殊菩薩はゐらいと云つても哲學的の理屈ばかりを云つて居つて國家あることを知らない。觀世音菩薩は慈愛に富んでは居るが個人救濟である。日本的菩薩の精神即ち立正安國の意義を明にしたのは日蓮上人で

あつて、上人は菩薩の精神を時處位に適應せしめ、大日本國の理想的の菩薩を以て任じて居られたのであります。

(二)周備せる德化。實際生活の問題に關し、人生の生活は日常の間に種々繁累の多いものでありますが、之に對し佛敎は周備せる德化安心を敎へて居る。人生は煩雜なるものであり、又小人が非常に多い。儒敎にては『女子と小人は養い難し』と云つて逃げて居りますが、人間の中では女子丈でも約半數あり、更に小人を加ふれば女子と小人とでは人間の大多數である。之が敎化を放棄する事になると德敎の功績は大部分ない事となる。諸君の家庭にも女子はあり、自分は小人であるかも知れぬ。そこで周備せる道德を說き、懇切慈愛の敎を立て、八万四千の煩惱に對して八万四千の敎を開出した佛敎は確に人生の光である。佛敎は些末の事までも整頓して見捨てない。かゝる敎がなければ煩雜なる人生を救濟して行く事は出來ません。この点は素朴なる神道、及び玄關前表通りのみの儒敎ではだめであつて、臺所にも裏通りにも行渡つた儒敎を要するのであります。

佛敎の日本化。調節的道德の中心が尊王的國家的になり、又現實的となり活動的となり實際的となつたのが佛敎の日本化であります。御國体によりて導かれて同化したのであります。大に我國の文化を扶翼したのである。我國の神明に對しても、御國体に對しても、風俗に對しても、哲學とも、德敎

にも、信仰にも、多大の貢獻ある事を忘却してはなりませぬ。

結論

自分は顯本法華宗の管長であるが、宗敎專門の講話をなさずして、最初から今日に至る迄數回に亘り現代思潮に就ての講話をのみ續けしが、之に就ては疑ふ人もあらんかなれど、實は今迄說き去り說き來りし思想の問題が悉く日蓮主義の發揮であります。以下少しくその理由を說明しようと思ふ。

健全なる方面に於て

(一)文明の統一觀　を述べしは、日蓮主義が統一觀の指針であると信ずるのであります。日蓮主義は人の名に取りしも、意義より云へば統一主義と稱せらるゝのである。例へば天晴地明と云ふ語にしても其處に明白に宗敎と道德、思想と現實との統一の意義を示して居る。上人は佛敎家でありながら儒敎を研究し皇道を研究して、此の三敎を融合せられた所の模範的の大偉人であります。日本に於て人文統一の理想を代表する者は實は日蓮上人であります。水戸光圀卿も三敎融合の理想を有せし偉人であるが、光圀卿と日蓮上人とを比較するに、佛敎の方面で其の研究の淺深は論ずる迄もない、儒敎に於ても皇道に於ても光圀卿は日蓮上人に及ばぬ点があります。北房親房卿も日蓮上人の大信仰者であ

り、護良親王も法華經を御信じになり、又畏れ多いことでありますが　後醍醐天皇は御崩御に際し、右手に劒を提げ、左手に法華經を御持ちになつて、此の姿を改めずして葬れと御遺勅になつた。今尚は吉野の山陵には其の儘の御姿にて靜坐あらせらるゝ事と拜察し上るのである。かゝる次第でありますから今日に於ては、此の日蓮主義を發揮させねばならぬとの素が識者の内に生じて、先年東京に天晴會なる者が起つたのであります。而して陸海軍人を初めとし、學者政治家等當代一流の人々が日蓮上人を研究して居るのである。數年前に起つたのであるが既に大發展をなしつゝある。當師團長閣下から御招きによつて、今回渡道して諸君に御面會することゝなつたのも、天晴會が其の緣を結んだのであります。師團長閣下も熱心なる會員の一人であります。天晴會の理想は一方には御國体を研究し、他面には東洋文明の精華である聖賢の道、佛陀の道を發揮して、健全なる國民の思想を涵養せんとするのであつて、之れ皆日蓮主義の發現であります。

(二)理想的國家　の主唱者としても、日蓮上人は尤もその魁たるものであります。上人は立正安國論を造られた。立正とは理想の意義である。即ち高遠なる理想を國家の中心に置いておし進んで行くのであつて、此の点に於て上人は理想的國家主義なりと稱せらるゝのである。

(三)歴史的國民性　に就ても、上人は頗る國民性を代表して居らるゝ人である。上人の性格已に大和

民族の模範人物とも稱すべきであつて、忠義の精神は特に異彩を放ち、又其の他實行的、活動的、發展的、包容的、同化的精神を完備したる偉人であります。

(四)調節的道德　に就ては、日蓮上人は宇宙の絶對に對する信仰を有し、大慈悲心を以て一切衆生の救濟を理想し、立正安國を稱へて、大義名分を明かにし、親孝行の方であり、又自己の力量を信ぜし人であり、師に篤く、弟子を愛し、仁禽獸に及んだ、實に調節的道德を體現せし偉人である。宗教的聖者であつて、同時に純忠至誠の國士であります。

(五)三教の關係　に就ては、皇道に於ける皇室の尊嚴を擁護し、包容の襟度を寛くし、特に敬神の本義に至つては統一神的の教義を鮮明にした先覺者である。

又儒教の特色である至誠の思想は日蓮上人が頸の座に臨んで泰然自若たりし光景は、眞に至誠神の如きであり、又『至誠(ニシテル)不ノ動者未ニ曾有(ゼハダテラ)レ之也』との格言は上人に於て身讀せられ、明德天道の思想は上人の宗教信仰の中に本佛觀佛性觀と合して大發展をなし、仁の精神は佛教の慈悲の精神と合致し、義の觀念は宗教家の大多數が忘却する通弊なるも、上人に於ては國家觀を確立し、又大義名分を明かにし、身命を捧げてかの鎌倉の壓制武斷の勢力を恐れなかつた大夫夫である、國士である。

權ノ大夫は民ぞかし、隱岐の法皇は天子なり。

と叱咤し、又源平二家の勢力を恐れずして

源平二家と申して王の門守の犬二疋候。

と明白に我國固有の君臣の大義秩序を示めされ居る。又

日本國初りてより謀反の者二十六人。……其の第二十六は義時なり。

と叱咤して、權勢盛んなりし執權北條の祖先を捉へて謀反人と宣言されて居る。又非常に廣遠なる宇宙的世界的の精神に於ても、其の中心を國家に置くべきを敎へ、

我れ日本の柱とならん

と誓はれて居る。如何に北條氏が迫害を加へて、或は頸切らんとし、或は遠島流罪に處しても、上人が國の爲に盡さんとの熱誠は破ることが出來なかつた。又如何に宗敎を說いても國家を忘るゝ時は益なきを認め、立正安國論に

國亡家滅者佛誰可レ崇。法誰可レ尊。先祈二國家一。須レ樹二佛法一

と嚴誡せられ、世界的宇宙的精神と國家との關係を解決せられ、儒敎の特色なる義の觀念を充分に應用せられたのである。又忠孝の關係に就ては

慈父王敵となれば、父を捨てゝ君に參るは孝の至りなり。

と云つて居らるゝが、儒敎の日本化せし眞髓は實に此の点に存するのであらう。又君が若し無道であつても之を諫ぢるのみで、取つて代ることを許さないが日本的儒敎である。日蓮上人は此の意義に於て伯夷叔齊の故事を慕ふて身延山に隱遁して居らるゝ。水戸光圀卿も非常に伯夷叔齊を敬慕し、夷齊が西山に隱れた故事に因んで其の隱栖の地を西山と云ひ、自から西山公と稱せられて居るが、光圀卿は日蓮上人の先蹤を學ばれた者であります。又弘毅とか剛壯と云ふ精神は、日蓮上人に於て遺憾なく發現せられて居るは今更言ふまでもない。高山博士が上人に感心せられたのは『本より存知の旨なり』の一語である。上人は頸の座に坐つても『本より存知の旨なり』、流罪せられても『本より存知の旨なり』と云つて居らるゝ。博士はこの語に感心したのでありますが、これ即ち弘毅の精神である。弘毅とは要するに決死の覺悟に外ならんので、松陰先生は

死而後已の四字は言簡にして義廣し。

と云つて居らるゝが、上人は不惜身命の覺悟の强い人である。

更に佛敎の事に就ては申さずとも上人に具備せられある。上人は佛敎の健全なる方面を代表せる偉人と稱すべく、殊に高遠なる哲學の方面宗敎の方面にのみ走る事なく、現實生活との調節を理想せられて居る。或は

御宮仕を法華經と思召せ。

武士が君に仕ふるそこに佛敎の光りが輝くべきであり、又

女房と酒うち飲んで何の不足かある。

五節供の時も南無妙法蓮華經。

常に高き理想信仰を現實生活の上に調節し來られて居るのであります。而して菩薩行の完全なる實行者であります。

此の如く日蓮上人は皇道の精神に於ても儒敎の本旨に於ても、佛敎の活信仰に至るまで、悉く一身に體現せられた我國民の凡べてが鑽仰すべき模範的偉人であります。

次に不健全なる方面に就て言へば

(一)科學万能の弊　に對しては、日蓮主義は理性を尊重するが故に、科學已下の事に關して迷信を維持する必要なきと同時に、高遠なる哲學の原理と、崇高なる宗敎の信仰とによりて、智識と信仰との接觸を持ちて科學過信の害を去り。

(二)懷疑思想の弊　に對しては、永久不磨の根本的信仰を敎へて思想の標準を確立し、人生觀社會觀に就ても光明と勇氣とを與ふるものである。

(三)個人主義の誤解　に對しては、四恩報答の敎訓を與へて調節的の道德を鼓吹し、個人主義の短所を去り、その長所たる自信力と他人の人格を尊敬する點に就ては、佛性の活現と不輕菩薩の行儀に順ひ、上人自らは日本の柱を以て自任し、又人間の價値の方面を發揮せられて居る。

(四)博愛主義の誤解　に對しては、儒敎に云ふ義の觀念を尊重して忠孝の倫理を唱道し、大義名分を明かして、秩序を序れたる博愛主義を訓誡し給ふて居る。

(五)固陋なる國家主義の弊　に對しては、我日本國は醍醐一實の國なるを敎へ、立正安國を說き、理想的國家の確立を絶叫し、八万の國にも超へたる國なるを明かし。

(六)現實主義の弊に對しては、『藏の寶よりは身の寶、身の寶よりは心の寶第一なり』と敎へ、理想を捨てたる現實は夢幻に同じきを誡め、天晴れて地明かなりと云つて、世法を徹見するは崇高なる宗敎に由るべきを說かれて居る。

已上開陳する所によりて今回の講演が國民思想の事であると同時に、日蓮主義の講演である事を御了承あることゝ信じます。

斯の如くに(一)科學万能の弊、(二)懷疑思想の弊、(三)個人主義の誤解、(四)博愛主義の誤解、(五)固陋なる國家主義の弊、(六)皮相的現實主義の弊の凡てに對して、日蓮主義は之を匡正し指導する力あるを示し

て居る。

今日は殆んど思想の問題が紛糾して收集し難き有樣であるが、而しこれは世人が習慣と傳說とに安んぜずして、根本問題に就て深く其の內面に立ち入つて之を研究しやうとした結果であり、認識論の致す所である。例へば人生問題に就ては人間の本性を究めんとし、又宇宙の本体は如何との思想に進んで居るので、一概に壓迫を加ふるも何の功果も得らるべきでない。是非其深遠なる哲學宗敎によつてやはり根底から諭し導くことが必要と思ふ。隨つて敬虔なる宗敎の信仰の必要を切實に感じ來るのであります。

そこで三大思想の長所中、特に其の主なる点は、

(イ)皇道　は理想的國家の建設發展

(ロ)儒敎　は倫理的政治の實行

(ハ)佛敎　は深遠なる哲學を基礎とせる人生觀と宗敎の信仰

である。幸にその三大思想が日本に會湊し來りて、千數百年の間極めて克く調和し發達し來つて居るのであるから、この三大思想の統一觀を明かにし、その健全なる意義を保全せねばならぬ。これが即ち我國國民思想に中堅を與ふる事になると思ふ。精神の問題は到底一朝一夕には其の効果を擧げ難き

ものがあるから、北海道にも精神問題を研究して地方人の健全思想を涵養する會合が組織せられ、眞面目に思想の研究を試み、一面には國民思想の健全を計り、一面には軍人の精神鍛錬に資せらるゝ事が、地方人の爲め、軍人の爲め、國家の爲め、尤も崇高なる事業の一であると信じます。かゝる意義によりて會の組織を御勸め申上げたいのであります。試みにその綱領を作つて見ましたが、即ち前來述べ來つた三敎融合の理想に基き、　先帝陛下御震翰の

朕道ヲ聞キ學ヲ勉ムル豈一二年ニシテ止マランヤ、將ニ畢生ノ力ヲ竭サントス。

との聖旨により會名を畢生會とし、その綱領としては

第一、我國建國の事實及び理想を敬重し、且つ五個條の御誓文、敎育勅語、軍人勅諭、戊申詔書、並に　先帝陛下御製の聖旨を服膺し、其の實現を期す。

第二、周公孔子等古聖賢の道を推稱し、其の日本化せる本旨を尊重し、且つ之が發揚を期す。

第三、佛敎の健全なる敎義を尊信し、其の日本化せる本義を体認し、且つ之が發揮を期す。

第四、御國体並に儒敎佛敎の精華を實行し體現せる模範的偉人として日蓮上人を鑽仰す。

第五、智識を世界に求め、大に皇基を振起すべしとの聖旨を奉戴し、思索の撰を愼み、新思潮に對して取捨洗錬を誤らざることを期す。

露光量違いの為重複撮影

かゝる意義を以て學生會を組織せられては如何かと考へます。甚だ煩雜なる講演でありまして御聽取り難い点も多々ありし事と存じますが之を以て完結と致します。（國友日斌筆記）

國民思想の調整統一

露光量違いの為重複撮影

かゝる意義を以て畢生會を組織せられては如何かと考へます。甚だ煩雑なる講演でありますして御聴取り難い点も多々ありし事と存じますが之を以て完結と致します。（國友日斌筆記）

國民思想の調整統一

國民思想の統一觀

（豐橋衛戍將校の爲に）

序言

本日此の莊嚴なる會合に於て、一場の講演を致しまする光榮を得ましたことは、深く感謝致します。平素研究して居りまする事柄の中で、諸君が部下の精神教育につき、御參考にならうかと思はるゝことを申し述べたいと考へます。講題は國民思想の統一觀であります。

軍隊の精神鍛錬に就ては、御勅諭を初めとし、それ〴〵指定されてあり、局外の者が參りまして、他の事柄を申し上る必要はありませんが、然し兵卒の中には社會の新しき空氣にふれて入營し來る者もある。二年三年の間に古き兵卒は去つて、新思潮にふれし者が入り換る事故、社會の思想潮を研究して、之を善導せらるゝ必要があらうと信じます。殊に思想のことは單に命令によりて抑壓せらるべきものでない。

三軍の帥は奪ふべくも、匹夫の志は奪ふべからず。

との格言の如く。思想のことはその根底に下り、同情を以て之を啓發すべきであり、軍隊内務書綱領にも『精神教育は唯精神を以て教育するを得べし』と示されて、思想のことを薫陶するには思想を以てすべきは當然のことである。若しも上官の考が、新しき兵卒の考よりも狹隘であり淺薄であつたとして、之が衝突するとせば、由々敷大事を起しはすまいか。かゝることは軍隊の精神教育上に重大なる意義を有つことである。故に國民の思想の傾嚮、及び思想全体の統一觀を明かにする必要があると信ずる。

新聞等には思想の統一に反對の説をなすことがある。その主張は現代の文明は思想の自由を尊重し、個人の特色を發揮する事に於て、文明は燦爛たる光輝を放つのである。然るに此の思想の自由を拘束して、或る一の思想に統一せしめんとするは愚な考であると、これは統一と云ふことを誤解して居るのである。統一とは人各々の個性の發揮を抑壓するのでない、世道人心に害なきことは之を自由に放任するも、世道人心を毒し、建全なる發達を阻害する場合には、之を善導し啓發せねばならん。又それ自身は間違つて居なくとも、例へば小忠は大忠の賊たるが故に、一々切り離して個々の思想それ自身としては差支なくとも、本末輕重を考へざるが爲めに害毒を流すに至ることが多い、本末輕重を定むることが尤も大切なる問題である。例へば平重盛が忠孝両全成り難き場合の如き、即ちそれである。

又國家に對する思想と人道博愛の思想との關係、忠君愛國の精神と宇宙的信仰との關係の如き、之が衝突の形にて表れし時は如何にすべきか。道に忠なるよりして國家に背いて其の信仰に殉せんとし、國家を懷ふものは人道を敵とし宗教を咀ふに至る如きことあらば、即ち宗教と國家との衝突、人道と國家との衝突が起る。かくの如く何れの主張もそれ自身としては理由あるも、その間の輕重本末を考へず又融合統一を失すれば、多大の害毒を流すに至るは古今東西の事跡に徴して明かなる所であります。

現代の思想界は動搖を極めて居るようにも見へるが、之は見樣であります。統一を理想しないものは、甲の思想と乙の思想との單なる優劣を定めんとし、益々相互の思想が隔絶することゝなる。然るに統一的理想に於ては各々個性の發達を尊重すると共に、全体を通じての統一力を望むのである。このことは軍隊の例について考ふれば領解し易きことである。即ち中隊は中隊として、聯隊は聯隊として、歩兵は歩兵、砲兵騎兵は砲兵騎兵としての、各々の特性を發揮しつゝ、それが共同動作を取り、連絡行動をなすので、一國の目的の爲めには單に陸軍のみならず、陸海軍一致の行動に出づるのである。然し中隊大隊の特殊の訓練を尊重するは勿論、一兵卒の行動と雖も決して之を否定すのでない。一兵卒は一兵卒として、小隊は小隊、中隊は中隊としての各々の特性能力を發達せしむるのである。

即ち統一の理想は、個性を抑壓するものでない。然るに思想界に於ては一兵卒に等しき思想が聯隊の如き大思想を犯し、小隊の如き思想が旅團の如き大思想を犯して居る、爲に紛乱せる狀態を呈するのである。故に國民思想を調整して之に統一的歸着を與ふるは、極めて大切なことゝ信ずる。

我國思想史を大觀するに、建國の當初より傳つて居る所の理想が、國民精神の中軸をなし來つて居る。更に此の固有の精神を翼贊したるは、應神天皇の時支那から傳つた儒教である。即ち周公孔子の道がある。之が日本化して現代に及び、各方面に消化して、今尙ほ國民思想の樞要なる要素となつて居る。次には欽明天皇の時に印度から傳つた佛陀の教が大に我國の文明を助長して今日に至つて居る。此の三つの思想が國民思想の內容となつて今日に至つて居るのである。單に過去の思想史に於て然るのみならず、現在の日本の文明に於ては、建國當初の民族精神と、聖賢の道と、佛教の思想とが融合して、そこに我國民の中堅の思想が形成されて居るのである。故に此の三大思想の系統を明かにし、其の健全なる意義を統一的に認むることが尤も必要である。明治維新後に西洋の思想が傳つて來て、我國思想界に多大の影響を與へたが、其の西洋の思想に接觸する根本の國民思想は、やはり此の三教の統一的思想に外ならんのである。故に此の三教の統一觀に於て、國民の健全なる思想の存することを達觀し、其の關係及び統一点を明かにし、國民全般の思想をこゝに導くが、健全なる國民思想の發揮なりと信じます。如何に建國の事實及び理想を明かにしても、其の後に發達せし文明を敵とする、守屋の如きは、建國の理想に忠實であつても、日本文明を豐富にせし思想を呪ふ如きは固陋狹隘の見解にして、我國の發達を妨ぐるものである。佛教が好きだ、神道が好きだ、儒教が好きだと云ふやうな感情的の事ではいけぬ。其人の僅かな感情や想像に委ねて置くべき問題でない。

最初に考ふべき事は、多くの思想家は概して統一の理想を逸して居ることである。三大思想の中には何れも、自尊排他の風がある。神道家の方に於ては、神道の尊い事を知つて、儒教なり佛教を敵視するものが多い。又儒者には支那風に心醉して、我國建國の精神も又佛教の長所をも公平に認むる學者が少ない。儒者は狹隘の觀念を持つたものが多い。佛教の眞意を學んだ儒者は絕無と云つて差支ない。又佛教徒に付て考へても、佛教の教義に心醉して、我惟神の道をも、我建國の理想をも忘却し、又儒教の忠孝倫理だゝ省みないで、印度的思想、未來觀の思想、或は獨善的思想に囚はれ、或は惡平等の思想に囚はれて、現實を輕く見る等の弊がある。一言に云へば綱常倫理を破却し、現實を無視して單に未來に憧るゝ思想が、佛教徒中には大部分を占めて居つたのであります。

平田篤胤、本居宣長、加茂眞淵等は、御國体を發揮せられた人として、有名であるが、思想の內容に就ては、無暗に儒教と佛教とに對し惡口を云つて居る。御國体を發揮する上より見ては立派な人で

あるが、其の思想は確かに貧弱であり固陋であります。半面は美人であり半面は醜婦である。其の美の半面に心醉して居る人が多いが、思想界の人としては美醜の両面を研究して、醜は醜として明かにするが道の爲めにも國の爲めにも忠實なる行爲と信ずる。此の事は彼等の著述に依つて明白なることであります。例へば儒者は人の性に明德があり、本然の性は善なりと主張し人を賢くし之に智慧を付ける、そこで人が賢くなつた爲めに國家に面倒が起つて來る、人は虫ケラ同樣に馬鹿にしてをく可きであると云つて聖賢の敎を攻擊して居る。又佛敎に對しては、佛敎の信仰によりて死を恐れない、其の事が宜しくないと云つて佛敎を攻擊して居る。その攻擊の仕方が餘りに皮相であり、感情的である、今日の自然主義社會主義に等しきやうなことも云ふてある。半面に於ては偉大なる國學者であるが、半面は陋劣なる思想家である。其のことを分明に看取する必要があります。

又儒者の中にも儒敎の思想に囚はれて佛敎を敵とし御國体を輕く見たものが多い。例へば徂徠や、春台の如きは、支那の文明を尊敬する餘り、日本を夷狄として自屈の精神を持つて居る。德川の始めに聖堂を開いた羅山の如きも、日本の祖先は周の泰伯である、周は姓を姬氏と稱して居る、日本を東海の姬氏國と云ふは、日本の祖先が周の泰伯に出たからだと云つて居る。儒敎が我國の文明に貢獻したことは無論多大であるが、然し儒者の中には我國の尊嚴を傷けた者が少なからぬのであります。

又佛敎徒中にも徹底せぬ學者が澤山にある。奈良朝の時に僧行基によりて起つた東大寺の大佛の如きも、伊勢の大廟に對抗して作つたのである。行基菩薩が伊勢の大廟に參籠して一七日の祈願を凝らし、佛舍利一粒を奉つて託宣を受けたいと祈つた所が、丁度一七日の終りに託宣が下つて、『實相眞如の日輪は生死の長夜を照らす云々』と云ふ意味の託宣が現れたと稱して、これを天皇に奏上した。天皇は未だ御決心がつかず、今度は橘諸兄をして伊勢に參籠せしめられた。諸兄が歸つて奏答するには、幾ら祈願を籠めても何の御託宣もありませぬ、恐くは行基の云ふことは虛言でありましようと云つた。然るに聖武天皇は御自身にも深く御念頭にかけて居らせられたと見ゐて、或る夜夢を御覺になつた。伊勢の大御神の仰せらるゝには、佛と神とは本地が二つのものでない、根本に於ては一つのものであると云ふ御告があり、我は卽ち佛陀であると云ふ事を仰せられた。そこで遂々大佛を建設せらるゝことに運んだと云ふことでありますが、此の事實から推察して、奈良の大佛の建設には伊勢の大廟に對抗する考が含まれて居つた樣に考へられる。かゝる事を一々列擧しますれば、各宗派の爭ひのやうな事になり、引いて感情を害する恐れがある。兎に角佛敎徒には、御國体を傷つけ、人倫綱常を破却する樣な思想家もあつたのであります。

此の如く三敎共に各々自尊排他の思想があり、互に軋轢を重ねて來た。これ等の人々が惡い樣であ

るが一概にそうでもない。各々學ぶ所によつて佛敎に熱中して遂に淨土宗に信仰を定むるとか、儒敎に熱中して徂徠先生の樣になつて來るのは、寧ろ學問に忠實であつて其人が個人的に惡いのではない。又本居平田等の人が神道によりて儒佛二敎を排斥したのも人格に於て惡いのでない。而し其の學ぶ所に偏して他を排斥した点から考へ、及び思想史の全体から大觀し來ると、少なくとも今日の國民の摸範的思想とはならんのである。此の点は明白に意識せられんことを希望するのであります。

時には神佛二敎の融合を理想したものがある、傳敎大師の一實神道、弘法大師の兩部神道等が夫れであります。一方には又神道と儒敎と融合を企てたものがある、土佐の山崎暗齋先生の垂加神道の如きは夫れであります。或は又佛敎と儒敎との融合を圖つた者もあり、數へ來れば色々の思想があります。又三敎融合の精神を抱いて居つたものがある。建武の忠臣であつた北畠親房卿とか、一條兼良卿等であり、溯れば聖德太子も此の御考であつた。自分の考では建國の理想の中には、廣大なる包容性を有して居るので、三敎でも四敎でも、進んでは世界の思潮を悉く融合するのが、建國の理想と思ふ。從つて神儒佛三敎融合の大精神は、我國惟神の靈敎によつて、必然起り來るべき事である。菅原道眞卿の如きもやはり三敎融合の系統に屬す。忠君の人でもあり、御國体の事も常に敬重せられ、和魂漢才を主張し、菅家遺誡の中には支那の聖賢の學をやつてもそれに囚はれてはならぬ、我建國の精神を明にせねばならんと云ふ意味の事を說かれて居る。和魂漢才の語は單に儒敎に對するのみならず、佛敎にも同樣に應用し得べき語である、道眞卿は佛敎をも信じ佛敎に明るい人であります。御國体は御國体とし、儒敎の倫理綱常は倫理綱常とし、佛敎の信仰は信仰として、其の何れをも尊重し且つ之が融合を圖られたものである。又德川光圀卿も三敎融合の系統の人であります、光圀卿は凡ての点に於て我國の模範人物である、大日本史を編纂して、御國体を明かにし、尊王の精神を示して居らるゝ。後の水戸學派では光圀卿の學說を敬神崇儒排佛と稱して居るが、決して佛敎を排斥したものでない、光圀卿位佛敎を研究し之を尊重された人は多くあるまい。水戸學派は前期と後期とに分れて居る、前期は包容的である。斯の如く三敎の性質關係を公平に敎へて、その統一を圖る必要があろうと信じます。これより惟神の道の起源性質學派について詳しく述べようと思ふ。

一、惟神道の起源性質

惟神の道には色々の名がある、皇道、敷島の道、大和の道、惟神の道、神隨の道と云ひ、或は單に神道と稱して居る。色々名は異つて居りますが同じく我建國の理想であります。神道と申しても純粹宗敎的のものではありません、敎會を組織して宗敎的に組織して居るものは、之を俗神道と稱するの

であります。私は皇道と云ふのが穩當と考へます、之れは即ち『スメラギの道』、云ひ換ふれば『君道』であるから臣民に關係がない樣に聞へると云ふ學者もありますが、皇道を『皇國の道』と解すれば少しも差支はないと考へます。

皇道の起源は、古事記日本書紀等によれば、建國當時の事實及び理想をさして居るのである。皇道の淵源する所は敎育勅語に『國を肇むること宏遠に、德を樹つること深厚なり』と仰せられて居る如く、我國の建國の時より存して居る道であります。之は既に多くの人によつて研究されて、大体の事柄は明かになつて居りますから、今更詳しく申述ぶる必要はありません。

次に皇道の性質に就ては學者によつて種々に異つて居りますが、自分の考では三つ要義があると思ふ。

- 性質
  - 皇室の尊嚴
  - 包容の靈敎
- 敬神の本義

(イ)皇室の尊嚴　此の三つの性質は何れも大切でありますが、然し我國皇道の性質中其の中堅をなすものは、國家の建設發展であり、而してその中軸は皇室の尊嚴となつて現れて居るのである。從來世俗に考ふる宗敎的神道の意義は第一義ではないと思ふ。換言すれば理想の國家を建設し、理想の國家を發展するが皇道の眞髓であります。

理想の國家に就て考ふべきは國家至上主義との區別であります。國家至上主義とは理想なく叩りに國家を尊重して、國家の爲めには一概に何物をも犧牲にすべしと云ふのである。如何なる思想道德宗敎學問をも、之を尊重するを知らずして一概に國家の大切なるを主張す。何者よりも國家が大切で、此はマキアベリー氏の說である。日本の國家主義者には此の思想が多いやうである。至上主義は多くの反對ありて、今日で成立しない思想である。理由なく國家至上を主張すれば却つて反抗者現はれ、個人主義とか社會主義を誘發することにもなるのである。

理想の國家主義は大に之に異なり、國家の理想目的を明かにし、道德的の理想を取るのである。其の中心は正義の觀念であつて、之を擁護するために武力と經濟とを兩翼とし、堂々としてたし進んで行くのであります。兵力と富力とは正義を擁護する爲に存するので、國家の生命は正義の理想である。

正義とは日本建國の理想から云へば、上は天地の公道に合し、外は世界の人類を救濟せんとする絶大なる仁愛の精神であります。その事は神武天皇の建國の大詔に示されて居る。

天業ヲ恢弘シ天下ヲ光宅スルニ足ル蓋シ六合ノ中心カ

天業と云ふのは天の業ざである。而して天の德は之に反抗するものは悉く粉碎せらるゝので、嚴然犯すべからざる權威と、他面には萬物を覆ふて生々化育する溫き仁愛でありますが、其の天の業ざを地上に實現遊ざるゝので、絶大の權威と絶大の仁愛とを以て人類に安宅を與へ、世界最終の文明と幸福を完成せらるゝ所の理想であります。

かゝる皇謨は歷代の天皇の上に發現されつゝ來り、先帝陛下に至つて尤も克く御發揮遊ばされて居るのであります。陛下の御製に

我心及ばぬ國のはてまでも
よるひる神はまもりますらん

萬つ民すくはん道も近きより
おして遠きに行くよしもがな

と御詠じ遊ばされ、又戰爭の時に

國のためあだなすあだは碎くとも
いつくしむべき事なわすれそ

と仰せられ、日本軍隊は武勇を發揮すると共に、敵兵を救ひ、やさしい慈愛の情けを示したのでありますが、これ皆御聖德より感孚したのであります。我國は此の如く威力と仁愛とを併有せる正義の國家である。かゝる理想の國家には、諸種の宗敎上の理想、道德上の德行は悉く包容せられ、擁護せらるゝのであります。然るに理想を顧みざる國家至上主義に陷り、他面に國家を輕んずる宗敎と相爭ふ如きは、共に誤れるものと謂ふべきである。

而して此の理想を實現する中心に於て御皇室の尊嚴を認め、皇運を扶翼し奉るのである。云ひ換へれば皇運を扶翼する事によつて、正義人道を世界に擴大するのであります。御皇室の尊嚴は一方には絶大の威力となり、他方には仁愛の大御心となつて現るゝのであつて、此の大御心を奉戴するを以て日本軍隊には、武勇と慈愛の精神が行き渡つて居るのであります。

仁者必ず勇あり、勇者必ずしも仁ならず。

の格言の如く、大なる仁愛の精神の中には大なる武勇を包有するのであります。

皇運若し衰ふることあらば恰も天日の光りを失へる如くならん。天日が光りを失はば、一切の草木

人畜悉く枯死すべし。天地暗黒となり、百鬼横行せん。人類世界に於ける日本御皇室の御聖德は天日と同じ。皇運を扶翼し上るは天日の光を愛護するなり。これ我民族精神にして、我等國民の理想であり、又信念である。

(ロ)包容の靈敎　はあらゆる思想なり文明なりを包容し、之に中心を定め統一を與へ、之を洗鍊陶冶して行くので、この事が皇道の靈力である。決して他と對抗して之を排斥するのでない。このことは三種の神器によるも明白なる所、三種の神器中鏡の德は卽ちそれであつて、鏡は一切の物を映し、而して愛憎は偏頗なし。然れども鏡に向へば顏の汚れも見ゑて、鏡は指し出て、拭へとは云はないが、自ら恥ぢらつて之を拭ひ改めるに至る。公平無私であり、悠揚迫らず如何なる物をも包容し、如何なる物をも反省せしむる。此の如く日本文明は今日迄やり來つたのである。日本の理想は儒敎が來れば儒敎を包容し、佛敎が來れば佛敎を包容し、キリスト敎をも、西洋の文明をも、一切之を包容し、而して克く洗鍊陶冶し以て之を日本化せしむるのである。往いては東西の思想を調和統一し終る天職を有するのであります。

(ハ)敬神の本義　は神々の上に就ては色々議論もありますが、伊勢の大廟に奉安せられある天照大神に對しては、日本人たる以上必らず敬意を拂はねばならぬ。哲學でも宗敎でも政治運動でも之を輕んするならば、一歩も許すべきでない。敬神の觀念は日本道德の本源であつて、同時に宗敎的信仰性を帶ぶる所のものである。然し他の宗敎のやうに、神は個人の病氣や災難を救ふのでない、そう云ふ個人個人のことを御願するのは神の尊嚴を穢すことになる。又た死後の安心を敎ふると云ふ者でもない。我國の神は國家守護の神であつて、國家の全体に關する大事、國運の隆昌を守らせ給ふ護國の神であります。

以上の皇室の尊嚴と包容の靈敎と敬神の本義との連結せるが健國の事實及理想であり、若しも之を汚す者は粉碎さるゝのである。曾て佛敎中の或る者は不健全なる思想を有して居つたが、洗鍊陶冶せられてその非を改めた事もある。德川の初め彼のキリスタン宗が之にふれた爲に、一擊の下に粉碎された事もあり、又今日のキリスト敎もやはり我國に同化せざる已上は同一の運命に陷ると思ふ。如何なる主義思想であつても、我建國の事實及理想に反する者は斷乎として許すべきでない。

二、儒敎の性質及び其日本化

儒敎の傳來については時間なき故之を畧しますが、概して云ふと奈良朝時代の儒敎は其の思想が日本に影響するまでには至らなかつた。平安朝時代にも未だ獨立して居ない、僧侶の手に依つて兼學せ

られたのである。鎌倉時代にも同樣であり、室町時代にも五山の僧侶が之を傳へたのである。儒敎が獨立して日本の文明に影響を與ふるに至つたは德川時代の事であります、夫れ迄は佛敎に附屬して行はれたに過ぎない。

儒敎の性質は廣い事でありますが、必要なる問題について申述ぶれば、日本の文明が儒敎より利益を受けしことは頗る多いのである。第一文字であります、文字がなければ文明を進める事が出來ません。永き人類の經驗を後世に傳ふるのは文字の力である。文字に依つて長い間の歷史を記し、多くの人の經驗を集むることが出來るのであつて、そこに後の人が文字を通して長い間の事柄を知り、多くの人の經驗を一人が取り容る丶事が出來るのである。どんなゑらい人でも自分が生れてから死ぬ迄の經驗は僅かなものであります。故に日本文明が儒敎に負ふ處は此の事丈けでも非常に多大であつて、決して狹隘なる考を以て儒敎を排斥すべきでない。第二に日本人に概念を與へし効果である。樣々に考へたことを概念を造らねば纏りがつかぬ、其の概念を與ふるものは文字であり、而して儒敎の文字は皆意味が深長である。例へば『忠』と云ふ字も『孝』と云ふ字も餘程意味が深いのであつて、『忠』の一字の中にでも非常に廣い意味、豐富なる內容、尊い性質が結び付いて居るのであります。

儒敎の性質中尊いのは、至誠と云ふ事を敎へ、其の說き方養い方が餘程明かになつて居る。武士道の精神、軍人の魂となつたのは此の至誠であり、これに依つて我國の建國の大精神を扶翼して行つたのであります。更に至誠が發現して仁義の敎を立て萬世不磨の光を放つて居るのであります。仁とは人間の德の根本を包むものである、色々の意味があつて一言で盡す事は出來ませぬが、其の重なる意味は人類を悉く救濟する博愛の精神が仁であります。こう云ふ大きな仁と云ふ博愛の精神と同時に一方に義と云ふことを說明して居る。此の仁義が離る可らざる關係に依つて立つて居るのが儒敎の尊い處であります。義とは宜しきに適する樣に行ふて行くことでありますが、君に對しては忠、父に對して孝と云ふ行が此の仁義の中から出て來るのであります。そこで狹隘なる國家觀念を以て博愛の精神を敵とするは仁を忘るゝものであり、又習ひ損つた宗敎家の如く博愛の精神惡平等の思想に囚はれて國家を輕んずるものは義を忘れて居るのである。斯くの如く大抵の思想は仁義の關係を以て說明され得るのであります。更に進んで弘毅と云ふことを說きます。論語に『士不レ可ニ以不テ弘毅一。任重而道遠。仁以爲ニ己任一不ニ亦重一乎。死而後已不ニ亦遠一乎』と云つてありますが、此の死して後已むと云ふことが軍人精神の根本となつたのであります。其の他數へ擧ぐれば儒敎の尊い点は幾等もありますが略して置きます。

儒敎に附隨せるもの丶中に注意すべきは、支那の國風に伴ふ易姓革命の思想であります。此の一つ

は儒教殊に孟子の學風は日本の國体に合はぬのである。易姓革命の思想は天德の有無を以て君の資格を論ずるので、日本の御國体の萬世一系の思想と全く相反するのであります。然し又一方から研究すれば孔子は春秋を書いて之を畢生の主張として居りますが、其の春秋の精神は大義名分を明かにするのでありつて、司馬遷が史記を著して、史記列傳の劈頭に伯夷叔齊傳を置き、伯夷叔齊が武王の馬を叩いて臣を以て君を討つは不都合であると諫めたのを以て周公よりも比干よりも箕子よりも優れたものとして居る。この思想は日本文明と調和して發達したので、儒教の日本化について主要の点であります。

かゝる意味の儒教が如何にして日本化して來たかと云ふと、義の觀念が非常に發達して來て、仁義の精神を忠孝に移して明かにして來り、更に御皇室に對する忠を以て一切の道德の根本としたのであります。

次に忠孝の道德に就て忠孝一本の思想が生じて來たのである。儒教では孝經を讀んで見ても孝道が忠義より大切になつて居るが、日本では忠は祖先の志を行ふので、その中に孝は包まれて居ることになつて居ります。正成公が其の子正行に對して『汝勤王の志を存して不忠の行をなすこと勿れ、是れ汝が第一の孝行ならん』と遺訓されたが、これが我國の父の志である。君に對する忠は家庭に於ても第一の德であつて、これが我國家族制度の生命である。もし親が忠義の觀念が欠けて居れば、親たるの資格を失ふて居るものであります。

も一つ日本化して參りましたのは實際的活動的に儒教が働いて來たことであります。弘毅の精神が發揮されて、中江藤樹先生、熊澤蕃山先生等によりて、王陽明學派の實行を重んずる思想となり、又山鹿素行先生の武教派が起り、武士道を助けて實際的に變化して來たのである。儒者は軍旅のことを云はざる風がある、唯道德のみにて一切を行はんとしたのであります。所が日本では孔孟の學の外に孫吳の武經を合せ學んだので、それが素行先生等によりて發揮されて武士道の精神となり、以て今日に至つて居るのである。やはり日本の御國体の靈力によりて日本化するに至つたのでありますが、一度日本化すれば儒教の中には弘毅の精神、其の他の美点があり、取り以て大和魂の發達を助くる事となつたのであります。

又倫理的政治の實行を理想して居るのである。支那では孔孟の德教は議論に傾いて實行に欠けて居るが、日本では之を實際の政治に行ひ、教育勅語、軍人勅諭の中にも儒教の精神が消化して居るのであります。

此の如く儒教の日本化するに至つたのは、皇道の妙用に基くのであり、御國体の靈力の然らしむる

所であります。

三、佛敎の性質及び其日本化

其の渡來及宗派等は之を畧して置きます。本來の性質も之を盡すは困難である。然し大体を御話しすれば、佛敎は人々に菩薩行を敎ふるものであります。儒敎で君子と云ひ、我國で武士（もの）と云ひ、佛敎で菩薩と云ふは殆んど同じ意義であります。佛敎は菩薩敎であり、儒敎は君子道であり、我日本の道は武士道である。菩薩とは大道心と譯するのであつて、分り易く云へば大精神家である、上には無限の向上を辿る向上心あり、下には社會救濟の働をなすものである、上求菩提、下化衆生を畧して菩薩と云ふのであります。この理想は君子と云ふことよりも深い意味がある。人が久遠（くをん）の生命に生きて無限の向上を辿ると云ふやうな所から見ると、菩薩行の方が勝れて居るのである。菩薩行は實に立派な理想であり、且つ廣い意義を有して居るのである。衆生濟度の如き大きな慈悲の精神を含んで居り、單に慈悲のみでなく病行と云ふことがある、『制レ病（スヰニナテスナ）以レ病』と云ふので、戰爭の如きは病行であり、又嬰兒行と云ふことがある、細民をも罪人をも救濟せんとの理想を有して居る。佛敎はこの菩薩的敎化の爲に起つたのであります。

次に眞理の側に於ては佛敎は整ふて居ります。天地宇宙を說明する場合に、不變眞如と隨緣眞如を說く。

眞如 ─ 不變
　　 ─ 隨緣

平等の側には一切万有の本原は變らない所の實際と云ふものがあるが、同時に活動し變化する差別の側を見ると萬物か別立して居る。時と處と位置とに適應して變化して行く內に、永久不滅の實在を認むるのであります。近代文明では變化を以て眞理と考へて居る。爲に古來の美風を破り、道德を疑ひ、懷疑思想となつて思想界が混亂するに至つたのでありますが、道德の本質としては道は永久變らざるものでなければならないのであります。

尙ほ佛敎の道德觀には四恩の說がある。此の思想は現代の惡思潮を救ふ上に非常に尊きものであると信じます。人は必ず家庭に屬し、又同時に社會と國家と宇宙とに屬するのである、人一人は自己對家庭、對社會、對國家、對宇宙の關係を同時に有して居る。

家庭……父母恩

社會……衆生恩
國家……國王恩
宇宙……三寶恩（天地の恩）

の四恩を有し、家の子としては父母に對する孝道、社會の一員としては人類相互の情けの精神、國家の國民としては君國に對する忠誠の觀念、宇宙の生物としては天地の公道に對し又建國の神明であらせらるゝ皇祖皇宗の靈に對して敬虔の誠を捧ぐべきであります。而して之を實行するに當りては緩急本末輕重の存する次第でありますが、佛敎では『四恩中皇恩最重』との決論を與へて居るのであります。尙ほこの四恩の中心を論じて皇恩を尤も重んずるに至つた思想は、日本に於て尤も明かにせられたのである。日蓮上人の立正安國論に、

國亡び家滅せば佛誰か崇むべき、法誰か信ずべき。先づ國家を祈りて須らく佛法を樹つべし。

と云つてありますが、此の点を特に御研究を希望する次第であります。日本道德に於ては忠が非常に大きなものとなつて居り、父母に對する孝も、世界人類に對する博愛も、皆忠によりて一切の道德が實現せらるゝのである。忠は他の多くの道德と對立的に存するのでなく、一切の道德を包容せるものである。此の思想に對して四恩調節の思想は尤も有力な考となるのである。

その他の性質は之を畧し日本化に就て述べんに、佛敎徒の中には惡平等の思想、厭世主義、獨善主義等世道人心を害せるものもありたれば儒敎より痛擊せられ、明治維新には廢佛論となつたのでありますが、何故に人倫を廢するに至りしかと云へば、厭世の思想、獨善主義、惡平等の思想は佛敎を誤解せる病見であります。此の点を儒者が痛擊したのは全然同感であります。今日尙ほかゝる思想にして殘存せりとせば斷然改善せしむべきであります。

然るにこの佛敎が日本化したのは、

（イ）尊王主義。元來佛敎には國家主義あり、日本に於てこの点が明かになつて參り、殊に御皇室を中心とせる尊王主義を扶翼し來つたのである。

（ロ）現實化。殊に日蓮上人、或は『極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず』と云つて奮鬪生活を訓へ、或は『我日本の柱とならん』と現實の日本に重きを置いて居るのであります。

（ハ）活動主義。日蓮上人によりて活動主義奮鬪主義を明かにした。日蓮上人は艱苦欠乏の中に愉快に生きて居られたので、佐渡に於ける事蹟の如きは、軍人方のよき參考なりと信ず。佐渡の雪中に在りて『日蓮の如く悅び身に餘るものはよもあらじ』とか、『過ぐる時刻も程あらず』とかと云つて居らるゝ。又この活動主義から强き勇氣を生ずるに至つて居る。

『月の滿つるが如く、潮のさすが如く、退轉なく申しつより候。』

實に百折不撓の精神であります。月に叢雲の掩ふことがあつても、月は頓着なく毎夜光を增して、遂に滿月に達する。潮の滿つるのはよせては碎け、よせては碎けして居るが、例へ幾度はね返されても少しも屈せずに遂に滿ちてしまう。此の如く日蓮は退轉なく申しつより候と云つて居るので、實に日本的大精神であります。

結論

此の如く大觀し來れば、三大思想何れも敬重すべきであり、皇道を中心として儒佛二敎相扶けて日本文明を豐富に發達せしめ來つたのである。更に三敎の特色に於て各一点を擧ぐれば、

皇道……皇室の尊嚴
儒敎……德敎の感化
佛敎……哲理と道義の調節

此の三点は特に益々尊重し發揮すべきである。若し佛敎を排斥し去らば、東洋哲學と生活の活力を除くことゝなりて、日本の文明は淺薄とか貧弱と云はれても辨明し難く、この点は佛敎の力に俟たねばならん。建國の理想及び儒敎の倫理は世界に卓越せるものであるが、之に佛敎の深理を加ふれば比類なき文明となるのであり、この思想が七千萬國民に奉持せられ、國民思想の中軸となつて進むならば、決して世界の文明に對して遜色なきものと信じます。俄にこの域に達し得ないまでも、心ある者の理想としては三敎の統一觀を明かにし、現代の惡思想は一日も早く改善せねばならぬ。

かゝる方針に於て部下の思想を吟味せらるゝならば、三大思想の内の其の何れかに局して居るものは、すぐ發見し得るのである。今回はこれにて結了と致します。

國家觀念に就て

國家觀念に就て

（歩兵第二十五聯隊、歩兵第十八聯隊、歩兵第六十聯隊、騎兵第七聯隊、體育教育協會等に於て）

序言

近來種々の思潮が起つて、國家觀念に反對するものが段々あるやうでありますが、その動機原因等を考察しますれば國家觀念の方にも罪があらうと思はれます。それは一部の人々の間に稱道せられて居る國家觀念を考察しますると、その內容が極めて貧弱であり、偏狹であつて、彼等はつまり自分等の壟斷せる利益なり權力を、國家觀念なる美名の下に隱れて之を押し遂げ樣として居るので、之に反抗する者が一方に生じて、彼等偏狹なる國家主義の極端に報ふるに極端なる主義主張を樹つるに至つたのである。故に最近起り來つた種々の思潮に對する上から見ても、國家觀念の內容意義を明かにする必要を切實に感ずるのであります。

諸種の國家觀念

國家に關する諸種の見解を細分すれば十種程あります。

(イ)個人本位說。個人の權利を保護し、個人の幸福を增進する爲に、國家は存在せりと主張するのであつて、若し國家が個人の利益權利と衝突する場合には、國家を認めないのである。斯の如き國家觀念は普通には個人主義と申して居りますが、矢張り一種の國家に對する見方である。歐米の民約說を基礎とした思想は、概ね斯かる意義に傾くのであつて、殊に佛蘭西の國家の如きは其適例であります。

(ロ)天命順行說。國家の存在せるは神の思召を行ふ機關として存してゐるのである。神の精神を地上に實現し、天國を地上に來らしむる爲に國家は出來てゐるのであり、國家の第一の仕事は、神の難有意味を人民に取次でやり、信仰道德等に就ては國家は全力を擧て之を保護せよといふのであります。之は西洋の中世紀に於ける、基督敎の敎會政治の思想である。

又支那に起つた天命順行說があります。國王は天命を享け得て、天の精神に適ふ德を行ふ場合にのみ、政を行ふことが出來る。若し天德を行はざれば一匹夫であるから、之を滅ぼしても宜しいといふのである。其爲に支那は禪讓放伐の思想を生じて、今日迄に三十幾回姓を易へて居るのであります。

(ハ)法治說。國家は人民の間に、協定せられたる法律を實行する機關として存するのである。法律を行ふ爲に起つて居るのであつて、それ以外に手を出したら越權の所爲であると主張するのであります。

(ニ)人民保護說。國家は人民の財產とか生命とか權利を保護する爲に存して居るのであつて、少しでもそれ以外に手を出せば、干涉なり壓制なりといふのであります。

(ホ)公共保護說。國家は一般國民の幸福を增進する爲に存し、而して其幸福は單に生活上ばかりでなく、音樂美術繪畫公園等を設備し、人民の享樂を手傳ふべしと云ふのである。

(ヘ)人民制御說。國家は惡い人間丈を制御して行けば宜しい、善良なる人民に對しては、別に干涉する必要無しと考へて居るのである。

(ト)對外關係說。國內のことには國家は必要はない、只外國との交涉事件に、人民を代表して働けば宜しいといふ風に、だん〳〵國家の目的を小さく見て行く思想であります。

(チ)國家實利說。國家を中心として、國家の實利實益を計る爲に存すると云ふ。個人の利益よりは全體の利益を保護するを以て目的とする。凡ての法律は、國體を强くし國家を進めて行く手段に設けられたるものであつて國家を忘れて人民の爲に、法律を作るといふことはないといふ思想であります。

(リ)國家至上說。國家は人間の智識が最も進步したる上に生じたる非常に高尙なる產物である、故に國家を尊敬せねばならぬ。そして本人の爲に何れ程大切なものであつても、國家の前には犧牲にしてかまはない。更に進んでいへば如何に立派な宗敎でも道德でも將た文藝でも、國家の前には凡て犧牲

にして差支ないと主張するのであります。

又理想的國家說。國家の組織体の上に尊き意義を認むるのであつて、其主張には色々美點がありますが、概していふと國家の目的は正義道德の觀念にありとして居るのである。古くプラトーンが此說を主張して居る。

國家は何處迄も其目的を道德に置かねばならぬ、啻に國家の行動が道德を理想するばかりでなく、國家の仕事は先づ以て國民を道德的に仕上ることに力を注がねばならぬ。然して斯かる理想の國家が働らく時に、個人の道德的生活は完成せらるゝのである。而して國家の道德的理想は、個人が道德的に敎育せらるゝと同樣であり、個人の道德に於ては、理性、勇氣、節制、の三を具備するを必要とするならば、國家の道德も亦此三方面が完成せらねばならぬ。

と、斯の如き理性勇氣節制の三が整ふて居るのを正義と稱し、人は此正義を理想として堂々と進まねばならぬが、然し人が個人として斯かる考を以て進んでも到底個人としては大事を成し遂ぐることは出來ない、大事を成すには必らず何等かの團結を要するのである。譬へば實業を興すにしても、大事業を爲すには會社といふ團結を必要とし、孔子の如きも此思想を實現する爲に門弟を養成して居り、又宗敎に於ても敎會とか寺院の如き團体に重きを置いて居ります。同樣に道德にも是非團結の力を必要とするのでありますが、其の團結の最も完成せるものが國家であつて、人が眞の道德を實現せんとするには、そこに國家の力を要するのである。云ひ換れば人の最も淸く最も麗はしく最も完全な理想を結束して、之を實現せんとするものが國家である、國家とは最高善を實現せんとする整備せる組織体であります。宗敎の結合も尊いものであるが、之には其の理想を實行する力が備はつて居ない。マホメットの如く武力を以て之を行はんとせしものもあるはしますが、之は極めて稀なる特殊の例外であります。然るに國家の組織体には之を完成する實行力を有して居る、即ち武力軍隊を有つて居ります。軍隊とは國家の理想を完成し、正義を擁護し之を實現する爲に武裝せるものであります。故に何人も斯かる國家に反對する能はざることゝなるのである。個人本位主義を取るものであつても、眞に個人の幸福を增進する爲には國家の力と相俟たねばならぬ。又他面に人道博愛の精神を主張して、國家を狹しとする宗敎家もありますが、國家の結合力を以てせざれば、眞に人道博愛の精神を完成することは出來ないのである。其の証據には古來國家の力に依らずして、人類の文明幸福を增進したものは曾て無いのであります。加ふるに理想的國家は決して人類の幸福を省みないものではない、國家の爲に時としては犧牲を要求しまするが、それは人類の幸福を增進し世界を文明に導く爲であつて、つまり中心を國家に於て個人の幸福を進め、世界の文明に稗益せんとするのであります。

御國體に關する諸種の見解

現代學者の主張せる御國體觀に凡そ十二三種あります。

(イ)強力主權說。加藤弘之博士の稱へた說であります。強力即ち主權なりと主張し、我皇室は強力の中心であつて、何物が來ても叩き付ける力を有つて居らせらるゝからで、萬民が之に服するのは、服さねば叩き付らるゝからである。我國の尊嚴なるは强權が皇室に充實せる爲である。さういふ風に國家を作つた方が國家に都合がよい。處が我國は都合よく强權が皇室に集まつて居るといふのであります。

(ロ)主權機關說。西洋の民約思想の影響を受け、國家とは人民が集つて契約を結び、法律を制定し其法律實行の機關として其處に國家が生じ其の中心として一國の主權が存するのである。即ち主權とは人民の公僕なりといふのであります。

(ハ)文明程度說。今の文明に於ては國家的組織により進んで行くより外、凡ての目的を達することは出來ない。個人の幸福も世界の文明も道德の理想も、凡てのものが此國家組織体の上に完成せらるゝと主張するのであつて我國に於ては、穗積博士が熱心に主張した說であります。

(ニ)感激說。芳賀博士の說で、國家は別に何の理屈もなく自然的に成り立つたもので、唯感激的の情に依つて出來たものであると主張するのである。之は一方に國家の主權は人民にある、主權とは公僕であるといふ樣なことを遠慮會釋もなく口にして居るから、其の反動として感激說は起つたのであつて、我國は左樣の理屈一偏で成立つたものでない、唯感激したる情によつて成立つたものであり、御皇室の御靈威に對して、只何ともいへない敬慕の精神が起つて、それが忠となつて顯はれ、そこに純粹の犧牲の精神が顯はれたものである。決して自己を主として理屈を考へた樣な處から我國家は出來たものでない、法律學者が我國の過去の歷史を取離し御皇室を取り離して、國家を說明せんとするは非常に誤つた說であります。

(ホ)皇統一系說。之は普通稱へらるゝ處の說で、皇統一系が御國體其のものであると主張するのであります。之は無論間違つて居ることではありませんが、此の皇統一系と併せて天來の靈德を考へねば說明が完全しないと思ふ。

(ヘ)靈德理想說。是は姉崎博士の主張せらるゝ說でありまして、皇統一系の意味合と、宇宙的靈德とは併せてこゝに考へなければならぬといふので、卽ち此の皇統一系といふことの上に、宇宙大の靈德が一致して行くといふことを、體と用との二字を以て說明して居るので、建國の當時自然に現れた事

前の理、即ち靈妙なる意味合のものと、久遠の法と、宇宙の靈德とが體となつて、皇統一系、億兆一心の用が顯はれて居るといふのでありますが、此の體用不二の關係を十分に會得する事は、最も大切なる事であると思ひます。

(ト)靈氣不可侵說。是は小笠原子爵の說で、我國には一種の神聖侵すべからざる靈氣があるが、それは宇宙の靈氣であつて、縮めては世界道義の中心となり道德の生命となつて人類間に顯はれて來る。又之を擴げたならば天地宇宙に磅礴して行く所の天地正大の氣である。其の力が我國體に顯はれて來て居るものである。故に我國の御皇室の力は相對的の力を超越して居るので、何者と雖も侵すことが出來ない無限の力が存するので、それが我國の御國體となつて顯はれて居るのであります。

(チ)俊德幽玄說。宇宙の靈力が我皇室に合して、其の德が永久に顯はれ居るといふのであります。然して此の德が御稜威の力となつて靈動するのであり、御稜威の靈動は一方には絕大の武力となり、一方には絕大の仁愛となつて現はれるのである。御稜威の靈動の感孚する所に我國の國民は億兆一心の忠誠を以て御皇室を奉戴し、特殊の國民性が出來上るのである。我國民性を作り上げて居る主なる力は國民個々の良心にもあらず、又我國の天然なり地理なり氣候なり境遇なり歷史なりにあらずして、確かに御稜威の靈動が民心に感孚することを主とせねばならぬといふのであります。之は佐藤少將が國防史論に於て主張せられた所である。

(リ)君臣感合說。是は井上圓了博士の主張せられて居る所である。我國には天然界の氣候境遇等に於ても秀麗なる所があり、又人間界の方に於ては萬世一系の御皇統を戴いて居り、又心界に於ては一種の靈氣が凝つて大和魂となつて居り、此の全体が集つて君臣が感合し、天皇の大御心と億兆一心の忠愛の心が感合して、我國は成り立つて居るといふのであります。

予の御國體觀

以上十種程の御國體觀を列擧しましたが、何れも我國の御國體を說明せるものであり、各尊いものがありますが、而し完全なる御國體觀は之等凡ての說の長所を調整統一せるものであり、一言にしていへば我國の御國體は理想的國家の建設發展にありと信ずるのであります。立派な理想目的を國家の上に完成せるものであつて、此理想は建國の當初より確立し堂々として進んで來て居るのであります。我國の最初は神勅により建てられて居る。天照大神が天孫瓊瓊杵尊を豐葦原中ツ國に天降して、我國御皇統の淵源を御定めになる時に、

豐葦原千五百秋ノ瑞穗國ハ、是レ吾ガ子孫ノ王タルベキ地ナリ、宜シク爾皇孫就テ治スベシ。行

矣。實祚ノ隆當ニ天壤ト窮マリ無ルベシ。

即ち天壤無窮といふことがあります。之は天津日繼の御皇統の千代八千代に彌榮へますといふことであります、千年萬年續いて彌榮へますといふことには、只永く續いて行くといふだけではない。此の時間の繼續するといふことには、其の永い時間中に有ゆる立派な理想を實現するといふことを含んで居るのであります。中庸に

悠久は物を成す所以なり。

長いといふことは立派な仕事を仕上るといふことである。天壤無窮といふこと、長く續いて彌榮へます所以は、其の中に日本の天職を成し遂ぐるといふ意味を含んで居るのであります。

そこで其の天職とは何ぞといふと、神武天皇の大詔に、

天業ヲ恢弘テ、天下ニ光宅ルニ足ルベシ、蓋シ六合ノ中心ナラン。

天壤無窮の理想とは、即ち天業を恢弘することである。天地の公道に基ける正義の堂々たる仕事であります。天業とは論語に

天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。

之は孔子の門人子貢が、先生は常に天道天道といふことを口にせられるが、天道とは實際あるものか、何うも信ずることが出來ないと孔子に質問したのであります。所が孔子は非常に立腹しまして、天は大なる聲で物をいふて居るではないか、即ち春夏秋冬の四時が行り、萬物が生々化育して居るのは、天が大聲で物を言ふて居るのである。春夏秋冬が其の季節を違へず年々繰返し行つて來るのは、千古萬古變らざる秩序が嚴然として其の中に輝いて居るのである。古今を貫ける不變の秩序が健存せることを敎へて居るのである。近代の思想界は進化論の影響を受けて、道德も亦時代により地位境遇に依つて變化するものなりとし、過程の中に眞理を認むべしと主張して居りますが、是は歐米の學風に影響せられた現代の大弊害であります。二年生存すれば春夏秋冬が再び行つて來ることが分る。二年が長ければ僅かに二日生きて居れば晝夜の運行は繰返して居るのである。そこに春夏秋冬の變化の中にも晝夜運行の中にも、永遠變らざる眞理の存せることを認め得るのであつて、要するに四時行るとは秩序といふことであります。一切のものには階級秩序といふことがあり、之が軍隊に於ては服從の精神の由つて現るゝ根本である。又秩序を破壞せんとするものは直ちに粉碎するといふ絕大の權威となつて現れて來るのであります。萬物生るとは、一切の草木人畜等は天の溫き光と熱とによつて育てられて行くのであり、天の精神には萬物を生々化育するといふ大なる情けの德が具はつて居る。即ち萬物生るとは絕大の仁愛であります。そこで天業とは權威と慈愛である。絕大の仁愛と威力である。實

に壯快なる理想であつて、或は國威國光といふも同樣であります。我國建國の理想には斯の如き悠大なる思想が整頓して居るのでありまして、權威と仁愛とを兩翼として、天の業を押し立てゝ之を地上に擴大し、實現して行くのであります。然して天下とは世界中の人民であり、光宅とは光は仁愛の意味である。人の最も苦痛に感ずるは暗黑でありますが、其の苦しめる人類に光を與へて之を救濟するのである。又宅とは路するに對する言葉であつて、路傍に彷徨せるものに安宅を與ふることである。世界中の人類が暗黑の中に呻吟し路傍に彷徨せるを憐んで、御皇室の御稜威の力で之を光宅し救濟することであります。併し物には順序があり、一遍に世界中を救濟することは出來ないから、其の六合の中心として日本の國を建つるのである。故に又我國を豐葦原の中津國と稱し、或は日本といふも同じ理想である。日は東より出でて地上の全体を照す如く、國威國光を八紘に輝かし、行いては世界中を總攬するといふのであります。要するに天の業を地上に押し廣げ、行いては世界の文明幸福を完成せんが爲に、絶大の威力と絶大の仁愛とを左右の兩翼として、堂々と押立てられて居るのが我建國の理想及び事實であります。

又續いて御發しになつた　神武天皇の大詔に

上ハ乾靈(アマツカミ)ノ國ヲ授ケ玉フ德ニ答ヘ、下ハ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ

と仰せられて居ります。皇祖皇宗の遺訓の首たるものは即ち之でありますが、其の思召は皇孫が正しきを養ふの心を押し廣めて行かるゝことである。正義道德を中心として押し進んで行くことであります。正とは其の中に一切の道德を包含せる意義である。無論腐儒のいふ如く武力を忘れし道德ではない、武力軍隊を以て正義を實現する實行力を具へて居るのであります。孔子は『軍旅のこと我れ之を知らず』といつて、片文的政治を理想するに過ぎなかつた。故に今日は其の理想は實現せられずして亡びたのである。所が日本の理想は正義を中心として武力を以て擁護するのであります。或は神武天皇と謚せし如き單なる武力に非ずして、正義を理想せる武力である。故に神武といふのであります。

又　天照大神の神勅を拜しまするとし、神孫が此の國に下りまして統治し給ふに『治ス』(シロシメ)といふ言葉が用ひてあります。『治ス』とは壓制的に統治するとか、個人を抑壓するといふのではない、そこに人民を愛撫し給ふ意義を含んで居る。又御歷代の御聖勅を拜しますと、或は日本人は皆神の賜であるとか、民草であるとか、民は國の寶であるとかいつてあります。仁德天皇の御聖德の如きも民の富を以て陛下の富と遊ばされたのであつて、そこに暖き大御心が現れて居ることは申すまでもありません。

又　明治天皇の御製を拜しましても、斯かる仁愛の大御心を御讀になつた涙のこぼるゝ樣な御製が澤山あるのであります。　陛下は如何なる炎暑にも軍服を御脱しにならず、決して暑いと仰せにならな

かつたさうである。それは農夫が夏の炎天に羨ねかへる樣な田の中に立つて田草を取つて居るのを御覽になりまして、民の苦しみを御察しになつて生涯暑いと仰せにならなかつたといふことであります。

臺灣が我領土となつた時に總督乃木將軍に賜はつた御詔勅に、

臺灣の人民は朕が赤子として措かざる所

と仰せられて居る。斯の如く一方には天津日嗣の尊嚴であらせられると同時に、他面には人民を愛撫せらるゝ大御心があるのであつて、かゝる仁愛の大御心に感孚する所に、國民は億兆一心の忠愛の觀念を以て身命を捧げて御皇室を奉戴し奉るのである。君臣の關係が恰も一心同體といふ如き狀態で現れて居るのであります。

又人道博愛の精神も天下を光宅するといふ理想の中に充分含まれて居る。古來日本は國威國光を傷け、獨立を危くせんとするものあれば止む無く干戈を動かすも、飽迄正義の爲の戰であつて、決して私慾の爲には一兵をも動かして居ない。先帝陛下の御製に

我國に仇なす仇は碎くとも
いつくしむべきことな忘れそ

仇なすものは之を粉碎するも、直ちにそこにやさしい仁愛の精神が現れて居るのであります。又

萬つ民救はん道も近きより
おして遠きに行くよしもがな

世界の人類を救ひ之に幸福を與へんが爲に、先づ國民を結合し國運の發展を計らるゝのである。

我心およばぬ國のはてまでも
よるひる神は守りますらん

世界の端までは心の及ばぬことはあつても、我祖宗の神明は晝夜に之を御護りになるといふ御聖旨であります。之は神代より傳へ來れる我國の天職であります。斯かる大御心が國民に感孚する故に古來日本人は殘忍なことをしない、日本海海戰の時にあの激戰の中に多數の沈溺者を救ふたといふのは、矢張り此の精神の現はれであります。孔子は

仁者必らず勇あり、勇者必しも仁ならず。

といつて居りますが、正義仁愛の觀念があつて初めて眞の勇氣がそこに現はれて來るのである。日本軍人の强いのはそこに宗教家も及ばぬ優しき涙を有つて居らるゝからであります。

要之我國の御國體は個人を顧みず、人道博愛を敵とするが如き狹隘なものでない、國家を中心として個人の安寧幸福をも保障し、世界の文明をも完成せんと理想せるのである。然して其の國家的組織

の中心に、萬世一系の御皇統が嚴然として存して居らるゝのであります。此の御皇室は即ち我國の生命であらせらるゝので、此の御皇室を擁護し奉戴することが、國家の中心生命を愛護するのである。人にして生命なくば四肢五体あるも詮なきが如く、我日本國は御皇室の御盛運を扶翼することに於て、國家擁護の第一義が存して居るのである。恰も天日を戴かざれば草木人畜凡て枯死するが如く、天日を仰いで初めて生々發育するのである。我日本國の國運の根本活力は忠の一字にありと心得べきであります。

徇は進んで申しますれば、御皇室の尊嚴なる所以は天の御德と通ふて居るので、所謂天祐を保全して世界の平和文明を御進め遊ばすのであります。そこで我國民道德に於ける忠の觀念は一切道德の根本であり、又忠の中に一切の他の道德を包容して居るのであります。例へば忠なる觀念の中には同胞相互に親愛する心をも含んで居るので、大君を思ふのみならず、我同胞が外國人の爲めに蹂躙せられてはならぬといふことをも意味して居る。又世界に向つて人道博愛の精神を現して行くことも矢張此の忠の觀念の内に含まれて居り、進んでは天地の公道を奉戴するような大精神も包容して居るのであります。一の忠でありますが其の内に包容して居る内容は極めて豊なのであります。故に若しも此の國家の結合を破り、組織を破壞せられる樣なことがあれば、一切の宗教も道德も文藝も亡びてしまうので、此の理想的國家を擁護する所以は、やがて東洋の思想宗教道德等特にその日本化せる精華を愛護する事ともなるのである。然るにかゝる深き意義を考へずに、或は國家は人道博愛の精神より狹いとか、或は安りに個人の權利自由を偏重する如きは、つまり其の思想が未だ充分に圓熟せざるの致す所と申して差支無らうと信じます。

御國體の附屬的特色

斯の如く特殊の御國體が中心となり根幹となつて、そこに色々の美點を發揮して、枝となり葉となり花を開き實を結び鬱然として繁茂して居るのであります。以下之に就て申述たいと思ふ。

(一)國體と政體との分離　吉田松蔭先生が『世態變遷すとも大義存す』と云はれて居りますが、我國の歷史を繙くと或は藤原氏が攝政政治を行ひ、或は頼朝が鎌倉に覇府を開く等凡そ七百年間の長き封建時代に於ても、又明治維新の王政復古、二十三年已來の憲法發布等政治上のことは如何樣に變化しても、御國體に於ける萬世一系の皇統を戴くことは變らないのであります。

(二)忠君愛國の一致　大君を思ふ心と國家を愛する精神とが一になつて現れ來るのである。日本人には忠君といふことゝ愛國といふことゝは殆ど同じ意義に考へられて居るのである。然るに他の國家に

於ては時としては國家を愛する爲に君主を亡ぼすことがある。支那の如きも中華民國を如何せんといふ上から革命戰爭が起つたのである。然るに日本に於ては御皇室は國家の生命であらせらるゝので、生命を愛する爲に身體を健康にする如く、御皇室を擁護し奉る爲に國家を愛するのであります。單に此のことを理屈でいふのでない、一度君の爲といふ言葉を聞けば、そこに國民億兆の眞心に無限の熱情を現はすのであります。

(三)皇室が國民の結合に先立つ　他の國家に於ては人民が團結して相互の相談に依て國家の成立せしものもあり、或は人民を征服して國家の建てられしものもありますが、我國に於ては御皇室は神代より神勅によつて嚴存せられ、御皇室の思召によつて我國は開かれたものであり、人民は其の御聖德を慕ふて其の下に集まり來つて、そこに日本國が作られて居るのであります。譬へば佛敎に於て多くの寺院があり、僧侶が集まつて假に釋迦を廢すると決議した所で、佛敎は釋迦の敎で出來た以上何うすることも出來ない如く、日本に於ては如何なる宗敎でも哲學でも道德でも、若し御皇室に反對すれば反逆思想といふことになるのであります。

(四)君臣の分定まる　日本に於ては古來民を以て君を侵すことを許さないのである。承平の將門にしても御皇室を窺ひ奉るといふ野心を有つて居ない。足利尊氏の如きも北朝を奉戴し、又德川氏も輪王寺宮を江戸に迎へて居る。彼等は大義名分に違反して居るが、然し北朝を奉戴し宮家を迎へ奉る所に深き意義が存するのであります。

(五)祖先崇拜の美風　支那にも西洋にも見ざる所であります。昔の武士は家名を穢さないといふことを心懸け、祖先の志を嗣ぐといふことを重んずるのである。故に御皇室に於ても皇祖皇宗の遺訓に基きといふことになつて居り、國民に於ても先祖の精神を受けついで益々之を發揮するといふことを心懸るのであります。殊に祖先の生命といふことを强く信ずるのであつて、或は下宿屋で起臥して居ても家の生命は自分の上に宿つて居るといふことを確信し、或は未亡人が家を嗣いだ場合には婦人であつても、祖先の生命と合して家を代表するといふことを考ふるのであります。

(六)家族制度の大本　家族の親しい意味合を押し廣げて行く美風であつて、最も大きな所に行けば御皇室を中心として、大きな日本といふ家を作つて居るのである。同一の天孫民族が集まつてそれが中心となり、其の後他より加はりしものは天孫民族によつて同化せられて行くのであります。

(七)統一的國家組織を維持す　建國以來曾て一度も國民の團結統一を破られたことはない、戰爭に於ては言ふまでもなく、思想の方面に於ても億兆一心と仰せられしが如く、一心同體の統一を維持して居るのであります。

結論

以上述べ來りし如く、建國の當初から有ゆる美點を發揮し來つたので、此の理想的國家の唱道者中には日蓮上人の如き偉人がある。儒者の側にも水戸光圀卿、山鹿素行先生、吉田松蔭先生等がありますが、儒者の側には深い哲學宗教の思想が欠けて居りますから、現代の要求に於て足らざる所が出來て居る。素行先生等の國家觀念は矢張相對的の國家を考へて居らるゝ樣に思はれるのである。一般に富國强兵といふ事を申しますが、唯富國强兵のみで國家の中心であるべき正義の觀念理想目的を忘れて居るならば、我國の本領を解せざるものである。儒教には深遠なる哲學宗教の思想が欠けて居るから、どうしても其の主張の中に遺憾な点がある。爲に一度西洋の思想が侵入すれば多年堅めた國家觀念に動搖を來たして、現今の如き混亂の狀態を現出するのである。然るに日蓮上人は宗教家でありましたから崇高なる信念と深遠な哲理の上より遺憾なく其の意義を整へられて居るので、博愛人道の如き國家より廣しと考へられて居る思想をも充分に消化し、又個人の尊重すべき所以をも充分に考察せられて天地の靈力をも併せ來り、近きより推して遠きに及ぶの方針を取り、之等凡ての思想は悉く國家の結合を中心とすべきを明白に唱道せられて居るのであります。即ち我れ日本の柱とならんと仰せられしはこの深意を表白したのであり、又絶對の眞理と雖も必らず國家を中心にせねばならぬ所以を喝破せられて、

國亡び家滅せば佛を誰か崇むべき、法を誰か信ずべき。先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし。

と仰せられたのであります。こゝに日蓮主義の特色は輝いて居る。此の如く上人に依れば高遠なる宗教道德哲學等一切のものが、理想的國家と調節せられて發展するのであります。又忠孝の關係に就ては我國民道德では忠を基とすべき所以を明白に主張せられ、時の執權北條氏に對しても、又當時權勢並び無かりし彼の一門に對しても、正義の觀念大義名分を欠いて居るのを堂々として御責になつて居るのであります。鎌倉の一門如何に權勢に誇るも本をただせば伊豆の土民なりとし、

隱岐の法王は天子なり、權の太夫は民ぞかし。

とか、或は北條義時は謀反人であるとかいはれて居る。當時學者も公卿も武士も悉く北條の權勢に畏縮して居た時であるが、正々堂々斯の如く大義名分を主張し、幾多の迫害艱難の中に毅然として所信を遂行せられた光景は、實に壯烈鬼神を泣かしむるの慨がある。かく日蓮上人は勇氣の點に於ても、大義名分を明にせられた点に於ても、軍人諸君の模範的偉人であると信じます。特に人道博愛を論じて國家を狹しと考ふる現代思潮に對しては、日蓮上人の國家觀念は天日の暗を破るが如きものでわつ

露光量違いの為重複撮影

て、こゝに切實に日蓮主義唱道の必要を感ずるのであります。（國友日斌吉田堅晴筆記）

教育と宗教

露光量違いの為重複撮影

て、こゝに切實に日蓮主義唱道の必要を感ずるのであります。（國友日斌吉田堅晴筆記）

教育と宗教

教育と宗教

（札幌教育會及在郷軍人會の爲に）

自分は第七師團の軍隊講話の爲め渡道したのでありますが、有志諸君の御盡力によりまして當地方の方々に思想上の御話を致す機會を得ましたのは、何より喜ばしき事であります。

教育と宗教との關係は重大なる問題で、此の解決には識者も苦んで居るのでありますから、私如きが此の問題に就て意見を申上ぐるは甚だ恐縮に存ずるのであります。併し今日は思想界の問題が極めて緊要なる場合でありまして、而して國民思想を喚起するに直接あづかる所のものは教育家と宗教家であります。色々國家の爲に盡力されて居る人々はあるが、國民思想の涵養に就て直接任に當り居る者は教育家と宗教家であります。此の二者の間に意見の疏通を欠く事があれば、實に國家の由々しき大事であると信ずるのであります。夫れ故に私の御話する事に於て何等かの御參考に成ることもあれば、決して無益であるまいと信じまするので、自分の平素懷抱して居ります所見の一端を申述べて御叱正を願ひたいのであります。

此の教育と宗教との關係は我國に於ては未解決の問題であると云つても宜しからうと思ふ。教育と

宗教とは衝突すると云ひ、相當の學者が斯かる意見を發表致しましたから、多數の教育家は此の主張に贊成を表したのであります。今日も尙ほそう云ふ者に居る人が尠なからん樣に思ふ。又他方には宗教家夫れ自身に於ても宗教の立場は教育と違ふから、何處迄も宗教は宗教として任意の行動を執つても宜いものだと云ふ主張をなすのであります。其が爲め教育と宗教の關係は色々な主意に於て論爭せられまして、或人は學校の教育は全然宗教と分離しなければならぬが、社會教育の方面に於ては融和聯絡の作用を取らなければならん、其處に調和点があると論じ、或人は宗教には歴史的發達ありて形式を備へて居るから、此の方面は調和するとは出來ぬが、精神的宗教として形式を離れて宗教の實質に這入つて考へて見れば、教育と宗教の調和は根底に於て行はる可きであると論ずるのである。又異れる方面に歩みつゝあるまゝ互に能く牽制し合つて行く作用を有つて居る。例へば教育は國家を本位とするも宗教は人類を本位とし、又教育が社會を尊重する場合に宗教が個人性を主張し、教育が現世を尊重する場合に宗教が未來若くは理想を唱道する。斯の如くに反對の方向を辿りつゝ、宗教が理想に走せんとする場合には、教育が現實に引戻して來る。又教育が現實思想に依りて實利の方面に走れば、宗教が金錢を卑しむ樣に感化を與へて行く。丁度熱湯に水を注ぐやうなもので、教育に於て生活に必須の智識を與へ現實の思想が肉慾的に走れば、宗教は崇高なる信念を起させる。即ち牽制運動をやつて行く。其の間に人生の調節が圖らるゝのであつて、教育と宗教とは両立の必要ありとの議論も出て居るのでありまするが、私の考は是等の說は何れも間に合せの主張であると堅く信ずるのであります。是等の主意より進んで誠實に教育と宗教との關係を研究して、此の二大感化の歸着を統一して行くべきであると信ずる。此の間に正明なる大決定を與へねばならぬのである。多くの人はこの問題に關して今尙ほ不熱心の失を免かれないかと思ふ。

前述の所論も一應の理由はあるやうなれども、其は洵に外面的皮相的な見解でありまして、少しく實質に立ち入つて教育と宗教との本意を考へて見ますれば、根本的に確乎たる一致点が發見さるゝこと思ふ。

先づ教育の方面より考察しまするに、假令ば學校教育に於ても教育勅語を標準として行はれて居るべきは無論であつて、教育勅語は皇祖皇宗の遺訓に基いて定められ、其處には如何なる事が大切の問題になるかと云へば、我國の國家觀念は極めて理想の高いものであつて、建國の理想が實に堂々たるものであります。唯西洋學者の云ふ樣な淺近なものではない。大日本帝國の建國の理想は所謂宏遠にして且つ深厚である。宗教は人類を本位とし教育は國家を本位とすると云ふ風に、明白に二分せらるゝやうな貧弱な意味の國家ではない。日本の國家には宗教的の深遠なる理想も含有されて居るのであ

ります。日本の御國體は神勅より起つて居る。天の靈力が國家に下つて居る。又我が國には天祐がある。天祐を保全し給ふ所の萬世一系の　天皇を戴いて居る。此の天祐の觀念は科學者の學說を以て理解し得べきでない。又日本の國家は天地の公道に照らして建設せられて居る。決して權力關係のみによりて建てられたものでない。此の日本の理想的なる國家觀念はその內容が深遠であつて、西洋學者の云ふやうな宗敎と對立して居る相對的のものでない、絕對的包容的である。『國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ』と仰せあるは、普通の國家學に云ふやうな國家の起源目的にあらざるを宣し給ふたのである。

今國家學を見るに國家の起源を說明する學說が六種程ある。第一は天命說、第二は契約說、第三は征服說、第四は家族說、第五は歷史說、第六は心理說である。此の六說の中に於て日本の國家は如何なる意義によりて建設せられたか。此の國家の起源を充分に明かにして、我が理想的國家に就て徹底せる見解と信念とを與ふるが敎育の第一の本分ではないか。

第一の天命說は、國家の起源が天意を承け天命を奉じて建てられたるものと主張するのであつて、唯人間の力に依つて建てらるべきものにあらずと云ふ。これは西洋に於て基督敎が勢力を得て羅馬法王が政治を支配することゝなり、神の許しを得て國王が之に代つて政治をなすと云ふのであります。

故に國家は神の精神を奉じて政治を行ふべしと云ふのである。この宗敎政治が千年間の長きに亘りて歐洲の國家を支配したものであります。即ち敎會政治である。敎育も敎會敎育である。斯の如く一切の社會の事が宗敎の支配下に移りました爲に、國家の主權は神の精神を行ふ爲の名代に過ぎぬと云ふことに至つたのであります。

第二は契約說である。これは人民が契約法律を作つて、之を執行するために國家に主權者を設くると云ふのであります。之が西洋の民意を本にした政治で、人民の契約を本として法律を作り、之を根本として國家に主權者を設くると云ふのであります。此の主意で作り上げた所の國が西洋では文明國と稱して居るのであります。主權は法律に依つて規定された範圍外には少しも權力を行ふ事が出來ぬと云ふ極めて制限されたもので、此の契約の範圍に依つて主權者を立てることになつて居ります。

第三は征服を以て國家が始まると云ふことを主張するのである。即ち或る民族が他の民族を征服して勝つたものと負けたものと出來る、其處で勝つた者が主權を得て其處に國家が成立つと云ふのであります。此の征服者被征服者の關係がなくしては國家は成立たない。即ち勝者法を授けて國家が成立つと云ふので、世界各國の國家の起源を調べて見るに、何處の國でも此の征服の意味を含んで居らぬものはないと云ふことを嚴格に主張して居る。スペンサーは盛んに此の說を主張し、加藤弘之博士も

同じくこの征服説を取つて居る。故に日本の國家も征服に基くと云ひ、我が國民に惡影響を與へたのである。

第四は家族説であるが、これは一家の子孫が增殖して分家をする、夫れが澤山出來て、其處で之を統一する家長權が遂に一國の主權者となつたので、この家長者と家族との關係を擴大した所に國家が成立つと云ふのである。我が日本は家族制の發達だと云ふ説もあるが、決してそう云ふ意味の國家ではない。文部省では盛に家族説を主張し、多くの學者は此の家族説によりて國家の起源を説明して居るのである。一往見ればそう云ふ意味も無い譯ではありませんが、決して全き説でない。日本は諸種の民族が最初より寄り集つて建てられて居る。今日では天尊民族の外に朝鮮人も支那人も居る。ギリヤーク人も居る。生蕃人も居ればオロッコ人も居る。是等の民族が御皇室の御聖德の下に赤子の如くになつて寄り集つて來て居るのであります。故に天尊民族のみが子を殖して發達した國と云ふことは出來ぬ。又天尊民族のみを以て將來發達を圖つて行くべき御國體でもない。如何なる民族をも包容せらるゝ國家である。之は維新以前の如く消極的に國家を維持して居る場合は家族説も大害なしと云へるが、開國の國是によりて將來益々發達して異民族を包容する時に、家族説は決して贊成すべき説でない。

第五は歷史説である。これは契約とか征服とか云ふやうに一部分のものから國家は起つたと云ふことを認めない、人類發達の歷史上に國家を生み出すので、國家は人類發達の產物である。人間が自然界に生活して行くには勞力を要する、而して結合を要する、かくて人間の歷史が基となつて團結の必要上國家を生み出したので、即ち國家の起源は人類の歷史に依るのであるとして居る。これは最も確乎たる眞理として多くの學者が採用して居るのである。

第六は心理説である。これは歷史説と同じことを主觀の方から見たのである。人類は團結性を有つて居つて、國家を作るべき本能を有つて居るのである。人間は國家的の動物である。國家を造り出す性情を備へて居ると云ふが心理説である。人間其の者の性が基で人間の心理主觀が國家を作つたものであるとする。之を客觀的に云へば國家は人類の歷史上に發達したものであるとも云へる。人類學者なり、歷史學者の方から見ると客觀的に歷史説であり、心理學者の主觀的から見ると心理説となるのである。

私の調査した國家の起源に屬する學説は此の六種である。此の中で日本國の起源は何れの説に屬するかと云ふに、之を我が國歷史上の事實から見ると征服の狀態がない譯ではない、神武天皇の東征に由つて日本の國家が始まつて居るとも云へるし、又天尊民族が擴大せられて居るからこの方面に於て

見れば家族説にも一理ある。故に征服説も家族説も全然根據のない説ではないが、更に考へて見ると我が奉戴して居る御皇室の尊嚴は、家族的に段々播殖して來た意味のものではない。又征服と云ふことは歴史の一面に現れて居るが全部でない。神武天皇と申す御名は唯の武力でない、即ち『神の武』である。唯腕力が強いと云ふの意味ではない。何者も御聖德に心服すると云ふのであつて、劍のみを以て制するのでなく、神德を以て心服せしむるので、即ち八咫の鏡の如き聖德を以て敎導し給ふたのである。又叢雲の劍を以てすれば火が向ふへ行くと云ふやうに非常に神聖なる意味がある。此の神武の意味は一種云ふ可らざる聖德に據つて國家を平定し給ふたので、多くの人民が之に敬服して集まつたのである。即ち天皇の御稜威に服したのである。此の崇高なる神德があると同時に一方に武力を有し給ふて之を成就せられたのである。故に之を腕力的征服の一のみに見るが如きは、我國建國の神聖なる意義を忘れた學説である。假令博士の説でも我建國の事實に悖るが如き學説には同意することは出來ぬ。博士には白魚の博士もあれば、蚤の博士もあると云ふことを耳にするのである、全躰を總括して達觀することを忘れてはならぬ。段々考へて見ると日本建國の意義は先に申す第一の天命説であると思ふ。併し乍ら耶蘇敎の天命説と同一のものではない。敎會によりて神の名代としての許しを得て國王の資格が備はると云ふ樣な、一種の天命を傳達する職分を宗敎家が握つて居ると云ふやうな事は、日本には絶對にあり得べきでない。天命が宗敎家と云ふ仲介人の手を傳ふて來るのでない。又支那の天命説を見れば其時々によつて遷り變つて行くのである。支那は今日迄に三十七も姓を易へて遷移して居る。其の天命が他に移轉すると云ふ事から易姓革命が起つて、度々王者が易るやうになつて來たのである。所が我が大日本帝國は天命が神勅に依つて定められ、此の豐葦原の瑞穗の國は神の子孫の知ろしめし給ふ所で、天壤と共に窮り無からんと仰せられ、神武天皇を始めとして御子孫が世々統治され、而して天津日嗣は益々彌榮へまして以て今日に至り、曾て何等の變遷もない。今日迄嚴然凛乎として承け繼いで來られて居る。近來は科學萬能に囚はれた者が多いから、我國の國家の起源に就ても神秘の意義を切り捨てゝ、征服説や家族説を取るに至つたので、御國體の無上莊嚴なる意味を充分に會得することが出來ぬのである。何も外國の學説や宗敎によりて我建國の神聖なる意義を捨つべきでない。何處までも建國の事實と國家の生命とを尊重し、我が國の基礎を鞏固にすることは、國民一致の根本的の目的と云ふべきである。而して我が國家の中心生命は正しく御皇室に存するは云ふまでもない。元來天照大神は私の心で天孫を御降し遊ばされたのではない。多くの民草を如何にして護ることが出來るかと云ふ神慮に基いて、天壤無窮の御皇室が成立つて居るのである。人民の契約に基いて成立つたと云ふやうな國家ではない。天津日嗣を御降しになつたのである。而して如何な

る人が出ても御皇室の尊嚴に較ぶると洵に微弱なもので、御皇室の御稜威の御德に對しますれば微々たるものである。假令ば仁義禮智信を全うした聖人でも、此の無限の皇統に對しては比すべからざるものである。此の信念が籠つて居る神聖な國家であつて、宗敎の聖者が尊いとしても、夫れ等の德を以て御皇室の尊嚴なる意味を更ふることは出來るものでない。又武力を以てしても之を侵すことは出來ない。足利尊氏が武力を有しても、南朝は微々たる境遇にあつても、皇統の神聖、南朝の正統を犯すことは出來ない。若し武力で皇室を冒し得るものとせば主權は北朝に移らなければならぬ譯である。之が出來ない、其處に大和魂の精華が存する。此の皇統の神聖を擁護するが我國民の神髓であり、生命である。若し强力主權と云ふならば尊氏の時に北朝の方を取らなければならぬのである。此の一種微妙な皇統一系の天命說が建國の事實をなして居るので、西洋の國家學者の思ひ浮ばざる所である。彼等には日本の建國の理想事實の妙致は理解し難い所のものである。又支那の聖賢の學問にありても此の點は明白になつて居らぬ。孔子でも孟子でも充分に理解せざる所の靈妙なる國家である。孔子が春秋に於て大義名分を正したる見識は幾分かは日本の御國躰に合一し得るが、何分支那は萬世一系の國體を有たぬから仕方がない。大義名分を徹底することが出來ないのである。

扨て敎育家の第一本分たる此の國家觀念の根本に於て、直ちに明白に宗敎性の必要を感ずるのである。然るに我國現時の多數人が敎育と宗敎とは直接關係なきものと思ふは淺見も亦甚しと謂はねばならぬ。宗敎心の必要を感せざるは我が建國の本義を知らざる盲目の失である。日本の建國は前述の如く神聖にして且つ靈妙なものである、其處に國民に宗敎性を要する。然るに敎育と宗敎とは衝突するかの如く考へ、宗敎心を輕蔑するの結果、我國民道德の根本を覆さんとして居るのである。此の敎育と宗敎との關係は在來の學說に放任せずして、更に新しき考察を以て研究されんことを國家の爲に切に希望する次第である。

尙ほ進んで考へると、日本の國民道德に就ても勅語の中に『克ク孝ニ』と仰せられてあるが、日本の家族制度の孝と云ふは只親に孝行をせよと云ふだけのものでない。家族の中心とも云ふべきは祖先の生命の存續である。祖先の生命が其の家に傳つて居ることが家の中軸として尊敬するのである。第二には家名を尊むことで此の二点が根本である。故に其の家の主人であり親であると云ふは、祖先の生命を表現する所の代表者である。卽ち死んで逝かれた祖先が現に存續して居るのである。其の祖先の靈は皆生きて居つて現在家長者の頭に傳はつて居るのである。之を國家の上に例へて見ると、現世にまします　今上陛下は孤獨で在しますのではない、　今上陛下には皇祖皇宗並に歷代の神靈が傳はつて居らるゝのである。其處で我日本國は萬世一系の歷史を有する許りではない。皇祖皇祖並に歷代の

神靈が　今上陛下の上に生きて集まり在ますので、下は國民を守護あらせられ、外に向つては國威を八紘に輝かし遊ばすのである。故に　今上陛下に對し奉りては、皇祖皇宗並に歴代の神靈が皆集つて居らるゝ御身體であると云ふ意味に依つて、絶對の敬意を拂つて行くのであるが、今家族制の方にては家長者は祖先の靈を表現して祖先の靈を一身に集めて居るから、家族は之に尊敬を拂ひ服從を捧ぐべきであり、又家長者は祖先の靈を戴いて事を行ふて行くのである。夫であるから親が死亡して兄が家督を繼いだ場合に於ても、弟は唯の兄として敬ふのではない、親父に代り又祖先を代表しての家長として尊敬し行くので、以前は兄としての尊敬であつて子としては兄弟であつたが、兄が一度家督を繼げば今度は唯の兄ではない、家の生命を表現する絶對の權威を有する故に、兄に對する態度が全然異つて來るのである。兄も又今迄の兄ではない、祖先の靈を表現して、祖先を辱めないだけの家長のことを行ふて行くのであるから、家族に對しても迂濶にふざける譯には行かぬ、悉く家族を服從させて祖先を辱めぬだけの家政を行つてゆかねばならなぬ。これが日本の家族制の主意である。此の主意を明かにされたのは吉田松陰先生である。先生は家族制の生命は祖先の靈に在るので、此の信念を子弟に起させるやうに敎育して行かねばならぬと論じ、忠孝傳や烈女傳を說く前に此の祖先の生命の觀念を與ふるが大切であるとせられた。更に先生は進んで一家に於て祖先の靈に背き、家名を汚すやうな者があれば、手討にして申譯をすべきであると論じられて居る。今日では法律上手討は嚴禁されて居るが夫は別として、何か祖先を汚すやうなことをやつても、親が愛に溺れて其の罪を問はぬは武士道の頽廢なりとし、松陰先生は息男でも息女でも手討にせよと主張した人である。此の手討は善いか惡いか別として、兎に角日本の家庭は斯う云ふ意味をもつて出來て居るから、家の名譽と祖先の靈とを忘れてはならぬ、これが我が家族制の精神である。

尙ほ松陰先生は自分の魂の宿る所を認めて居られて、死する前に明言して居らるゝ。自分の魂は平素至誠を以て勤王愛國のことに盡した硯がある。自分が死んだらこの硯に自己の魂が宿るから、硯を松陰だと思ふて貰ひたいと云はれた。故に今でも此の硯が萩の松陰神社の神體となつて祀られてある。自分は死んでも魂は此の硯に宿るし、骨は友人が拾つて吳れる。吉田家ではどうか此の硯を松陰の生命として傳へて吳れと云はれたので、誠に天下を感動させたものである。今日の敎育家も松陰先生の如くに、至誠にして動せざる者は古より未だ曾て之れ有らざるなりとの意を會得せられて、生命の問題を尊重せられたい。松陰先生は死に臨んで、自分は學問菲薄にして至誠天地を感格する事出來申さず、以て今日に至り候と絶筆の書に書かれて居る。之は精神の修養が足らぬから思ふたことが成就せんが、自分の至誠の鍛錬が足らないからであるとの意である。松陰先生は長州から江戸に囚へらるゝ

時にも京都の御所を拜して

聞說今上聖明德　敬天愛民出至誠

と詠じ、今の　天子樣の御聖德は、天を敬ひ民を愛し給ふこと至誠より出づと歌はれた。斯う云ふ至誠とか生命とか云ふ大切なことを除いて、學校敎育の方針を科學盲信の風に取るのは全体誰が定めたことであるか。かゝる大切なる國民道德の眞髓を學校敎育より除くは全く默過すべきことであるまい。日本建國の事實は先に述べた通り神聖靈妙であつて宗敎心と連結し、又家族制には祖先の生命を尊び、人々の上には誠心を尊びて天地を動かす至誠を本とす。此の如き忠と孝と誠との三点は國民道德の精華である、大和魂である。而して此の三点は何れも宗敎心と尤も深く連結されて居るものである。宗敎性を輕蔑する時其處に自らこの國民道德の妙致を顚覆するに至るのである。こゝに敎育と宗敎との不離の關係が嚴存して居ると思ふ。

彼のビスマークは云ふて居る、自分達の力のみで事を處し難き場合がある、此の一擧が國家の興廢に關すると云ふ時、右せんか左せんかと云ふ場合に於ては、自分の頭を以てのみ解決するは無責任である。至誠を以て天祐に依り決するより外はない。國家の存亡此の一擧によりて岐かるゝ時には何らしても人力のみで決し難き心地がする。天地神明に訴へ至誠天を貫くと云ふ精神を以て臨んで初めて

決行することが出來ると云ふて居るが、至言なりと思ふ。彼の東鄕大將が大海戰に際して露國海軍を擊滅したのも、戰畧其の他に遺漏違算は素よりなかつた譯であるが、併し乍ら萬一此の戰に於て敗を取る樣のことがあつたならば、滿洲の野に居る數十萬の陸軍が本國との連絡を斷たれ全滅して仕舞ふであらう。而して此の日本が亡びるかも知れぬ。皇國の存亡此の一戰に在りと云ふ危急に臨み、戰術と學說とのみに任すは不安である。こゝに至誠以て天に訴へられた。天祐を祈られて居る。而して是等のことを學校敎育に於て敎へることが何故出來ないのであるか。之を不可なりと云ふ理由が何處にあるか。而して是れ即ち宗敎性の淸新なる發動であつて、國民性の忠と云へる觀念は純乎として純なる時、宗敎に突入して居るものである。その極處妙致に行けば一種の宗敎性が活躍して居るのである。學校敎育に於て敎育と宗敎との形式上の分界を立つるは無論異議なきも、他面に於て國民道德の根本に於て斯の如き接觸點あることを能く理解して置かねばならぬではないか。

更に進んで敎育と宗敎との關係を論ずるのであるが、敎育に關しては勅語を服膺せねばならぬ。敎育勅語の中に『恭儉己を持し』『智能を啓發し德器を成就し』とあるは個人の人格完成に於ける詔勅で、『一旦緩急あれば義勇公に奉じ』とあるは國家觀で、『博愛衆に及ぼし』とあるは社會上の敎訓であり、兼ねて『之を中外に施して悖らず古今に通じて謬らず』と仰せられしは天下の公道を擴めて行くので

あるから、教育勅語の精神は個人も家庭も國家も社會も人類も天地の公道も皆備へられて居るが、其の中心を國家皇室に忠なる所に定められたのであると思ふ。單に教育は國家を基とし宗教は人類を基とすると云ふ分界を立てゝ劃然と區分するは、教育と宗教の關係を謬まるものではあるまいか。

さて教育と宗教との關係を一層明白にするには、如何なる順序に論明すればよいかと考ふるに、今日の教育では智情意の教育と云ふことになつて居りますから、この三方面に亘りて論明すれば頗る明白に相成ることゝ思ふ。故にこの順序を逐ふて論じて見やうと思ふ。

今日我國の學校教育に於て宗教を如何に教へて居るか。二十世紀の文明は少くとも智識と信仰との關係を明かにし、智育の上に於て方針を立てゝ幼少の時から教へ、而して宗教に對する適當の智識を發達させて行くべきではなからうか。現下我國の學校教育の方針では之を許すか何うか。或は幼少の時から宗教を教へたならば迷信に傾き易いとして、智識を尊重する上からして之を不可なりと云はんか、宗教觀念を適當に發達せしむることは出來ないことだと思ふ。何せならば智識と云ふ其の中にはコンモンセンス即ち常識と、サイエンス即ち科學と、フヰロソフヰー即ち哲學とがあり、常識は常識としての價値あるも科學の智識に對しては常識は順はねばならず、又科學の智識も場合に依りては常識を尊重せねばならず、更に科學の智識は哲學の智識に依りて統一せられ、其の根據を與へられ、哲學は又科學より供給さるゝ材料を採用せねばならず、語を更へて云へば常識と云ふも譯の分らんものでは不可ぬ、科學に矛盾するを避け、科學と能く融合して常識の發達を圖り、以て此の常識を健全にして行かねばならず、又哲學の結論が智識の總計を支配して居るのである。而して現代の哲學は如何なる主義になり居るか。何人が唯物論を今頃主張しつゝあるか。世界の文明が齎らし來りたる智識は物心不二の心的一元でないか。何故に日本の教育に採用する智識をば今頃唯物論に根據を据ねばならぬか。そんなことを誰か定めたか。現代の教育は文明の進歩に打ち負けぬやうにして行かねばなるまい。此の場合に唯物思想などとは何事である。

西洋の學問も皆活動的心的一元で、東洋の學問は無論のことである。儒教も天道明德を說いて天は生々化育の靈德ありとし、天命を重んじ、斯くて宇宙には靈力ありとし、又我が神道に於ても天照大神の神勅より起りて我國家は成立して居る、我國の宇宙觀も又靈的である、西洋の文明にては唯物思想の時代は二百年前のことである。斯かる十七世紀の古ぼけた智識を學校教育に於て今尙ほ智育の根底に置かねばならぬと誰が定めたのであるか。斯かる根本的智識は大學校で調ぶべきで、小學校には何等關係のない問題とするは大なる誤解だ。此の智識の結論を尊重して之を根據に据ゑて小學校の智育の根本に置かねばならぬ。若し之を深遠なることなりとして相關せずとならば、唯物的科學の結論

も同じく高遠の問題だ。國民の大多數の者には小學校にて唯物的智識を授け、大學の中に文科の一小部分のみに心的一元の智識を與ふると云ふは如何なる譯なるか。是れ大に新考慮を要する所にあらずや。斯かる深遠靈妙のことは小學生には不必要なりと云ふか是れ大なる迷想である。此の非常な靈妙なる意義を兒童の概念に與ふるの必要は充分に認められるのである、今日の學校教育は如何なる方針を執つて居るか。智識を啓發すると云ふことに於て根本方針を確立しないのではないか。現代の智識教育の根底は一定しないのではないか。宗教と教育の關係は宇宙に靈力ありとの智識にまで進めば、宗教の神佛を信ずる人を嘲ける者はなくなるであろう。其であるから智識を啓發すると云ふ上に健全なる智育を理想したならば、宗教の信仰を尊重する者を生ずるは無論のことで、之が極めて人生上に貴重なことである。

夫れから意育の方面に於て論せんか、今日の青年學生は横着で困るとか、學問をした者が意氣地がないとか云ふ非難は殆んど定論であるが、夫れは軍隊での調査が尤も正確である。此の度も第七師團に參りますと、師團長閣下が云はるゝに、何うも教育を受けた人が弱い、此の事は講演の際に充分に言ふて貰ひたいとの御話であつた。斯の如くに教育を受けた者が弱いと云ふのは何が原因であるか。德器を成就すると云ふ上からすれば教育は意育の上に大なる責任を帶び居るものではないか。此の意志の力を培養して行くには信仰を確立する事程大切なものはあるまい。然るに科學の智識に盲從して宇宙に靈があるかないかと云ふとすぐ判らないから、隨つて國體の淵源たる神聖の意義も、光輝ある歴史の妙旨も信ずることが出來ず、大切なことが何れも分らんと云ふやうな事になつて來る。爲に現代の教育では强固な意志が立たない、勇氣も段々衰へて來るのである。一言で之を言へば信仰を與へざる所の科學のみに捉はるゝから意志が弱くなるのである。故に國民をして勇壯果敢の元氣を與へんとならば信念を尊重せねばならぬ。そうなると矢張り學說の上に於て宗教性を尊重する方針を確立しなければならぬでないか。即ち丈夫の精神を鼓吹する場合に於ては此の宗教性を籠めて來なくてはならなくなる。君國の爲に一身を捧げて盡すと云ふやうな場合になると、宗教性の籠つて居る崇高なる道義心に待たねばなるまい。即ち宗教信者は意志が極めて强くなる。一例を擧ぐれば日蓮上人が愈々斬られると云ふときに、頸を延ばして手を合せて心靜かに、此程の悅びを笑へよかしと仰せられたは、全く宗教的信念の發露に外ならぬ。宗教の信仰なき人は人生の根本も、久遠不滅の生命も判らぬから弱いのである。彼の藤田東湖は死んだならば神となつて勤王の大義を果すと云はれて死を恐れなかつた。之は天地の靈氣と自己の生命の不滅とを信じて居たからで、矢張り一種の宗教的信念を有つて居たので、天地の正氣と進退を共にする者で居た。此の宗教的觀念がない者は死んだら最期何も出來な

いと云ふやうな卑怯未練の考のみが熾んに起るのである。何うしても人間に神聖なる勇氣を鼓舞作興せしむるには先づ信念を與へて、此の信仰の上に生命の不滅を信じさせるが根本問題である。何を若んで生命の不滅を否定し、而して薄志弱行の徒を出すか。假に現代の研究では何人にも靈の問題が判ちんと云ふならば、之を學校に於て肉體は死んでも魂は不滅であると定めて敎へてもよいではないか。吉田松陰先生などのことを學校に於て敎へる際に、靈が現に宿ることなど敎へたらよいではないか。戰死者の靈は招魂社に祀つて年々招魂祭を行ふて居るではないか。大典を以て戰死者の魂を祀つて居るのは、靈魂の不滅を信じて國家がやつて居る證據でないか。故に吾々が死んでも魂は滅びるものでないとして、此の觀念を明かにするやうに學校に於て敎へることが何故出來ぬか。誰がそんなことを主張して學校敎育から靈の力を除いたか、國家大典の理由を學校に於て敎へなかつたならば、將來大和魂を養ふ上に欠くる所があるではないか。

次に感情敎育の上に於て人の情を養ふとか、自然の美を樂むと云ふ感情の發達を謀るに就て、宗敎が何う云ふ關係があるかを熟慮すべきである。自然主義の文學が起つては國民が段々墮落して居るではないか。藝術の方では新派とか云つて文弱の弊を助長しつゝあるではないか。又劇場に於ては卑猥なものを人が多く喜んで見るやうになつて居るではないか。之は國民の感情の墮落した證據である。

藝術は感情のものであるから次第に崇高に導いたならば、自ら人間の感情を高潔ならしむることが出來ると思ふ。而して其の根本をなす者は宗敎的感情である。宇宙の靈力なる神佛を信ぜしめ、人間の感情を崇高にすると云ふことは、感情敎育には最も大切のことではないか。其處迄の敎育を學校で施すことが出來ないとしても、敎育の目的を遂るに大關係ある宗敎の觀念までも、學校敎育に於て排斥せんとして居るは何故か。我々は茲に於てか國家の爲に大に宗敎性の必要を說いて、大々的に宗敎觀念を最高度に發揚しなければならぬのである。宗敎家としても敎育家としても、宗敎性の健全なる開發は如何にして成し遂げ得るかと云ふことが、同樣に必要なる國家の爲め人生の爲めの問題となるのである。

斯る譯であつて此の智情意の三方面から考へて見るに、智育の上にも現代智識の結論は宗敎に近づいて居るものであり、意志の方面には勿論信念を要し、又感情の崇高と云ふことには宗敎心ほど大切なものはない。故に此の意義に於て研究を進めねばならぬ。

夫れから他の方面から考へて見ると、人間一切の德の根源が何處にあるか。此の道義心の發源点は如何。仔細に考察するに儒敎では誠心と云ひ、敷島の道では大和魂と云ひ、日本道德の發源點は茲に存して居る。之が國民性を造つて居る所の根本である。之を大和魂の上から見るも宗敎の信仰と頗る

連續して居るのである。佛敎にては『信は德の母、道の元め』と云ひ、一つの信念が一切の道を行ふて行く基となると敎へて居る。其處で學校で智育德育を仕遂ぐる上にも、人間の人格を造る上にも、大和魂と云ふ包含的なものを尊ばなければならぬ。之は一切の道德を發現する根本である。軍人の勅諭には忠節も武勇も五箇條何れも、一の誠心から出たものでなければ用をばなさぬと御示し遊されて居る。此の一誠が人格の中心である。而して之が頗る宗敎的の意味を有つて居る。宗敎と云へば何だか別箇のもの丶意味に取る人が多いが、決して宗敎とて全然別のものではない、天の道に基くものである。此の天の道に依つて人生の道が養はる丶と云ふことである。誠心は　先帝陛下の仰せを拜すれば

目に見ゑぬ神に向ひて耻ぢざるは
人の心のまことなりけり

とあり、上古史を見れば大國主尊が自分の魂を神社に祭られて居る。佛敎では人間の德は凡て自分の方にある所の佛性より發現すると說く。此の佛性あるが故に佛敎に對して接觸して來るのである。敎に宗敎性が大和魂と關係あることは明かである。然るに絕對の靈力なり、人間の明德から來る所の此の誠心を尊重せぬは道義の發源點がなくなつて仕舞ふ。人格の中心を確定することが出來なくなつて來る。然るに多くの敎育家が『心だに誠の道に契いなば、祈らずとても神や守らん』と云ふ古歌の意を誤解して、自分のみで誠を得らるゝやうに心得て居る。此歌を仔細に吟味せよ。即ち天の道に眞心が契合するならば、祈らずとも神樣は護つて下さると云ふので、之は誠の本を客觀的に見て居ることが明白である。

此の誠心を得て親に向つて仕へ、又祖先の靈を大切にすることが吾が家族制度の神髓で、孝は此の誠心より生じ、女房小供を愛し、夫婦相和すと云ふのも皆此の誠心から出る、双方の誠が通ふて茲に初めて一家の和合は出來上るので、大御心に於ては國民を愛し給ひても、國民の誠心がなければ我國の美風は成立しない。故に國民は大御心に報ゆるの觀念誠心を喚起することが大切である。無限の大御心に基いて國家の生命は成立つて居る。之に報ゆる國民の誠心が即ち大和魂で、國民の誠心が大御心に結び付いて居る以上は、此の日本國は千代八千代に榮へ行くことを疑ひないのである。斯の如く偉大なる關係を有する宗敎性を蔑視するからして、今日の如く腐敗墮落のことが各方面に生ずるに至つたのである。今日女子敎育上に諸種の困難を生ずるのも、祖先の靈の存在が家族制の生命なることを忘るゝからで、今の新婦人と云ふやうなものは祖先の靈の存在が家の生命であることを少しも知らないのであらう。

又心理學者の研究する所に依れば、十二三歲位から十六七歲位迄の內に此の崇高なる宗敎性が發現

して來るので、卽ち男女共に十二三位から十六七歳迄に誠の心が起り、佛性の力を覺り、本當の人間が生れるので、此の年齡に至ると立派な人にならうと云ふ觀念が自然に起つて來る。其の時は崇高なる道義心、高潔なる信仰心が勃發して來るのである。其の時には家庭に於ても、學校に於ても、種々有益な質問を試むるやうになる。必ず何か宗敎的心靈的のことを尋ねるやうになる。平素子供だと思つて居るものが何か大きな問題を提げて質問する。不思議に思はるゝことがある。學者も卽答に困るやうな問題を持つて尋ねることがある。小學校時代に生徒から哲學上の問題などで質問を受けることがあるに相違ない。其の時に先生が答辯に苦しむ。自分が分らないから曖昧な答をする。夫れが兒童の精神の感化を誤り、延ひて惡い影響を後年に殘す基になる。諸君の家庭に於ても注意すべきことで、子供から哲學者でも答辯に苦しむやうな大問題を持ちかけて來るから、此の場合に於て曖昧に敎へず、最も神聖なる解決を與ふれば子供は本當の考が起つて、立派な人間になるのである。何を云ふかと云ふやうな考で、能い加減に誤魔化して仕舞つたなら、夫れが本となつて惡い人間が出來る。此の宗敎・性は實に包含的な靈妙性である。人間萬般の美德善行の根源である。之は必ず敎育に從事して居らるゝ人は經驗することであらう。此の宗敎心を萌芽の時に摘んで仕舞つては、後日容易に發生するものでないから餘程注意しなければならぬ。十八九歳の年齡からは男女異性の慾が起つて此の靈妙性を蔽ひ、劣情に支配されて來る。此の情慾の發生する以前に此の崇高なる靈妙性の發芽を培養して置かねばならぬ。然るを却て學校なり家庭なりで、此の宗敎心の萌芽を摘み去る時は、容易に再び其の芽が發生しない。此の時期を經過して仕舞ふと夫れきりで再び同一の芽が出て來ない。此の時を經過して後に父母が氣付いても駄目である。然るに今の父母は既に自分自身が宗敎心に乏しいから子供を適當に導くことが出來ぬ。此の肝要の時代を學校にても家庭にても迂濶に經過して、子供が惡い風になつたと云つて後に心配しても追付かぬ。故に十二三歳より十六七歳までの時期に充分注意して、崇高なる道義心高潔なる宗敎心を養ふて行かねばならぬのである。

此の靈妙性の開發に關しては學校に於ける敎育家の責任は重大で、宗敎心の萌芽を學校に於て摘むと云ふことは、實に學校の責任上免ることの出來ぬ大罪である。故に敎育家は將來大に注意を要することで、此の事たる一個人の人格の中軸を破壞するに止らず、延いて國家を覆沒する源泉になる次第であらうと信ず。又歷史を信仰する觀念も能く養ふて行かねばならぬ。研究することも大切であるが、其處に信念を與へねば何にもならぬ。

他面に宗敎に對しても注意すべき事は迷信の害を去るべきことで、迷信に陷つたならば文明の進步を阻害し、敎育の効果を沒却し、社會を茶毒するに至る。故に宗敎の信仰には嚴格の意義に於て健全

なる信仰を發揮しなければならぬ。此の宗教性を尊重せよと云ふは宗派とか僧侶のために云ふのでない。宗教心を否定するために不良少年が增加し、犯罪者が多數となり、其の他種々な弊害が續生し、其の結果會社なり其の他の事業が潰れると云ふやうな惡影響を悲しみ、國家をして健全なる發達を遂げしめんが爲に宗教心の尊重を唱道するのである。今日の宗教家には社會國家を毒するやうなことを行る者も少からず、國家が何うとか、民心の將來が何うとか云ふことは少しも心配して居ないものもある。之は無論大覺醒を促すべきであるが、社會の爲に國家の爲に善良なる國民を造る上に、純乎たる宗教性が如何なる關係を有つて居るかと云ふ考察から、人生と國家の前途を思ひ、深き注意を此の一點に拂はれんこと希望するに外ならぬ。此の宗教性涵養如何は國民の忠君愛國の觀念を喚起し、又國民に勇氣を鼓舞する上にも必要であるから、宗教性の涵養には大に力めねばなぬ。教育家に要求する所は少くとも宗教性の萠芽を摘み去るなからんことを希望する。

前にも述べた通り宗教の方には迷信に流れることは大に誡むべきで、迷信の害毒は實に多大なものである。迷信に走ると衛生觀念にも衝突するやうなことがあり、學校教育の効果を溝らげ行くことにもなるから、此の迷信は許すべからざるものである。大体に於て學校の教育を翼賛して教育の効果を補けて行くと云ふ考を持たねばならぬ。教育の本旨は　先帝陛下の勅語に依つて明白であるから、宗教家としても之に悖るやうなことをしてはならぬ。又宗教家は政治上からの冷遇や、教育家の偏見に憤つてチヨケ根性を起してはならぬ。正々堂々の歩調を保つべきである。宗教家は如何なる場合に於ても迷信を助長して、智識の教育道德の教育に逆行してはならぬ。信仰は宗教家の獨占物の如く思ひ、又教育家は國家を獨占物の如く思ふは大なる謬見誤見である。人を迷信に導くやうなことを爲すものあらば斷乎として僧籍を剝奪して仕舞へばよい。夫が爲の管長なるものを設けられてある。ツマラヌ事を爲す者があれば直ちに僧籍を除いて仕舞へばよい。而して國民精神の影響如何に重きを置き、更に進んで宗教界の改善を圖らなければならぬ。今の神道佛教の中には隨分迷信を助長するものが居る。國家の前途を思へば先づ政府も教育家も迷信を助長する宗教家に向つて痛擊を喰はして行かねばならぬ。此の方面のことに手緩いのは要するに思想問題を重視しないからである。

又宗教信念の中に厭世の精神を助長するやうなものは甚だよろしくない、大に戒めねばならぬ。厭世思想が起れば神聖なる宗教が破壞されて仕舞ふ。故に政府に於て是等の方面を取締ると云ふは贊成である。國家の害となる宗教家の行動はドシ〳〵改善して行くが良い。宗教家が自覺すべきは嘗然なるも、一方から云へば之が出來ぬは政府の腰が弱いからで、厭世思想なるものは全く社會を破壞するものである。近來の社會主義も一部の原動力は厭世思想の變形したものである。社會主義は國家を打

破し、財產制度も打ち毀して、權利財產を均等にすると云ふやうな空想で、國家の政治迄も廢しやうと云ふのであるが、此の社會の向上發達には非國家的社會主義と、國家的社會政策との別を知るべきで、社會主義は一方極端なる物質主義であるが、又他方からは厭世思想が助成するのである。彼の逆罪者の內には死の宣告を受けた病人が數人あつた。幸德も菅野も其れであつて、何うも日本の目下の狀態は厭世的思想が青年に多數あるやうに思はれるから、厭世宗敎は大に改善を促すべきで、場合に依れば踏み潰して捨てゝ仕舞ふがよい。是等は誠に國家の健全の發達を傷くるものである。

又獨善的の宗敎は敎育と一致しないものである。孟子なども云つて居る

欲レ潔(シテセント)二其身一(ヲ)而亂(レ)二大倫一(ヲ)

と。君臣義あり、父子親ありと云ふ忠孝の大義は、人間の大切なる道德である。之がなければ禽獸に等しと云つて居る。其の身一人を潔うせんと欲して忠孝を忘るゝは大罪なり、敎導職の任にあるものにして何等社會を敎導しないものがある。斯う云ふ隱遁主義に甘じて國民を導く活動を怠るは、是れ亦許すべからざる所のものである。社會敎育には少しも力を竭さぬような宗敎家は捨て置き難き弊害である。刻下の急務として活動勤勉の風を要求せねばならぬ。故に宗敎は獨善主義のものであつてはならぬ。國民精神の發揮に努めなければならぬ。遺憾乍ら健全な理想の宗敎家は今日の處極めて乏しいのである。却て國家社會の秩序を傷くる樣な迷狂の思潮が近來段々生ずるやにも思はれる。而して現代に注意すべきは宗敎に依る惡弊と、西洋カブレの文學の惡弊とは相助けて國害を釀しつゝあるにあらざるか。之を此の儘にして置くならば、日本の國家の前途を誤る者は是等の思想中から發現するのではなからうか。前途甚だ憂慮に堪ねん次第である。今年の地方官會議に於て文部大臣は斯う云ふ訓示をされて居る。『敎育は國家を基とし宗敎は人類を基とす』。私は思ふ斯樣に明かに分界を立つる事の出來得る者か何うか。恐らく文部大臣は研究の上で確かに分界し得ると見て訓示された者ではあるまい。少しく言葉が足らぬ。文部大臣は敎育と宗敎との分界を斯う云ふ風にしたならばよからうと思ふて、此の訓示を發せられたのであらうが、敎育は國家を基とし宗敎は人類を基とすると云ふのは實に明白で、明白過ぎはせぬか。敎育は國家を基とすると云ふは異議なかるべきも、理想的の國家は人道正義を顧みず天地の公道を無視する者でない。否國家の力を以て人道正義を扶翼し、天地の公道を發揚して行くべきである。又宗敎も完全なる意義に於ては人類を救はんとする博愛の精神と同時に、國家の發達を翼賛して行くべき者ではあるまいか。現今の世界は國家を離れて別に人類あるにあらず。故に人類を救はんとの精神も之を蔑視せんとするに當りては、それ〴〵の國家と調和して、その國家的經營と調節されたる範圍に於て救濟の目的を果すべきではないか。斯くて理想の國家と完全の宗敎

とは一面に於て異れる分域あるも、他面には尤も能く和協してその目的を達成し得るのである。故に教育と宗教との事業に於ては分域を異にするも、根本的に極めて密接なる關係を有するのである。學校に成立宗教の容れ難きは歴史を異にし形式を異にせる諸種の分派ありて、其の教義に於ても人類本位のまゝにて、一向國家との調節を考量せざる幼稚のものもあり、又現實を輕視して厭世の思想を吹き込む如き害毒あるものも存するから、一概に學校教育に宗教を採用することは出來ないのであるが、單簡なる考を以て宗教は人類を本位とし、教育は國家を本位とするから、相容れぬと解して、一切の宗教が人類本位のまゝであり、教育が人道も天道も顧みないで貧弱な國家思想のみを吹き込むものゝ如く解するは、非常な謬見ではあるまいか。理想的の國家の中には一種の宗教性を要し、又確かに宗教と同一の目的同一の神聖を包容して居るのである。又宗教としても絶對の信仰を維持しつゝ幽妙なる意義に於て我御國體を扶翼するものが存して居る。之に反して頗る御國體に一致し難き宗教もあらう。教育と云はず政治と云はず學術と云はず宗教と云はず、苟くも世界無比の御國體を毀損するが如きものは、文學の衣に隱るゝも宗教の衣に潜むも斷じて容認すべきでない。

これは（札幌タイムスの切抜）札幌に於て出來た問題であるから、札幌に於て解決し置きたいと思ふ。此は海老名氏の講演を掲げたものであるが左の如く論せられて居る。『根本的に人類を基と爲す者に至りては佛教と基督教とより外にあらざるや必せり。人類を基と爲すの宗教は最も發達したるものにして、高尚幽遠なる思想は其の内に含有せられ、毅然として歴史上に其の光を放てり。基督教が我國に入りてより忍び難き程の迫害を蒙りしは、實に國家を基とせずして人類を基とせしに基因せり。加藤弘之老博士の辯難攻撃を敢てなしたる皆此處にあり。佛教は元來は人類を基となしたる宗教なりしが、漸次國家的になりしの故を以て、彼等に對する迫害は絶て見ざる處なりき。然るに今回文部省に於て曩きに人類を基とせるの故を以て、迫害の的となり居りし基督教を承認するに至りては、基督教に取りては實に勝利の榮冠なりと云ふべし。』この海老名氏の論で見ると、人類本位の宗教が勝利の榮冠を得たと云ふことであるが、人類救濟の精神と國家擁護の精神とを調節的に教ふる宗教を低しと見たるは、宗教觀としての誤解のみに止まらない、確かに我が理想の國家を會得せざるの見解と思ふ。斯く文部大臣の一言を捉へて教育と宗教との分界を骨張するは、國家觀念に於ても他面に博愛人道と融即する意義あるを忘れたるものにして、宗教としては固陋の見解たると同時に、國家觀の意義を誤るものである。今日の健全なる教育は國家の發達の中に人類の文明幸福を包容するものであらねばならぬ、宗教の方に於ても人類を救ふの精神と共に國家の發達を扶翼する感化を忘れてはなるまい。斯くて教育と宗教とが表面は異るも、行ひては極めて密接なる感化の目的を一にする點が存して居るの